お家に帰ろう

バナジウム天然水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
お家に帰ろう

【Ｎコード】
Ｎ３８７９Ｑ

【作者名】
バナジウム天然水

【あらすじ】
この小説は複数の物語を使う可能性が高いです。また、オリジナルの世界観による設定があるので、原作の忠実な再現を求めている人には不向きかも知れません。
それと主人公は原作知識はなく、原作に介入することもあまりないと思われます。
どちらかというと、原作でスポットを浴びていない所が中心になる可能性があります。
なので、原作に登場していないトンデモ設定、人物が出てくる場合

があります。
以上であらすじ終わり。

ep. 01　世界と私と子鬼と真実

物語の中へ入れるとしたら何をするだろうか。

根幹への介入？それは確かに惹かれるものだ。納得のいかないシナリオを覆す、好きなキャラと恋仲になる、主人公の道を征く。現実では喩えなしえようとも、それを認めることはできまい。物語りだからこそ主人公が存在し、ヒロインが生まれシナリオが紡がれる。しかしてそれを知るのは読み手側のみ。しかし、物語の中へ、しかも既知の物語の中へ入れるとしたら……どれも魅力的な解ばかりだ。

しかし、私は――――。

師走の上旬のことである。いよいよ寒さも攻勢に乗り出し、地方によっては初雪が舞い降りる頃、私はコートを着込み近くのスーパーへ買い出しに来ていた。

時刻は１７：００を過ぎて通りは私と同じく買い物帰りの奥さまと帰宅中の学生でにぎわっている。私も特売品で猛者としのぎを削りながらも満足のいく品物を買うことができ、今日の晩ご飯の献立を考えながら炬燵とアイスの待つ愛しの我が家へ足を運んでいた。

（お肉と魚介類が安いのは素晴らしいな。今日はお鍋にしようか？それともお好み焼きかな？間をとってすき焼きもアリかな。）

かれこれ三年ほど使っている買い物袋の中身と自宅にある物とを考えながら歩く。程なくして自宅であるアパートの玄関に着いた。

（やっぱり今日はカレーにしよう。手羽を煮込んでチキンカレーだ

な。）

いったん買い物袋を置くと、私はコートのポケットをまさぐりながらそう決める。

カレーは正義。キレンジャーの称号有り難く貰い受けよう。

ガチャガチャ、カチリ

鍵をポケットに戻し扉の前に置いていた買い物袋を持ちなおす。

ガチャ

「ただい、ま、あ？」

バタン

そして、この世界から私はいなくなった。

（あ、あれ？開けたの自分の家だよね？コートも着てるし買い物袋もある。白昼夢はありえないし、幻覚？いやいや、今までそんなこと一度もなかったし。というかホントにココどこ？）

目の前には開けたところがあり、壁に十や二十を軽く越えるモニターが設置されていて、その中ではまるでアニメに出てくるような髪色の少女や巨大ロボが所狭しと駆け回っていた。

「おや？あなたはどちら様で？」

不意に声をかけられる。どうやらあまりの驚きに気配に全く気が付かなかったようだ。

慌てて声の掛けられたほう、左を向くとそこには子鬼という表現がピッタリな生物が白衣に身を包み、頭上には天使ですと言わんばかりの輪をつけて立っていた。

「えっ！あの、わた、私は人間でして、えと、自宅で、その、ただいまですっ！」

「ふぅむ、ニンゲンに自宅ですか。とりあえずはこちらへ。」

そういって子鬼は歩き始める。少し放心した後、あわてて追い掛けると、そこにはテーブルと二脚のイスがあった。

勧められるまま席に着くと子鬼はお茶を用意しますと言ってどこかへ消えてしまった。

「ここホントに自宅？それにさっきの見たことも聞いたこともない。」

整理するようにわざと声に出す。子供の頃から意識的に行っていたおかげで大分落ち着くことができた。周りをよくよく観察するとやはり自宅とは思えない。

「明らかに部屋が広くなってる。高さも倍くらいはあるかもしれない。それにあのモニターの数はまるで映画に出てくるセキュリティ室だ。」

それにモニタールームを挟むように存在していた本棚を左に抜けて今の部屋があるとすれば、反対側にもあるかもしれない。そうすると自宅の広さの何倍だろうか。
そうこう考えていると奥から――ドアの音がしなかったし両手が塞がってるところをみるとまだ先があるらしい――子鬼が帰ってきた。

「待たせましたな。紅茶で良かったですかな？それと砂糖とミルクの方は？あぁ、お菓子はご自由にどうぞ。」

「あ、どちらも大丈夫です。えと、それでどうなっているんですか？」

「どうなっているか、それを知るためにも先ずはお互い自己紹介といきましょう。自分はここ第２０２管理室の管理長を勤めるニケと申します。」

「私はここ？なのか自信はないですが桜川アパート２０２号室の桜井（サクライ）　春樹（ハルキ）といいます。」

「サクライ　ハルキさん、ですな。できればもう少し色々聞かせてもらってよろしいかな？」

「色々、ですか？」

「なんでもいいですぞ。今こんな仕事をしているとか最近の流行とか世界情勢とか。できれば最後の世界情勢を詳しく教えてもらえると助かるのじゃが、普通の生活を送っていたのならあまり詳しくはないじゃろう。なのでハルキが知っていることを教えて下されば十分ですぞ。」

それから私は色々話した。アメリカでは初の黒人大統領がいるとか今は近くの書店で働いてるとか、女兄弟ばっかりのため一人称が私になってしまい小さい頃はよくからかわれたとか、思いつくもの全てを話した。

「……ふむ。やはりハルキは迷い込んだみたいじゃな。切っ掛けはおそらく２０２、ですかな。」

「迷い…込んだ…？ここはやっぱり私の家じゃないんですか？」

私の話を聞いて何かに至ったニケの答えに思わず聞き返す。

「うむ、ここはハルキの家ではなく、さらに言うならハルキのいた世界でもありませぬ。」

「落ち着きましたかな？それでは紅茶のおかわりでもどうぞ。」

「…ありがとう、ございます。」

グッと一息に紅茶を飲む。火傷をする程ではないが熱を持った紅茶が喉を通り刺激を与える。

世界が違うと言われてから私はひどく取り乱してしまった。だがそれも無理ではないと言えると思う。今まで生きてきた世界だ。外国に行ってくるという次元の話ではない。まだ、やりたいことはいくらでもあったのだ。

「それで、私は帰れるんですか？」

今一番気になっていることを尋ねる。できればすぐにでも帰りたい。そして友人にこんなことがと笑い話にでもしてしまいたいのだが、ニケの顔は厳しくそれが無理である、もしくは難しいことであると容易に見て取れた。

「先程の話から考え得るに、サクライ　ハルキのいた世界は幹に近い三次元構築世界の中の太陽系に属する地球だと推測されますな。そしてそこから迷い込んだとするとハルキは今2．2くらいまで存在を落とされているはず。そうなれば奇蹟が続いて8回、運が良くて12回、まともにすれば16回は生きなければなりませんでしょう。」

「あの、おっしゃっている意味が全くわからないのですが……。」

帰れる可能性があるのはなんとかわかったが三次元構築世界？16回生きるってなに？

「失礼、説明しますとですな……まず世界というものはある中心がありそれに類似した世界が年輪のように広がっておるのじゃ。その中で中心に近いものから3層目までを我々は『幹』と呼んでおる。中心から遠いほど世界は多様性を誇り、先程ハルキもモニターで見たような世界があるわけです。」

モニターで見た……ではあれは間違いなく現実世界なのか？

「続けますぞ。そして本来はその生を全うすることで少しづつ幹へと近づき、中心に辿り着いたとき階層が上がるのじゃが、ハルキはここに迷い込んでしまった。そのせいで本来所持していた存在ポイント――正式名称は違いますがわかりやすいためこう呼ぶか――が削られてしまったようですな。なので今のハルキでは元居た世界に

帰るにはポイントが足らず、現在のポイントで存在できる世界を生き抜くことでまたポイントを上げていくしかないということじゃ。」

幹、階層、存在ポイント、生き抜く。夢なら覚めてほしいが夢現つなどわかりきっている。

これが、今の私にとってはこれが現実なのだ。ならば折り合いをつけるしかない。

「質問しても、いいですか？」

「なんなりと。自分が答えられるかぎり答えましょう。」

「先ずココはどこなんですか？」

「ここは四次元構築世界の第一層にある管理世界。基本的に一つ上の階層のどこかが一つ下の階層を見張ることで世界の消失を防いでおる。」

「世界の消失？」

「左様、世界というのは刻一刻と成長と衰退を繰り返しておるが、それがあまりに激しい場合だと周囲の世界を呑み込んでしまう。そうすると層のバランスが崩れ、万が一の場合全ての次元が崩壊しかねないのじゃ。」

「次元が崩壊……それって？！」

「残るのは無だけですな。もっともこの階層というシステムもさらに上の者が監視、あるいは実験しているのではというのが通説で、その者たちからとってみれば果実が一つ木から落ちたくらいの認識

でしかないのでしょうが。」

「あははは……。」

もう笑うしかない。私の居た世界を見ている世界があってそれを見ている世界があって、さらにそれ全体を見ている世界がある。想像もつかない話だ。

「気にする必要はないですぞ。生きていくには無駄なこと。与えられた世界、今いる世界で生きる他はないのじゃから。」

そう言って紅茶を口に運ぶニケ。姿は子鬼なのに妙に様になっている。

「なんで、なんで私なんだ……。私がいったい何をしたというんだ。どうして世界に襲われなければいけないんだ。」

「……それについては運が悪かったとしかいいようがありませぬ。世界がハルキを襲ったのは消失を防ぐためでしょうな。先程もいったように世界は成長と衰退を繰り返しておるが、これは必ずしもイーブンになるわけではない。大きく成長して世界自体が幹に近づく場合もあれば、衰退していくばかりで幹から遠ざかる、もしくは自己消滅することもある。それを補うために、自己より幹に近い世界の生物から存在ポイントを奪うことはよくあることじゃ。もっとも、普通はポイントを奪われた生物はすぐにその世界から消滅するのじゃがな。その点でいうとハルキは運が良かった。」

「どういうことですか？私が運がいいだなんて、皮肉のつもりですか？」

思わず攻撃的な口調になる。頭ではニケのせいではないと分かっているのだが、感情を押し殺すなんて器用な真似ができるほど私は経験豊富ではない。

「いやいや、純粋にそう思っているだけですぞ。なぜなら本来は消滅するはずだったのに、こうして別世界の、しかも管理世界にこれたのじゃから。」

また一口紅茶を飲むニケ。

「ハルキも既に解っているじゃろうが、世界に襲われた後は消滅するか他の世界に飛ばされるかしかなかった。飛ばされたとしても、その世界が減らされたポイントで存在できる世界でなければ消滅するだけじゃ。存在できたとしても、急に宇宙空間に投げ出されて即死ということも十二分にあり得る。運良く安全な場所に着いても、そこは別世界、何の説明もなく放り出されて生き抜くなんて無理じゃろう。つまり、消滅するか、死ぬか、発狂する道しかなかったのですな。」

それは……そうだろう。世界の概念とポイントについては、ニケが教えてくれた範囲ではあるがだいたい理解できた。そしてモニターの中の世界。中心から離れるほど多様性になるということはあの世界は恐らくポイントが低い。しかし目の前にいきなり人外の生物が現れ、人類としては有り得ない髪色をもち、非常識な科学が溢れている。それは非常識なものだがあの世界では非常識なモノは私なのだ。

そこまで考えて、ふと新たな疑問が浮かんでくる。

ニケは中心に近いほどポイントが高く、中心に至ったとき階層が上がると言った。階層が上がったらまたその階層での低いとこから始まり中心へと魂は巡るのだろう。

では、この世界にいる私とは何なのだろうか。
四次元構築世界における幹の、しかも中心に最も近い第一層にいる三次元構築世界の、さらにポイントが低くなった私。どうして存在しているのだろうか。

「ニケさん。なぜ私はココに存在しているのですか？説明によれば存在できるはずがない。」

「確かに階層が下のものが上の階層の、さらに幹へと迷い込んだとしたら、消滅するしかないですな。しかし、何事にも例外というのもあるのじゃ。そしてその例外がココ、管理世界というわけじゃ。ココは世界が持つ総量を常にオーバーするように保っているのじゃな。理由はハルキのような人が来てもいいように、じゃ。」

「総量を超える。」それはいいことではないはず。過ぎたるは及ばざるが如しと言うように何事も適量が一番なのだ。しかしニケたちは、私達のような存在のためにその危険を冒しているという。恐らくなんども試行錯誤し計算し尽くされた行為なのだから問題は起こらないだろうが、わざわざそんなことをしてくれるなんて……。

「うぅむ。目を輝かせているところ済まないが、これは全くの善意ではないぞ？これは私たちの階層のものが万が一ハルキと同じような境遇に陥ったときに、手助けをしてくれるかもしれぬ、と思ってやっていることだからな。それより、話を進めようぞ。これからどうするかじゃ。」

ニケは長い爪でこめかみのあたりをポリポリと掻いている。
打算的な行為だと知って少しがっかりするが、それは当たり前のこ

とだと割り切る。それに現実に私は助けてもらっているわけだし、それでいいじゃないか。

それより、これからどうするか。

私は元の世界に帰りたい。生憎と生涯を共にする相手はいなかったけど友人がいる、家族がいる、そしてなにより私の居場所があそこにはある。

「帰りたいです、元の世界に。」

「それは長い道のりになるぞ？」

「それでも、あそこだけが私の世界です。」

意志を乗せてニケをじっと見つめる。何年、いや何世紀かかるかはわからない。繰り返す中で家族の顔を忘れるかもしれない。途中で素晴らしい人に出会えるかもしれない。

でも、それでも私は帰りたい。

「迷いは、ないようじゃな。よいか？ポイントは主にどれくらい生を全うしたか、つまりは寿命近くまで生きれるかに関係しておる。ポイントを早く貯めるには何が何でも生き延びよ。これから行く世界では今までの常識は通じぬと思え。」

「はい。」

「じゃあ、まずは行きたい世界を選ぶとよい。時間は掛けても構わんぞ。」

そういってニケは赤褐色の革で装丁された一冊の本をテーブルの上へと持ち出した。

ep. 02　新世界と私とニケと星空

ニケから渡された本を開くとそこには一ページにつき二つの世界が紹介されていた。
世界のどこかと思われる写真と必要な存在ポイント、それに概要が書いてある。パラパラ捲ると本の四分の一の辺りで紹介は途切れており、それ以降は白紙となっている。紹介されている最後の世界を見るとそこには大きな蟻と戦う人の姿と必要な存在ポイントが２．２であると書かれている。
多分この本には私が行ける世界しか載らないように何か仕掛けがあるのだろう。まぁそれでも選べる世界は優に数百はあるのだが。

「うーん、何かお薦めの世界とかありませんか？」

たまらずニケにアドバイスを求める。判断材料が多すぎてわけがわからない。何回か生きればわかるのかもしれないけど、今の私にはどれも同じように見える。

「そうじゃな……最初の内は魔法とかがある世界がいいじゃろ。」

「魔法ですか？」

「うむ。生き抜くためには力はどうしても必要になる。科学でも構わぬがエネルギーの補給を考えると厳しいじゃろ。それに魔法を扱う世界ならハルキの世界でも登場する、神器が存在する可能性が高い。それを手に入れれば襲われて死ぬ可能性は低くなるのではないか？」

確かに力は必要になるだろう。それも個人として強力なものが。

組織としての力は、私が生き抜くためにはあまりいらないはず。それに魔法というものは未だ見たことないし、丁度良い機会だ。

よし、魔法のある世界にいこう。

そう決意すると両手に持っていた本がボゥと青白く光り世界の順番が入れ替わっていく。どうやら魔法のある世界を頭の方に集めてくれたようだ。全く、持ち主に似ていろいろと世話を焼いてくれる本だ。

それから一時間程いろいろな世界の概要を見比べ、ついに私は行く世界を決めた。

世界が決まった旨をニケに告げると私はモニター室を軸に反対側の部屋へと連れていかれた。そこには私がニケから渡されたものと似たような本がいくつか納められている棚とスキャナーがくっついたメカニカルな大きな扉があった。

そして私はニケに行きたい世界を指差すと、ニケはそのページをスキャナーにかけ何か操作している。

「これでこの世界に行けるじゃろ。」

なにやら操作をし終えたニケが振り向きながら私に言う。

「それと死ぬたびにこの部屋へと帰ってくるようにしておいたからな。同じ世界へ行く場合は何もせず、ただ扉を開けばよい。世界を帰る場合は自分に言えば設定してやるでな。よいか？くれぐれも勝手に弄らぬように。」

念を押すように勝手に弄らぬよう復唱させられたけど、小市民な私にはそんなこと無理です。
扉の前で一度深呼吸をする。今から行く世界は私の常識は通じない。でもそれが私にとっての現実となる。不安と緊張で歯がガチガチと音を鳴らす。心臓も爆発するほど鼓動を強め全身に余剰な血が回る。体温の上がった体からは汗が噴き出し、息も荒くなる。

「ハルキ、しっかりせんか。それでは先が思いやられるぞ。」

ニケが私の背中に手を当てながら言う。骨のような手と長い爪が彼が人間ではないと再確認させてくれる。しかし、この支えのなんと大きなことか。

そうだ、私は知っているのだ。この世界がどう成り立っているのか。

そうだ、私は帰るべき場所があるのだ。その世界はただ一つしかない。

そうだ、私は決めたのだ。私のいた世界（居場所）へ帰るのだと。

ならば何を怯えることがある。魔法がある？結構！侵略者？ぶちのめしてやる！超科学？家電があれば十分！
私は私だ。それ以外に何が必要というのだ。

決意を新たにする。あれだけうるさかった私の体は明けの空のように澄み渡り、思考が回りはじめる。

「ようやっと本調子といったところか。これは餞別じゃ。好きに使うがよい。」

「これは？」

ニケから渡された藍い八面体状の宝石が着いたチョーカーをまじまじと見つめる。ニケのことだからなにかしらの便利グッズだとは思うのだけれども。

「それは自分達が普段使っている収納ケースみたいなものじゃよ。その中は時が停まっているため食料など入れたりしてもいいじゃろ。向こうに着いたらまず開けてみるがよい。詳しいことは中に説明書をいれてあるので暇なときにでも読んでおけばよかろう。」

そうだ、今から行く世界は魔法の世界。人目に触れられぬ物が沢山あるだろう。ならばなおさらこのチョーカーは役に立つ。

ニケに礼を言いながら首にチョーカーをつける。これがゲームなら「ニケのチョーカー　を　そうびした。アイテムらん　が　ふえた！」とでも表示されるのだろうか？自分がドット絵になり字幕が出るのを想像すると自然と笑みがでる。そういえばあの世界にも魔法があったな。まぁリストになかったということは実在しないのだろう。

「じゃあニケ、いってきます。」

「うむ、しっかり生き抜いてこい。」

いったいどこの世界の会話だと思いながらも扉に手を掛ける。ふと頭に今までの私の世界のことがよぎる。———絶対に帰ってやる。そして勢い良く私は新たな世界へと、今度は己が意志で旅立った。

「鬱蒼」って漢字を書けって言われても無理だよね。それがこの世界の最初の感想だった。ちなみに二番目の感想は暑い。

右を見ても木、左を見ても木、回れ右をしても木、木、木、木、木なんと目に良い空間だろうか。コートとカーディガンを脱いで片手に持ちながら、とりあえず近くを散策してみる。すると獣道があり、そこから開けた場所に出ることができた。

確かこの世界は地球の他に魔法世界というものがあるはずだが、道中に奇特な草木はなかったことから、ここは魔法世界ではないようだ。いや、まぁ魔法世界に地球の草木は存在しないという仮定の元だけどね。

とりあえずはニケに言われたようにチョーカーの中身を確認することにしよう。確か意識しながら触れればいいんだよね。

ズゾゾゾ

「うわっ！」

思わず後退りしてしまったが、尻餅を着かなかった自分を褒めたい。目の前にいきなりなぞの亀裂ができて驚かない奴がいたら連れてきてほしいものだ。

恐らくこの亀裂の中がニケの言っていた収納場所なのだろう。意を決して手を突っ込むとなにやら手紙のようなものを取り出すことに成功した。これが説明書かな？とりあえず読んでみよう。

「先ずは新しい世界へようこそ、と言っておこう。これを読んでいるということはわかっておるじゃろうが、黒い亀裂の中が収納スペースとなっておる。中は無限大に広がっておるから遠慮なく使うが良い。また亀裂の大きさも任意で決められるから、逃走用の乗り物でも入れておくと何かの時に役立つじゃろ。取り出す際は取り出し

たいものを意識すればすぐに出せるので整理とか考えなくて良いぞ？ただし、生物を入れるのは厳禁じゃ。その中は限定的に四次元構築世界のものとなっている。つまり生きもの何ぞ入れたらすぐに消滅するから気をつけるように。それと最初のうちは慣れないじゃろうから中にテントと食料、それに人払い用の札を何枚か入れておいた。その札を使えば野党だけでなく野生動物も近付くことはないはずじゃ。数に限りはあるがその間になにか魔法でも身につけるが良い。

あぁ、それとその世界で実在する神器をいくつかピックアップしといたので別紙をよく読むこと。

それじゃ、達者でな。

ニケより」

頬が緩むのを止められない。全く、この恩はどうやって返せば良いのだろうか。でもニケなら「これも結局は自分達のため、情けは人のため為らずということじゃ。気にするでない。」と爪で頭を掻きながら言ってくれるに違いない。

さて、日は未だ落ちてないけど今日はここにテントを張るとしよう。無策に歩き回って人里を見つけられたとしても、無一文な私じゃ宿をとることもできない。

亀裂から札を一枚取り出してジーンズのポケットに突っ込む。札についていた説明書だとこれ一枚で丸一日は持つらしい。今が夕方より少し前だから、明日の午前いっぱいは効力は心配しなくていいだろう。コートとカーディガンはここでしばらくお別れだな。テント（しかもワンタッチ式）を取出して日のあるうちに薪木を探しに行く。幸いにも辺りは森なので、一時間もしないうちに一抱えほどの量を集めることができた。これだけあれば一晩くらいは困らないだろう。

えーと、確か空気が入りやすいように藁葺き屋根みたいに組めばいいんだよな？

あれこれ薪の組み方を試してみたり、火を点ける道具を持ってないことに絶望したり（亀裂の中にオイルライターが入っていた。きっとニケの仕業）、乾燥してない枝が混じっていたのかモクモクと煙が出て焦ったりと色々なことがあったけど、とりあえず焚き火は成功した。

パチパチ……パキンッ……

火をじっと見つめながら今後のことを考える。

まずしなければならないことは何だろうか。

食料と水は確認したところ一月は保つ量だった。明日、明後日に餓死するということはないだろう。

いや違うな、最初にすることはここが何処で今が何時なのか調べることか。

ほぼ全ての世界は中心を模倣しているのなら、地球自体の地理はそう変わらないはず。歴史についてはその世界の根幹に関わるから、私の世界の知識は当てにしないほうがいいだろう。……もっとも歴史なんて学校の授業で習ったくらいだし、はっきりと覚えている事のほうが少ないけどね。

なら明日の目標は、人に会うこと。
今の情報を得ること。
そしてお金を稼ぐこと。

先立つものがないとどうなるかなんて、考えなくともわかることだ。
決めたなら後は行動するだけだ。焚き火に辺りの土を適当に被せて消火する。山火事の危険性はないけど、もしかしたらテントに燃え移りかねないし、後始末はしっかりとしておこう。

汚れた手を軽く払うと、夜なのに意外と明るいことに気付く。空を見上げると今にもこぼれ落ちそうな、飽和状態の星空が広がっていた。くっきりとした満月はまるで太陽のように輝き、白く自らを誇示する星や、儚げにそっと寄り添う双子星、青色や赤色でアクセントを点ける星たちは、まさしく宝の石と呼べるものだった。

でも、これは私の世界じゃ見れなかったもので、これに感動している私は非常識で、世界の違いを見せつけられたようで……。

ただ胸を締め付ける。

「うわぁ……ホントに別世界に来たんだな。」

アハハとカラ笑いをしてしまいそうな星空を見上げながら、私は頬を伝うナニかを感じていた。

「よし、いざ行かん。ぶらり異世界一人旅。」

出発前に一度自身を鼓舞する。
昨夜は気の済むまで天体観測をした後、テントの中で眠りに就いただけで特に何もなかった。星空を見て世界を知るなんて存外私もロマンチストだな、と呟いたりとか、その数秒後にうわーーと頭を

抱えて恥ずかしさに身悶えたりとか、寝ようとするたびに思い出してなかなか寝付けなかったりとか、そんなことはなかった。なかったことにした。

ただ一言、気障な台詞を吐くときって結構気持ちいいということを付け足しておこう。

ep. 03　街と私と城壁と黒猫

「獣道を辿れば人里か通りに出れるはず。まずはそこからだな。」

昨日ここに来るために使った獣道を逆に辿る。熊など野生動物を警戒しつつポケットには札を入れたままだ。通りにでてからも人里近くまでは入れっぱなしの方がいいかもしれない。時代によっては追い剥ぎなんてよくあることのはずだしね。

それから30分ほど周囲の草花を観察しながら歩き続けると、舗装はされてないがちゃんとした通りが見えてきた。道幅は3m程だろうか、この道幅で舗装されてないのは珍しい。少なくとも今までの人生でお目にかかることはなかったな。よっぽどの田舎で、利用者が全くいないのだろうか？

しかし、見る限り交通量は結構あるようで質素な出で立ちの男や、手には弓、背中には矢、腰には短刀を下げている猟師風の男達。他にも荷車を引いているオジさんや馬車がその通りを利用していた。

なるほど、わかった、わかったからみなまで言うな。

「あー、タイムスリップ？」

世界が違う場合にその定義が当てはまるのかは甚だ疑問だが、今見たものに折り合いをつけるにはそれしかない。未舗装だけならともかく弓矢に馬車って。昨日の星空に続き世界はいいジャブを私に打ち込んでくれるものだ。

軽く世界に打ちのめされながらも、どちらに進むか考える。

右か左、どちらに進むべきか。人里に辿り着くという目的を達成す

るならどちらでも大丈夫だと思うが、できれば「ここから近い」かつ「街といえる規模」で「出入りに厳しくない」方が望ましい。でもここには道路標識も看板もない。人の通りから推測するに……ってそんな特技もちろん持ってない。こうなればアレに頼るしかないのだろうか……。

――私はおもむろに転がっている棒を地面を穿つように立て、小学校の頃より馴れ親しんだ呪文を口にする。

「ぼうさん、ぼうさん、私のさがしもの、どちらさん？」

指を放すと、棒はその身を右へと横たえ私に歩むべき道を示した――。

そんなセルフムードメイクをしながら棒占いをする。少し恥ずかしいがゾクッとする快感に勝てずついやってしまう、これが友人の言っていた中二病と云うやつなのだろうか。

とりあえず、棒の倒れた方に進むことにする。札は持ったままで、通りの森側の端を歩く。札を手放せないのは私が臆病だからだろうか。

すれ違いゆく人々を観察しながら歩くと、日が真上に上る頃には大きな建造物が見えるようになってきた。実物を見るのは初めてだけど、たぶん城壁と呼ばれるものだと思う。これなら情報を得るには十分だろうし、大きな街なら働き口も期待できるだろう。懸案事項が一気に解消しそうな予感に、私は歩みが早くなるのを止められなかった。

「とりあえず、息が整うまではじっとしとこう。」

通りにあるベンチに一人座りながら、息が整うのを待つ。ほぼ一日の間人工物を見ていなかったこと、城壁の実物を見たことがなかったこと、それに文明的なものに興奮したことでこの有様だ。まさか城壁っていうものがあんなに大きいとは思わなかった。家よりも高いものなんだね、まぁ低かったら壁の意味ないか。

城壁の入り口には警備員、いや警備兵が立っていたけどそこはお札の力で華麗にスルーした。ちょろいちょろいと中に入ったのはいいんだけど……。

「はぁ、この服装は怪しすぎるよなぁ。」

今の私の格好はジーンズにワイシャツ、それに友人から勧められたスニーカー。亀裂の中には着ていたコートとカーディガンを放り込んであるけど、それを着たところで怪しさは増すだけだろう。石畳の街並を見ながらため息を吐く。おおよそ中世ヨーロッパというのが、今のこの世界に対する私の予想だ。溶け込めない。あまりにも場違いすぎる。下手したら警備兵に突き出されて終わりだろう。今の私に身請け引き取り人などいないし、ありえない技術のオンパレード、しかも常識を持っていない。

「はぁ、一体どうしたものだろうねぇ。」

通りの反対側の人々を見てため息を吐く。
こうなれば服屋から盗むしかないのだろうか。できればいざこざは避けたいがこの札があれば不可能ではないだろう。

「ねぇ。」

「ッ？！」

叫びだしそうなるのを必死に堪える。

人間とは不思議なもので、自分に向けられた視線や声は感じ取れてしまう。今の声は明らかに自分に向けられていた。認識できないはずの私に向けて。

気のせいだと思いたくて辺りを見回すけど一番近い人は通りの反対側の人だ。

先程の声はもっと近い。

「ねぇ、そこにいるんでしょ？ここだと人目につくわ。黒猫についてきなさい。」

また声がする。声の主は、どういうわけか私の存在をはっきり認識しているようだ。ベンチの下から一匹の黒猫が姿を現す。これに着いてこいということか？

黒猫は一度伸びをすると狭い路地の入り口へと優雅に歩いていった。この誘いに乗るべきか否か。札の効力がなくなったとは思えない、にもかかわらず相手はそれを見破った。ということは、もしかしたら相手は一般人にはない力、この世界を選択するきっかけとなった『魔法』を扱えるのではないだろうか？

決めた。この誘いに乗る。

どうせいつかは接触しようと思っていたのだ。それが早まっただけ。
それに動かなければ物事は進まない。

黒猫は路地の入り口で足を舐めていた。私が近づくと、見えているのだろうか一度上を見た後、また優雅な足取りで路地を進んでいく。
日の入らないその道が私の未来を暗示していないことを祈りながら私は黒猫のエスコートに身を任せた。

ep. 04　魔女と私と秘密と契約

黒猫に導かれて路地を抜けると、そこは草原だった――――。
思わず何処かで聞いたようなフレーズが頭をよぎる。さっきまで石畳を歩いてきたのに、黒猫が一回鳴いたかと思うと世界が変化していた。
今いる場所は小高い丘になっているらしく、遠くには白い化粧を施した険しそうな山々や青い海、昨日までいた森とはなにか違う気配のする樹海が見える。

ナァ

足元から聞こえてきた声に視線を落とすと、黒猫はまだまだ先よ、と言いたげに視線を前に向ける。その視線の先には大きな風車と、赤い屋根をした一軒家が私を待っていた。

トントン

ドアノッカーを叩く。実はこれを使うのは初体験なのだが今はどうでもいい。

「入りなさい。」

了承の声が帰ってくる。この声は街で聞いたものと同じ。

「お、お邪魔しまーす……。」

恐る恐るドアを開く。最初に目についたのはテーブルだった。テーブルの上にはメガネに何か分厚い本、それにカップが置いてある。

なぜか知らないが妙に気になる。もしかして高尚な美術品なのだろうか。
中の様子を他にも伺うが、声の主の姿はない。これは奥まで来いと言う事なのかな？
そう思って家のなかに足を踏み入れた瞬間。

ボッ

「うわっ、え？熱っ！くっそコンニャロ！！」

いきなりジーンズのポケットから火があがった。慌てて手を突っ込み何かを掴み出して地面に叩きつける。前触れなく発火して今は大切な一張羅になったジーンズを、ダメージ加工しようとしたのはニケから貰ったお札だった。燃えるのがダメージ加工に入るかは知らないけど。

「はじめまして。あら、結構いい顔してるじゃない。隠してるなんてもったいないわよ。」

地面に叩きつけた燃え札を踏んで消火し終えると、また声がした。今までと違い近くからする声に驚いて顔をあげると、淡い緑色のローブを着た女性がイスに座りながら私を見ていた。膝の上にはあの黒猫が気持ちよさそうに丸くなっている。

「え？あ、は、はじめまして。」

「まったくレディから先に名前を名乗らせようというのかしら。」

「すみません！私は春樹、ハルキ　サクライです。」

「変わった名前ね。まぁ、いいわ。わたしの名前はメルディン＝カルディアナ、刻む者と呼ばれている魔女よ。」

やっぱり。驚きよりも納得の感の方が強い。私に声を掛けたこと、黒猫の使役、世界を塗り替える、どれも常人にはできないこと。ならば彼女は常人じゃないということだ。

メルディンは向かいのイスを指差す。そこに座れということなのだろう、立ちっぱなしというのもなんなのでここはお言葉に甘える。

あ、そうか。なんでテーブルが気になったのかわかった。イスが見えなかったんだ。もしかして、私は既に目の前の麗しき魔女の術中に捕らえられているのだろうか。だとすれば何が目的だ？……ダメだわからない、彼女は魔法使いだ。そんな彼女の思考を、魔法なんて爪の先程も知らない私が追えるはずがない。ここは大人しく――

「物思いに耽っているところ悪いけど、そのために貴方を呼んだわけじゃないわ。ハルキ、ハルキ＝サクライ、さっきの札はどこで手に入れたのかしら？それにその服装、ちょっと見かけないで済まされるものではないわね。ねぇハルキ、貴方は何処からここに、何をしにきたのかしら？」

紅い唇が綺麗な弧を描き、万人を魅了するかの様な瞳で私に問う。そんな瞳を受けて私は、話すか否かではなく、どこまで話すかということしか考えられなかった。

結局、私の世界のこと、幹や階層といった概念は隠し通すことにして、札は友人から貰ったもの、目的は捜し物ということで話をした。どこから来たのかをしつこく聞かれたが、そこは記憶にあるが思い出せないと押し通した。

「出身地のことはもういいわ。それ以上話す気はなさそうだしね。それよりさっきの札はまだ持っているんでしょ？少し見せなさい。」

先程ポケットの中で勢い良く燃えた事を思うと遠慮したいことなのだが、逆らうことはできない。ここではメルディンは圧倒的な強者だ。生き抜くためにも、彼女を怒らせることはできない。

彼女に見えないようにテーブルの下で指が入るくらいの亀裂を広げる。意識すれば出てくるため腕を突っ込んで漁る必要もない。それに彼女には出来る限りこの力は隠しておきたい。まだ彼女が味方になってくれるとは限らないのだから。

「どうぞ。限りがあるし私にとって貴重なものなので燃やしたりしないで下さいね。」

「さっき燃えたのはわたしに害があるものだからよ。そうでないと認識すれば燃えるはずないじゃない。」

あれは防犯だったのか。この世界、魔法を扱う人からすれば当然の対策、といったところかな。私だってそうする。

彼女はニケの札をみながらなにか呟いているが、詳しくは聞き取れない。多分、声に出てるともおもってないのだろうな。

「私が観測した限り範囲は……それに効果もそこまで……でもこの術式は……材料になにか……違う？そんなはずは……ありえない……。」

まだ彼女は彼女の世界から帰ってこない。なら今のうちに私の身の振り方も考えて置くべきだろう。ベストなのは彼女に魔法の教えを請うことだろう。「刻む者と呼ばれている」と彼女は言った。つま

り他者から二つ名を付けられるほど尊敬――――もしくは恐怖――――を得ているのだから、実力はあるのだと思う。それに神器には何かしらの守りがあるとしたら、今の私では何回繰り返そうとも手に入れることは叶わないだろうし。
問題はどうやって教えを請うか、か。こればかりは今考えても仕方ない。彼女が自分の世界から帰ってくるのを待とう。
……連れてきたのだからお茶くらい用意してほしかったなぁ。

「なかなか興味深いものだったわ。」

ニケの札と彼女がにらめっこを始めてから一時間と少し、勝敗はわからないけど、とりあえず彼女は満足したようだ。
返された札をまたテーブルの下で亀裂を開いてしまう。さて、どう話を切り出そうか。

「そんなに面白いものですか？」

「えぇ、とてもいい刺激になったわ。」

「刺激、ですか。」

「そうよ。停滞したものに未来はないわ。」

フフンと鼻をならしてカップを口に運ぶ彼女。機嫌はいいらしい。

「あら、わたしとしたことがうっかりしていたわ。貴方も喉が渇いたでしょう？ミルクから紅茶、ワイン、東洋の緑茶まで、なんでもあるから欲しいものをいいなさい。」

なんでも、か……切り出すなら今しかない！

「……ぅがいいです」

「何かしら？」

「魔法がいいです。」

「……。」

「メルディン＝カルディアナさん、私に魔法を、己が力で世界をねじ伏せる術を教えて下さい。」

無言、無音、無温。空気が凍り付くとはよく言ったものだ。それに静かすぎて耳鳴りがする。彼女は何も口にしない。カップはいつの間にかコースターの上に置かれていて、さっきまで気持ちよさそうにしていた黒猫も姿を消していた。タイミングは完璧だった。言い回しはともかく言いたい事は伝えた。あと私にできるのは彼女の目を見て待つことくらいだ。

「いいわよ。」

数秒とともすれば数時間、はては永遠とも思えた刻を終わらせたのは、肯定の言葉だった。

「ありがとうございます！」

嬉しい。他人から認められてここまで嬉しいのは何時ぶりだろうか。とにかくこれで憂いの一つは解決できそうだ。

「お礼はいいわよ、わたしの為だから。条件があるわ。」

これは予想済みなので文句はない。あまりにも私に害があれば一考するけどね。

「内容はなんですか？」

「先ずは家事の分担。まぁこれは当然よね。全部任したいところなのだけれど、魔法に無知な貴方に勝手に掃除なんてされたら目も当てられないから仕方ないわ。次に私の許可なく外出しないこと。外出というのはこの空間からのね。家の外に出るだけならあまり気にしなくていいわ。それと実験に協力しなさい。別に死ぬようなことはしないわ。」

家事の手伝いに無断外出の禁止、そして実験の補佐。これくらいなら弟子としては当然だし私になにも異論はないかな。

「そして最後、このメルディン＝カルディアナ以外に貴方の過去と貴方自身のことについて真実を話すことは許さないわ。」

……ここでそれを持ち出すか。悪い条件ではない。むしろ詳しい身元すら明かさない不審者を囲うにしては好条件だと言えると思う。それに幹のことや階層のことは私が秘密にしているだけで、ニケから口止めされているわけでもない。

まぁ頭のおかしい奴と思われたくないってのもあるのだけどね。

「今の三つが呑めるなら貴方を弟子にしてあげるわ。もちろん部屋も用意する。わたしながら随分と甘い条件だと思うわ。なにせ最後の条件もわたし以外に言わなければ、後は貴方の自由なのだから。」

「……一つ聞かせてください、なんでそんなにハルキ＝サクライについて知りたいのですか？」

「それは貴方が弟子になってから教えるわ。さぁ、どうするの？」

「私は……。」

この日、二十年以上生きてき私に初めての師匠ができた。

ep. 05　呪文と私と魔法と魔術

弟子生活一日目。

重力に負けそうになる目蓋を叱咤しながらダイニングへと向かう。

昨日は弟子入りした後、メル（そう呼ぶように言われた。ちなみに私はハルと呼ばれるらしい）に詳しい修業は明日から始めるので、まずは自分が住む部屋の掃除をしなさい、と部屋の鍵を渡されただけで終わった。詳しい分担とかも今日話すのだとか。

ダイニングに着くと、百合っぽい花の一輪挿しが置かれた二人用の小さなテーブルと窓際で微睡み中の黒猫が居ただけだった。

どうやらメルはまだ起きてきていないらしい。もしくは寝てないのかもしれないけど。

とりあえずは手持ちぶさただ。昨日は部屋の掃除が予想以上の大イベントになってしまったため、キッチンについては何も説明を受けていない。これが普通の家なら――行儀はとても悪いが――お湯を沸かしてコーヒーを煎れるくらいはできるのだけどもなぁ。勝手に棚開けてトラップ発動とか平気であり得るし。

「あら、おはようハル。意外と朝早いのね。お湯を沸かしてもらえるかしら」

どうやらもう考える必要はないようだ。それにしても、この世界でおはようと言われるなんてちょっと想像していなかったな。

「おはようございます、メル。それがポットの場所を教えてもらうのを忘れてまして」

「それくらい勝手に探せばいいじゃない。どうせありそうな場所な

んて限られているのだから」

「いや、探そうとして取っ手が熱々で火傷したり、強力な糊で手がくっついたり、ペットの蜘蛛が出てきたりしたら怖いじゃないですか」

「そんな家聞いたことないわよ。ハルって随分と慎重なのね。いいえ、臆病と呼ぶべきかしら。防犯関係に関しては気にしなくていいわよ。ハルのことはもう登録したから。ただしわたしの部屋は除くけどね」

「できれば慎重と言ってほしいですね。では心置きなくお湯を沸かしてきます」

見たこともない力を操る世界にきたらそれは慎重になるわけで。特に生き抜くためには。

キッチンを探すとポットはすぐに見つかった。コンロ（驚いたことに見た目はＩＨにそっくりだった。原理は魔法関係らしいけど私のキッチンもまだガスコンロだったのに……）の使い方も簡単に教わりお湯を沸かした後メルと一息入れる。なんでも、メルは朝の一杯がないと目が醒めないのだとか。

それからメルが作った朝食をとった後、外に出ていよいよ修業の始まりとなった。

雲一つない快晴。時折吹く風が青々とした草花を揺らし緑の波を作る。何処からともなく椅子と黒板が用意され正に青空教室といった体だ。

「さて、じゃあ今から修業を始めるわけなのだけど、ハルは何も知らないのよね？」

「ええ、全く」

何故かメガネを掛けているメルの質問に答える。女教師＝メガネって世界共通なんだなぁ……。

「あんな札を持っていたから、関係者だと思ったのだけれどもね。まぁいいわ。ハルはわたしに魔法の手解きを望んだけど、魔法と魔術どっちがいい？」

「……違いがわからないのですが」

「多くの人が様々な理論でもって違いを定義しているけど、一般的に使い手の魔力のみを使って即時的に発動するのが魔法、術具と魔力を使って手順を踏んでから発動するのが魔術ね。魔法の方が一般的で多くの魔法学校もあるわ」

まぁ、どちらも例外はあるけど概ねそうよ、とメルは付け足す。

今の説明を聞くかぎり魔法の方が優れている気がするのだけれど？

「メル、説明を聞くかぎりは魔法の方が優れていると思うのだけど」

「根幹が違うのよ、それこそ根本的に。例えば身体能力を上げる『戦いの歌』と言う魔法があるわ。使い手の五感とか脚力、腕力を上げたり、対物理や対魔法にもある程度耐性が備わる。魔法戦士として前衛にでる人たちだけでなく、研究などの補助として使う人もいるポピュラーな魔法よ。それに対してルーン魔術には――同じではないけれど似たものとして――『勝利のルーン』というのがあるわ。

これは文字通り勝利をもたらすの。それは例えば相手に流れ矢が当たったり、相手の武器が壊れたり、強力な援軍が来たりしてね。勿論、身体能力が上がったり武具の強度が強くなったりもするけど、本質は『勝利する』のただ一点なのよ。一切の誇張無しにね。まぁ、どちらも錬度によって千差万別なのだけれども」

つまり、魔法は勝つ為の過程を扱うが、そのルーン魔術は勝つという結果だけをもたらすというのか？　過程を省略して結果だけを定める。それはもう人ではなく――――

「それじゃあまるで神様じゃないですか……」

「そうよ、よく知っているわね。それとも偶然かしら？　わたしが使うルーンの魔術、それはかのオーディンさえ正確な手順と最高位の術具を用いなければ真の力を引き出せない神代の力。そしてその魔術の行使者において人外と評される力を持つ者をこう呼ぶわ。『刻むもの』とね」

唇を吊り上げ、どうだと言わんばかりの視線を向けるメル。いや、もう驚くことばかりで感覚が麻痺しそうです、はい。開いた口が塞がりませんよ、魔術を扱う人からすら人外と呼ばれるなんてどんなレベルなのですか本当に。

少し落ち着くための時間をもらってから考える。どちらがいいのだろうか。手軽さでいえば魔法に軍配が、威力というか能力では魔術に軍配あがるといったところというのが私の今の見解。緊急事態には咄嗟に発動できる魔法がいいのだろうけど、そんな状況が想像できない。むしろ、そんな事態に遭遇しないように努めるのが上策だと思う。かといって周到に魔術の準備して争いの場に行くなんてさらに有り得ない。生き抜くために身を危険にさらすなんて正気の

沙汰じゃない。となると手順を踏む魔術じゃ時間が足りない。自衛の手段が必要なのも変わることない事実。ままならないなぁ……。

そういえば、なぜ魔術は一般的じゃないのだろう？　最初は不便だからと思ったけどそれだけ強力なら二分とはいかないでもメジャーでもいいと思う。

「ねぇ、メル。なんで魔術は普及していないのですか？　そんなに凄い効果を発動できるのなら使い手も多いと思うのですけど」

「それは秘匿の度合いが違うから。魔法は、もちろん一般人に対しては隠されるけれど、同じ魔法使いや魔法世界においては技術として日常的に使われているわ。でも魔術は違う。魔術師は自らの研究を公表することは有り得ない。同じ魔術を扱うもの同士でさえ、相手には教えない秘術を持っているわ。同じ魔術というのは数多に広がる魔術をカテゴライズしたらという好奇心から生まれたものだけれどね。もし魔術師が己の成果を全て他人に明かす可能性があるとしたら、それは死ぬときだけね。もちろんその間際でも公表しない魔術師も数多くいるわ。だから普及はしない。させるつもりもない。魔術学校がないのも同じ理由よ。誰も教えたがらない。もちろん後継者を探したり、わたしみたいに気まぐれで教えたりする人も皆無ではないけれど極少数ね。それに自分で見出した弟子ならともかく、その他有象無象まで面倒みようなんて馬鹿らしいわ。最近じゃこの秘匿性こそが魔術の強みでもあるまで言われているわね」

「なんでそこまで徹底して秘匿するのですか？仲良しこよしにとは思わないけれど、普及させれば成熟も早いのでは？」

「それにも色々な人が様々な説を主張しているから一概にこうとは言えないわね。わたしの意見としては魔法の方が異常なのよ。特に

魔法学校で教えることなんて信じられないわね。あいつら本質をなにも見極めてない、いや見させようとしないわ。そのくせに魔法が優れているなんて思い上がって、こっちにちょっかいだそうとしたり。ホントに今度どこかの学校を更地にしてやろうかしら」

だんだん腹が立ってきたのかメルは眉間に深い皺を刻んでいる。というか魔術使っていると魔法使いからちょっかい出されるの？そこかなり気になるんだけど。

「できれば私にもわかるように説明してくれますか？」

「あぁ、そうね、ハルは一般人だったものね。じゃあ分かりやすく実践しながら説明してあげるわ。これを付けなさい」

メルに黒い手袋を渡された。手の甲の部分にはなにか記号が一つ印されているけど、これがルーンなのかな？　肌ざわりからして多分シルク製。こんなの付けるなんて貴族になった気分だ。もしくは執事。

「その手袋は杖の一種よ。普通、魔力を運用するときなにかしらの媒介が必要になるわ。体内にある自己魔力を周囲にある自由魔力に干渉させるのが魔法と魔術共通の基礎。そして自己魔力を体外へ放出するとき通るのが杖ね。杖というのは通称でその手袋とか指輪、剣だったりもするわ。もちろんその名の通り杖の場合もね。それじゃあ始めるわよ。まず手のひらに火が出るイメージを持ちなさい」

右手を突き出し掌に火球をイメージする。火、火、火。イメージする。赤い、マッチ、焚き火、ライター、太陽……。

五分ほどそうしていただろうか、ほんのりと右手が熱を帯びてき

た気がして。イメージ、イメージ、イメージ。

「流れは結構きれいね、癖がないからかしら。次に体を巡る魔力を掌の一点に集中させなさい」

熱を感じながら、体の中心から腕、足、頭、そして内側の体を巡る魔力……血管を流れる血と同じようにイメージをする。流れの向きは一定に、そして間断なしに巡る。そしてそれを右手に……。

「その調子よ。だいぶ右手が熱くなってきたんじゃないかしら？じゃあ最後は実際に火が生まれるとハルが思える言葉を口にしなさい。イメージは続けたままよ？　言葉は長くてもいいし単語でも構わないわ」

え？　てっきり呪文があると思ったけど、違うんだ。いや、ここで呪文を説明されても覚えられる余裕なんてないんだけれどもね。

火が生まれる言葉。私自身がそう思える言葉か。

この世界は私の世界とは違う、ここには魔法がある、私はそれを知っている。私の世界にはなくてもここには魔法がある、私には信じられなくてもそれは存在する。ここでは私は非常識だ。でも、その現実に折り合いを付けて目的のために来たんだ。ならばどんな簡単な言葉だって私はその非常識を信じられる。

「火よ」

突き出した右手が瞬時に炎に包まれる。赤い、紅い炎。私の言葉で生まれたその炎に熱さは感じない。手の平に集まっていた熱が発散していく感じがした。さっきの熱が体内の魔力なのだろうか？

右手を包んでいた炎はだんだんと手の平サイズに縮んでいった。でもその存在が消えていってるわけではないのが確かに感じられる。密度が上がっているというのが正しいのかな？　そうして私の掌には野球ボール大のイメージした通りの火球が出来上がっていた。やっぱり火の基本魔法といえばファイアボールだと思う。

それにしてももうちょっとこう、艱難辛苦を想像していたからあっさりと成功して肩透かしを食らった気分だ。まぁこれは初歩の初歩なのは間違いないのだけれども。今日一日掛けて切っ掛けが掴めればいいなと考えていたのは修正した方がいいかな？

「ただ火を出すのじゃなくて形にするなんて、筋はありそうね。どう？　初めての魔法の感想は？」

「肩透かしを食らった気分……ですね。もっと難しいものだと思っていましたので。それと呪文がないのも驚きました。これだと魔法学校ではどんな言葉にするか悩む子もいそうですね」

感じたままを言葉にして返す。もしかしたら魔法世界には今この言葉が熱い！　なんて流行があったりするのかもしれない。そう考えるとちょっと楽しいな。

そんな風に言葉の流行り廃りに、多くの魔法使いが振り回されているのを想像していると、メルはとんでもないことを言い出した。

「あるわよ」

「えっ？」

「だから呪文はあるわよ。特に魔法学校では懇切丁寧に教えているわ」

「いやいや、えっなんでそれを教えてくれなかったんですか？」

「さっきも言ったように、魔法と魔術の基礎は自己魔力の発散から自由魔力への干渉よ。そして基礎はそのまま本質になる。そのことを意識すれば今のハルみたいに初心者でも極端に劣っていなければ魔法は扱えるわ。ねぇ、ハル。魔法が普及すると誰が一番得をするか分かるかしら？」

紅い紅をさした唇が弧を描く。その目は笑っているけど、瞳は苛烈な光を帯びていた。挑発するような、憤りを隠すようなその表情に私はまた見惚れてしまった。

魔法の普及による利益。一般人はむしろ不利益を被るだろう。知らないだけで周りには武装している人がいるようなものだし。では、魔法世界の住人か？　でもそれは範囲が広すぎる気がする。普及により魔法が使えない人への差別もありそうだ。となるとやっぱり魔法使いだろうか。

「魔法使い、ですか？」

私の返答にメルは三角は上げましょうと言いながら、唇に指を当てている。正直、ときめきました、はい。

「魔法使いに変わりはないけれど、恩恵を授かるのは一部の権力者よ。それも国や世界を動かす程のね。魔法使いが増えればその国の、いや世界の軍事力が増える。それは魔法世界外にも大きなアドバンテージを得られるわ。そして普及させるのに最も効果的なのは、記

号化させて規格を統一すること。現象に名前を付けて、記号化させる。自分達に都合のいいように改編してね。記号化すれば管理も容易だわ。使える呪文がわかればそれは人ではなく駒になる。戦場は盤上に、人は駒に。あとは指揮官が操作するだけ。実に効率的で簡素化されているわ、反吐が出るほどにね。そしてそれを教え込むのに適しているのが魔法学校よ。右も左もわからない幼雛にかくあれかしとね。そして雛は学ぶのよ、呪文を唱えれば魔法が発動するのだと、魔法の本質は呪文であると。喩で言うなら、魔法学校で教えているのは九九なのよ。数字の意味は教えず、そうであるとただ覚えさせるだけ。今でも多くの魔法使いが学校で習ったものや権力者によって検閲された魔法書を参考に魔法を使っているわ。なにも疑問を持たず、どういう過程で魔法が発動するかわからず、その魔法では権力者には抗えないことを知らずにね。言わば魔法使いに教えられている魔法というのは権力者にとって都合のいい駒にするための洗脳でしかないのよ。わたしが嫌いな理由がわかったかしら？」

「……」

本質を知らず、作られ与えられた神秘をさも自分が辿り着いた極地のように振る舞う。自分たちは優れていると思い、天を穿つ塔を建てるというのか。

それでは、それでは滑稽という言葉すら役不足な彼らをなんと呼べばいいのだろう？　道化ですらない彼らを、駒であるように作られた彼らをなんと呼べば。道化師は舞台の上だということを知っている。右を見ても左を見ても全く同じ技術。何故かを問うことのない者達。それは進化の拒絶ではないのだろうか？

ep. 06　修行と私と戦闘と暴露

弟子生活七日目

私が作った朝食を食べ、食休みをした後に今日も外に出る。ちなみに家事は掃除洗濯は私が、料理は一週間のうち過半数を私、残りはメルが担当することになった。当初は食事も毎日私の担当になるはずだったけれども、この世界での初料理が今イチな出来でそこそこだけど毎日は任せられないとのことで分担に。いやぁ、塩コショーとか醤油、だしの素とかの調味料って偉大だったんだなぁ。……これ、私がこっちの日本の辺りで作れば大富豪になれるんじゃ……いや、捕らぬ狸の皮用算はここまでにしておこう。

また今日までの間に今の世界の情勢や地理、その他色々な話を聞くことができた。今の私が知るかぎりの情報を纏めると、ここは１３３０年のアラゴン王国で最近イングランド王国とフランス王国との緊張が高まっているらしい。魔法使いの間でも、有能な人材を取り込もうとする動きがここ最近活発になってきたのだとか。

１３３０年って１４世紀か。この時代のヨーロッパの戦争と言えば……うん、よくわからない。日本のことじゃないし、しかも戦争多発のヨーロッパ史なんて覚えているはずがない。歴史好きな人からすれば非常識なのだろうけど。

外に出ると海が青いのも頷けるほどの空が広がっていた。ここはなんか魔法と魔術をうんたらかんたらして、外と位相をずらした隔絶した場所らしく、天候も一つに固定出来たりするのだけれども、それだと薬草や作物が育たないから、変化を持たせてるとメルが言っていたな。

それにしてもいい天気だ。快晴というより、もはや皆晴だね。皆までよく晴れているよ。カラッより一つ上の表現が必要だな。オラッ……違うな、何と戦っているんだ。ジャラッ……あぁなんか金貨を袋から掴み出してニヤニヤしてる小太りなオッサンが目に浮かぶ、強欲だな。ワラッ……え、何で笑われてんの？　ワタシナニカシタ？　うぅむ、他に何かないものか。

「ハル！　そんなところで百面相していないで早くいらっしゃい。今日から本格的に始めるのだから惚けてる暇などないわよ」

メルに呼ばれて慌てて我に返る。どうもこちらに来てからというもの考え事が多くなった気がする。まぁ、会話する相手は今のところメルだけだから、当たり前なのだけれども。

さて、今日から本格的に魔法の修行に入るらしい。初日に火を出して以来、まずは私の得意な属性や攻撃、補助、防御、探査、その他などの得意系統を調べたりしていてやっとその工程が終わったらしい。できれば全てに適性があればいいのだけれどなぁ。

「さて、検査の結果だけれども心して聞きなさい。先ずはハルの得意属性は一番が火で少し劣るのが光、普通が土で風はなんとかってところかしら。一本の蝋燭に付けた火を三人がかりで消すくらいの差があると思いなさい。それ以外の属性については発動しないと思っていいわ」

やっぱり火との相性は良かったのか。水の適性がないのが辛いなぁ。あれば飲み水やその他の生活用水には困らないのに。土と合わせて完全自動栽培魔法とかしてみたかったなぁ。

「次に系統よ。防御に関しては自信を持っていいわ。ハルはコントロールがいいから密度の高いものが出来るはずよ。攻撃に関しては普通よりかはマシといったところね。一流には撃ち負けるけれど、そこは機転と知恵で切り抜けなさい。補助に関しては諦めなさい、ハルの身体が拒絶しているから無理よ。探査系に関しては将来に期待といったところかしら。それと空間の構築には絶望的に適性がないけれど、空間の移動に関しては中々光るものがあるわ」

ふむふむ、防御は一流攻撃二流、補助は無しで探査は未定。それと空間の移動か……。逃げる手段ができたのは重畳かな。戦う状況に陥らないのが一番だけれど、想定をしないといけないからね。

「それで、修行内容はどうなるのですか？」

「そうねぇ、先ずは自身の魔力量をきっちり把握することからね。いざというときに魔力がありませんなんて、三下なんてものじゃないわ。それと有効範囲の見極めかしら。元となる魔力は自分が放出するのだから、当然遠くに行けば行くほど効果は薄れ最後は発動しなくなるわ。遠くまで攻撃する魔法というのもあるけれど、あれも発動自体は自身の近くで起きているからそこは注意ね。魔法の有効範囲と、魔法発動の有効範囲を読み違えると痛い目を見るわよ？」

つまりは己の限界を知れということか。できることとできないこと、それを知らないとどうにもならないから異論はもちろんないな。

「じゃあ、手始めに手に火を出しなさい。そして火の圧縮と拡散を十回繰り返しなさい。それができたら次は二メートル先に火を。その次は更に二メートル先に、とどんどん遠ざけて行くように。目視じゃ距離がわからないからこれを貸してあげるわ。それを掛けていれば距離もわかるし、遠くの火もよく見えるはずよ。それじゃあわ

たしは工房に戻るから頑張りなさい。黒猫を見張りに付けておくからサボっても無駄よ。魔力が尽きるか、日が落ちたらまた来るわ」

じゃあね、といいながら家に戻るメル。工房でなにをどうしているかは知らないけれど、きっと魔法か魔術関係なのだろうな。

メルに渡されたメガネを掛けてみる。なるほど、見た目はメガネだけど双眼鏡だコレ。しかも、視点の真ん中に点が打ってあってそこまでの距離が下の方に表示されている。これなら肉眼では確認できないほど離れても、修行は続けられそうだ。

では、右手に魔力を集中して。

「火よ」

弟子生活たぶん一年とちょっと目

さすがに一年も修行をすると腕も上達するわけで、今の私は火なら魔法学校でいうところの古代魔法に手が届くレベルになった、らしい。というのも魔法学校で教えられるものを見たことがないし、ここで魔法を使えるのは、私以外にはメルしかいないから比較が出来ないからだ。最初に比べて地力が上がったのは私自身も実感はしている。ただ、それが魔法使いの間ではどの程度のランクかは知らないけれどね。

そんなことを頭の片隅で考えながら、日課となった魔法の有効範囲の確認をする。一番最初は２００ｍでヒィヒィ言っていたけど、毎日続けた成果なのか今じゃ開けた場所では１ｋｍ先の釜戸に火を点けれるくらいになった（ちなみにメルは家から見える雪山の雪を

一部溶かして文字を書いてみせた。凄すぎて頬が暫くもとに戻らなかった）。そして魔力量の方も一年前の１．５倍ほどになっている。最もこちらの方は先天性のものなのでここらで打ち止めだろうとメルは言っていた。後は術者の力量ということだ。

次に魔法のことだが、嬉しいことに私には探査系の才能もあったようだ。しかも得意属性に光があることで、遠視の魔法は日中なら千里眼と言っても過言ではないレベルに達している。このことにはメルも予想外だった様で、手伝いとしてではなく仕事として正式に依頼をされたこともあった。また、本来は光の属性とは攻撃には向かないものらしい。それは光というものの本質が不明であること、他の属性以上に日常的であるため攻撃に用いるイメージが浮かびにくいこと、そして使い手が少ないことが原因であるらしい。なので光の魔法と言えば癒しやライト、精査といった補助系統が一般的だそうだ。故にメルは私に将来に期待といったみたいだけど。

なぜここで光と云う属性について一般的な説明をしたかというと、私が一般的ではなかったからだ。

元の世界ではここ以上に光が溢れていた。それは火とは違う光で、一日の間目にすることなく生活するのは不可能であるくらいだった。そして光というものがエネルギーであり、可視光線や赤外線、レーザーといった存在も知っていた。さらに私の一番の得意属性は火であり熱の操作も馴れたものだった。以上の点から私は高速で貫通能力の高い魔法――名前はそのままレーザーにしている――や、なにも見えないのに対象地点の熱を上げる魔法といった極めて殺傷能力の高い魔法という異常な偉業を成し遂げてしまった。レーザーに関しては、出力も低いし狙いも粗いが、それに目を瞑ってもなお有り余るほどの実用性があったためにメルから切り札になると言われたほどだ。

それにメルから魔法で出来ることを教えてもらっている。遠視とか探査といった補助系統のほとんどの魔法は教えてもらったものだ。攻撃系統の魔法は出力を上げたり、範囲を広げたりすればいいのでメルの召喚した悪魔や森にいるよくわからない生物との実戦を中心にしている。おかげで血が平気になったのは嬉しい誤算だった。調理の度に気持ち悪くなるのはごめんだ。
そして今日は日課の後は、メルの言っていた火と土を応用した溶岩を作り出す練習をする予定だった。

予定は未定とは誰が言い始めたのだろうか。たぶん最初の人も肩を落としながら言ったのだろうな。

「ハル、手加減は無用よ。『刻むもの』メルディン＝カルディナの弟子として地に足以外をつけることは赦さないわ」

膝すら着いてはいけないんですね。魔法使い相手の実戦は初めてなのですが。
私の今、黒いマントを付け身長ほどの長杖を構えている自称『正義の魔法使い』と名乗った敵と対峙している。うっすら笑みを浮かべているのは、私に対する嘲りだろうか？

「正義の魔法使いが負けるはずがないだろう！　怪我しないうちに止めた方が懸命だぞ？　俺は手加減もお遊びも慈悲も情けも容赦もないからな」

嘲りでした。はぁ、どうしてこうなったのだろうか。

事の発端は黒猫からだった。いつもは外でそよそよと風に撫でられながら夕方まで寝ているのだが、いきなり丘の下に向かって威嚇

を始めたのだ。突飛な行動に惚けていると、家の中からメルが眉間に皺を寄せそれはもう苛ついていますとばかりに出てきた。あそこまで苛ついていたのは、以前に私の修行相手としてメルが召喚した悪魔が暴言をメルに向けて吐いたときくらいだ。どんな暴言だったか？　勇気と無謀とは違うものなのだよ。一つ言えるのは、女性とは内面も外面も美しくあるために日々努力していると云うくらいだ。

さて、黒猫だけでなくメルまでも出てくるとなると私としては非常に不安になるわけで。何度か森から迷い出てきた魔物がいたりしたけど、メルが私に倒しといてと念話で軽く頼んでいたし。そうなると一体何が来るのやら。

とりあえず、何時でも魔法を発動できるように自己魔力の流れを活性化させる。補助系の魔法が扱えない私が、どうにかして身体能力を上げられないか考えた末の策だ。自己魔力を活性化させて、一瞬で防御に回せるようにする。悪魔の容赦ない一撃から何度も命を助けてくれた大切な技術だ。

探査魔法は必要ないだろう。今の私にはまだ生物を精査することはできないし、恐らくメルと黒猫は何が起きているか把握している。ならば遠視を使っても私にしか意味はないし、それなら余計な魔力は使わないほうがいい。

３０秒ほど三人で丘の下に目を向けていると、なにやら黒い集団が見えてきた。その集団は止まることなく真っ直ぐこちらに向かってくる。いくつかの魔法を使う準備を整え終わる頃には、黒い集団は家の前まで来ていた。魔法使いだ。数は7人、全員が黒いマントのフードを被り、節くれだったてっぺんに宝石のような物が付いている長い杖を持っている。これが魔法使いでなかったら引き籠もってやる。

「お前がメルディン＝カルディアナだな？」

「最近のゴミは喋れるようになったのね。知らなかったわ」

あ、空気が凍った。どうやらメルは私の予想以上に頭に来ているらしい。まぁ、不法侵入者が徒党を組んでしかも偉そうにしているなんて誰でも怒ると思うけど。

「たかだか魔女風情が舐めた口を。今なら我々フランス魔法教団に無償奉仕するというなら減罰してやってもいいぞ？」

フランス……以前メルの言っていた勧誘というやつかな？　脅迫のほうが正しい気がするけれど、それほど戦力の確保に必死なのだろう。……いや、さっきの尊大な態度からしてただの馬鹿か。

「何が目的かと出向いてみれば、下らないわ。ハル、片付けておきなさい。」

「ほう？　我々、正義の魔法使い相手にこんな若造で十分だとでもいいたいのか？」

「あら、少しは理解力があるのね。そうね、ハルに勝てたなら協力してもいいわよ。」

いきなり何を言いだすのですか。

「いいだろう、相手は俺が務めよう。どうやら我々正義の魔法使いの強さを教育してやらねばいけないようだな。」

え、乗るんだ。なんか偉そうなことを言いながら先頭にいた男が前に出ているけど。というか正義の魔法使いって何なのか誰か教えてほしい。碌でもない連中としかわからいのだけれども。

その後他の自称正義の魔法使い達が大きく距離をとり、相手になってやるといった人物と私が数十メートルの距離をとり対峙している。そして、先ほどのメルの命令となるわけだ。要約すると不法侵入者を撃退しようってことだ。

「ニカ・ハカメシ・ツヒユフヤ・メユ　水の精霊３０柱　集い来たりて敵を射て　『魔法の射手・水の３０矢』！」

先手は自称正義の魔法使い、敵に回ったのだから自称だろうが他称だろうが関係ないけど。詠唱が終わると同時に敵の周囲の魔力が干渉を受けるのを感じる。それはすぐに矢というより投槍に近い水塊へと形を変えていった。魔法の矢で属性は水か、数３０くらいなら撃ち落とせるはず。

「土よ」

右手を地面に向け私だけの引き鉄を引く。イメージするのは打ち上げられる礫、範囲は私と敵の間に設定。

バシャバシャバシャバシャバシャ

土塊が、石が礫となって真っすぐに私に向かってくる水の矢を撃ち落とす。見境なく設定した範囲全てを塗りつぶすように地面が沸き立つ。これならあの程度の数なら抜けることはないだろう。

魔法の矢の残り数を気に留めながら周囲の熱を操作して不可視の

鎧を作り上げる。火と光の合わせ技だ。生半可な物理攻撃や、水や風といった質量のない攻撃には優秀な防具だ。それにこのまま近接攻撃すれば、相手はたまったものじゃないだろう。もっとも、私に近接格闘の技術がないので夢想するだけなのだが。

そして遠視の魔法を斜め上空で発動させる。本来この魔法は自身額の場所でやるらしいのだが、遠隔発動を一年間ずっとやり続けたのだ。それにこの魔法の有効な使い方は絶対この俯瞰視点だと思う。独特な視点に慣れるまで時間はかかったけど、今では戦うときの必需魔法となっている。

「ほほう、全部打ち落としたか。ではこれはどうだ？　ニカ・ハカメシ・ツヒユフヤ・メユ　全てを食らう嘆きの瀑布　集い流れて敵を呑め　『暗き濁流』」

また水属性か。敵の背後で魔力が淀み、廃病院の貯水タンクに溜まった雨水のような暗い瘴気を内包した水流が溢れ出す。やっぱり水の適性欲しかったなぁ。飲み水に困らないというのはかなりのアドバンテージだと思う。

「火よ」

一番軽い引き鉄を引く。右手を左から右に振りぬき、炎の波を生み出す。敵の魔法は威力よりも範囲を重視したものだ、使われた自由魔力がさっきの水の投槍よりも少ないから間違いはないだろう。範囲を重視する魔法を使うのに有効な時は、相手が大群か、動きを捉えられないか、足止めをする時というのが私の経験則だ。そしてそれを崩すには相手の魔法を一瞬で無に帰せばいい。そういえば今更だけどさっきから呪文の前に何を唱えているのだろうか？　意味

があるとは思えないけど。

炎の波と濁流が中間のあたりでぶつかる。拮抗したのは一瞬で、容赦なく炎の波は濁流を呑みこみそのまま敵に襲いかかった。敵の魔法を削りながらだったので威力はないから、気をそらして詠唱を中断させてくれれば御の字だ。

「ほ、ほうなかなかやるじゃないか。そろそろ本気で行かせてもらうぞ」

魔法障壁を展開したのか杖を前に突き出し炎を打ち消す。というか足止め魔法撃ってきたくせに追撃はしてこないのか。いや、足止めの効果をなしていないのなら無理に追撃するのは愚策と判断したのかな？

「全力を出させたことを後悔するがいい！　ニカ・ハカメシ・ツヒユフヤ・メユ　鍵はなく　許されざる罪人縛るは　水の戒め　それは切ること叶わぬ　絶対の鎖」

また水属性か。詠唱を聞く限りまた足止め系の雰囲気がするけど、とりあえずさっきのよりは高威力だろう。ならば補助の使えない私に広範囲魔法を避けることは難しい。なら私は集中力を、より大きな魔法を現実化させる為の言葉を紡ごうじゃないか。

「火よ、火よ、火よ。始まりの英知をここに示せ」

紡ぐは火の言葉。自分で決めた、引き鉄を引くための呪文。より大きな力を使うには自己に陶酔をしなければならない。それこそが呪文の本質であり、言葉に貴賤はなく、ただ自己を高めるのみ。

「水の回廊！」

どうやら敵の詠唱が終わったようだ。私を中心に円上に１２本の直径１メートルほどの水柱が出現した。使用された魔力は先程までのまでの魔法など児戯に等しく思える。これは確かに全力なのだろう。それにしても色がどす黒い。綺麗な水だったなら幻想的な魔法だったろうに。

「終わりだ！」

敵がなにやら叫ぶと水柱がゆっくり回転し始めた。速度がだんだん上がっていく。一体これからどの様な攻撃が来るのか気になるけど、わざわざ魔法を受け切る必要はない。出現したときにはこちらの魔法に反応して発動するカウンター魔法を警戒していたけど、もう必要ない。こいつは弱い。

「業火絢爛」

視界が白く染まる。おそらくメルと私以外にはなにが起きているのか理解できないだろう。現に後ろの方に下がっていた自称集団は目を押さえながらのた打ち回っている。何人かはまともに目にしたのかな。どうでもいいけど。

一瞬にして全てを蒸発させるのは私が生み出した白い炎。沸騰の時間すら与えない、その時間がもったいない。よくもこんなレベルで殴り込みに来たものだ。周囲の水気は私の炎に呑まれて、空へと帰っている。一瞬で多量の水蒸気が発生したためか、風が渦巻き熱波を拡散させている。自称はなにやら喚き散らしているが、生憎と炎の音に掻き消されて聞こえない。離れたところでは自称のお仲間たちが地面にうなだれているが、この熱気に当てられたのだろうか

？　ホントにどうして来たのか不思議でならない。

「埋葬が面倒だわ。骨も残しちゃダメよ？」

「Ｙｅｓ，　ｙｏｕ　ｃａｌｌ　ｔｈｅ　ｓｈｏｔｓ！」

メルは平然としている。これくらいの魔法じゃメルの障壁は抜けないのはしっているし、今回はただの余波だ。最初はなんでわざわざ私にさせるのかと思ったけれど、メルなりに私の実力を自覚させたかったのだろう。もう一年も一緒に生活しているのだ、メルなりの優しさというのは骨身に沁みている。

ちら、と未だに何かを喚いている敵に目を向ける。腰が抜けたのだろうか、尻餅をついたまま立ち上がろうろせず手を振りまわしている。たかだか魔法が打ち破られただけじゃないか、なにをそんなに恐れる？　まだ杖も魔力も残ってるじゃないか。それくらいで諦めるのか？　生を放棄するのか？　まぁ、そんなことは殊更私に関係ないけどね

。揺らめいていた白い炎を操り鎌首をもたげる。ついでだから制御の練習もしておこう、無駄な時間を過ごしたのだから。手を使って後ずさりする自称正義の魔法使いには、今なにが見えているのだろうか？

「あ〝ぁ〝――」

顎門を大きく開けて一気に呑みこむ。短い悲鳴を残し敵は炎の中に消えていった。最後の最後まで何かを訴えかけいてたけれど結局聞こえることはなかったな。どうせ命乞いか呪詛かどっちかなのだから気にしないけど。

注文どおり灰すら焼き尽くした後で炎を霧散させる。ついでに熱の鎧も解除しておこう。自称のお仲間さんにとっては少々苛烈過ぎたらしく肩で息をしている。露出していた部分が赤くなっているところをみると、あの程度の余波すら完全に防げなかったというのか。もしかして、さっきの奴がリーダーだったのだろうか？　なんというかご愁傷さまである。

「あらあら、よく燃えるゴミだったようね。そういえばハルが勝った時どうするか考えてなかったわね。……ハル、何かいい案はないかしら。」

そういえばそうだった。あまりにも突然の出来事だったので忘れていたけれど私が負けたら協力するとしか決めていなかったな。

「実験の材料というのは？」

「使えるレベルじゃないわ」

「労働力」

「却下。ゴミを保存する場所なんてないもの。ハルの修行の的には使えるかしら？」

「遠慮させていただきます。悪魔や魔物の方がいい相手です」

二人して後処理の方法を考える。すでに家のことは手が足りているので、わざわざ不法侵入者を使う意味がない。元より家の中にいれたくもないし、修行相手としては弱すぎる。

「こ、ここから出してくれ！　もう二度と勧誘はしないから！」

「「却下」」

悩んでる私たちを見て自称正義の魔法使いの一人が声を上げる。だが、そんなことありえない、居所の割れている魔女なんてどこの世界に居るというのだろうか。それに、私の魔法も見られている。魔法使いとして秘匿するというのは、他者に自らの技術を悟らせないためだ。居所を知られた時点でここは引き払わないといけないし、目撃者は消さないといけない。記憶を消す魔法もあるというが、結局は物理的に破壊するのが確実なのである。

ナァー

クイッと引かれた裾をみると、黒猫がなにか期待した目で私を見つめている。……あぁこういうのはどうだろうか。

「メル、黒猫が欲しがっているようですし何人かあげてみては？そして残りは代償にして悪魔召喚しましょう。どうせ処分するならそれが最適じゃないですか？」

「……そうね、それがいいかしらね。欲しいものは持って行きなさい。ただし持っていったものは残さないこと」

ミャー

黒猫は私の足に体をすりすりと擦りつけた後、元気に駆け出して行った。お礼のつもりだったのだろうか。後でちゃんと撫でさせてもらおう。

結果的に黒猫は二人持って行った。残りの四人で一体の悪魔を召喚したのだが量を取るか質を取るかといったところで、どうせなら珍しい相手にしましょうとなったのだが……さすがに爵位持ちにはまだ歯が立ちませんって、メル。

伯爵級に散々未熟さを叩き込まれた後、お引越しの準備となった。メルは私が伯爵に弄ばれている間に引越しの準備をしていたらしく、後はどこに引っ越すか決めるだけらしい。

「それにしても何故ここがわかったのでしょうか？」

「さっき外を精査してみたら町全体に魔法が掛けられていたわ。魔力の集まるポイントにマーキングをする魔法がね。恐らくは戦争が始まる前に有利なポイントを確保するために掛けられたのでしょう、そして不自然に魔力の集まるポイントが目について……というところかしら」

「認識阻害の効果はなかったのですか？」

「普通の魔法使いが通りかかる分には十分だけれど、複数の魔法使いが目的を持って探していたならその効果は著しく低下するのも仕方ないわ。遅かれ早かれ来たものがあの程度だったことを喜びましょう」

「そうですね」

紅茶を一口飲み、テーブルに広げてある地図に視線を落とす。今は引っ越し場所について協議中だ。

「そういえばハル、一つ聞きたいことがあったのだけれども」

「なんですか？」

視線を上げるとにっこりとした笑みをメルが浮かべていた。本当に綺麗だなもう。そんな笑みで尋ねられたらなんでも答えてしまいそうじゃないか。

「人間を殺したのは今日が初めてよね？　なにか感想はあるかしら？」

なんだそんなことか。

「特になんとも。強いて言うなら悪魔よりよく燃えましたね」

それだけだ。

「少しは葛藤するかと思ったわ」

ずいと体を近づけてくる。近づくたびに頭が痺れるような、心が囚われるような色香が漂ってくる。白い、それでいてうっすらと桜色をした首筋、むしゃぶりつきたくなるような鎖骨、そのさらに下には衣類からこぼれ落ちそうなほど熟した果実がさらに意識を揺さぶる。小さなテーブルだ。私とメルの距離はやがて零になり、そのまま交差すると私の耳朶を甘い言葉がうつ。

「ねぇ、そろそろ教えてくれてもいいんじゃない？」

そうだ、教えてもいいじゃないか。ニケに止められた覚えなどないし、教えるのはメルだけだ。この広い世界に一人だけだ、それにメルは恩人じゃないか、教えない方がむしろ不自然じゃないか。

それに勝手に危惧するなんて神様気取りなのか？　いつからお前はそんなに偉くなったんだよ。さぁさぁ言おうよ、言っちゃえって、楽になろうぜ。

頭が痺れる。脳が、内臓が、全てが溶けて混ざり合う。くるり、くるり誰かが私をかき混ぜる。くるり、くるり、優しくゆっくりと。

「メ、ル、これ、……が」

「否定はしきれないわ。でもね、発動するのは対象の同意が必要なの。だから、それはハルの望むことなのよ」

そうか、これは私が望む結果なのか。この世界に来て早一年、私は家が、帰るべき場所が欲しかったのだろう。そしてそれをメルに求めた。家の中でも荷物を下ろさない住人はいないだろう。世界でただ一人の知っている真実。それは私が思っていたより重かったようだ。思考がゆっくり沈んでいく。心地いい。あぁ、最後にメルに伝えないと。

「メ、ル」

「なに？」

「た、だいま」

「お帰りなさい、ハルキ」

ただいま、ただいまメル。目が覚めたら今までの関係は変わっているかもしれない。引っ越しも終わっているかもしれない。でもそんなのはどうでもいい。あぁ、おやすみなさい。

ep. 07　メルと私と食事と魔法世界

鈍い痛みと共に意識が覚醒する。目を開けるとそこには見慣れた天井があった。はてさて、いつの間に自分の部屋へ帰ってきたのだろうか？　たしか、引っ越しをすることになってメルと話し合いをして、魅せられて……。それから先はよく覚えていない。覚えていないったら覚えていないのだ。

朱色に染まった顔を扇ぎずつ、身仕度を済ませる。引越しをするなら外に出る可能性もあるので、メルから貰った一般的な服を着てダイニングへ向かう。メルはもう起きているだろうか？　私のことをどう思っているだろうか？　色々な不安が頭を過るけど、心の奥では安心している私がいた。

「おはようございます、メル。昨日は部屋までありがとうございました」

ダイニングでは、既にメルが朝食の準備を始めていた。

「あらおはよう、ハル。とりあえずもう出来上がるから席に着いてなさい」

フフンと鼻歌混じりで台所に立つメル。まるで新婚生活と云わんばかりのテンションである。いや、朝はそんなに強くなかったですよね？　というかそんな絵に描いたような上機嫌な姿は初めて見たのですが。朝からご馳走様です。

「それでメル、昨日のことなのですが」

食後の一杯を飲みながら話を切り出す。お互いに聞きたいこと、言いたいことが色々あるはず。先ずはなにから始めようか？

「その前に一つ言っておきたいことがあるの」

自然と肩に力が入る。なんだろうか？　もしや破門とか言われるのだろうか？

「……何ですか？」

「そんなに緊張しなくてもいいわ、三日前よ」

「え？」

「だから三日前よ、アレは。ハルは丸二日間眠りっぱなしだったの。心配は要らないわ。体調管理は万全よ。ついでに言えば引っ越しも終わったわ」

全く身に覚えが無い。メルがこんなことで嘘をつくとは思えないし、もしかして頭痛は寝過ぎていたからだろうか。というかじゃあここは何処なのだろう？

「そう、ですか。じゃあここは？」

「ここは変わらないわよ。わたしの作った世界、ハルからすればよくできたスノードームのようなものかしら？　移ったのはマーカー、いわばここへの入り口だけよ」

私からすれば……か。何処まで話したかは記憶に靄がかかっているけど、世界の成り立ちは話したのだろうな。

「怒っていますか？」

思わず口に出してしまう。答えなんてわかっているのに、メルが言ってた通りだ。臆病者。

「まさか。んふふ、それなら面倒みたり、こんな上機嫌なわけないじゃない。わたしは今ね、とっても楽しいの。こんなに楽しいのは、そうね初めてルーンを刻んだとき以来かしら。あぁもうなにから話しましょうか。どれだけ言葉を尽くせば、いくつの色を使えば表現できるかしら。ハル、ハルキ、サクライハルキ。アハッ、貴方と出会えて本当に、本当によかったわ」

自らを抱き締めながらそう告白するメル。体は小刻みに震え、上気し、息遣いが荒くなりながらもしっかりと私を見つめる姿は、甘美で、淫靡で、そして愛しかった。

これは暫く時間を置く必要があるかな。黒猫が陽なたぼっこをしている窓から外を眺める。以前となにも変わっていないはずなのに、太陽が少し黄色く見えた。

「落ち着きましたか？紅茶のおかわりはいかがです？」

「えぇ、ありがとう。貰うわ」

メルが落ち着いたのは結局一時間後だった。膝に乗せていた黒猫を抱き上げ、窓辺の指定席へと移動させる。そしてキッチンで紅茶をいれメルへ。紅茶は汲みたての水を沸かした水に限る、まぁメルの受け売りだけど。

「どうぞ。それで、とりあえず入り口は何処に置いたのですか？」

実際これが一番気になっている。最後に話していた問題点がこれだったから。

「外？外はアリアドネーよ。それだけじゃわからないと思うから、付け足すと魔法世界の一都市よ」

「ま、魔法世界ですか。実在したんですね」

いや、あるとは知っていたけどまさかである。百聞は一見に如かずとはこういう時にも使えるのだろうか。ということは、外には今まで以上にたくさん魔法使いが……って。

「メル、この前の奴らって魔法使いでしたよね？」

「えぇ、セイギノマホーツカイーとかいう変わった鳴き声だったわね」

「それに関しては反論しませんが、大丈夫なんですか？またあんな奴らがすぐにでも来るんじゃ……なんせ外は魔法使いだらけなのでしょう？」

また不法侵入者が現れてしまっては意味が無い。それに総数が増えたなら、また戦争に手を貸せなどいうセイギノマホーツカイーが、しかも前より手強い奴が来る可能性も高くなる。対処できればいいのだが、そうでない場合は……。

「それでもここの方が静かなのよ。まず第一に魔法世界の人々にとってフランスとかイングランドとかどうでもいいの。多少の影響は

出るかもしれないけれど、介入するほどじゃないわ。だって魔法世界から出たことのない人の方が圧倒的に多いのだから。第二に今はそういう連中はこちらにはほとんどいない。まぁ、母国のために勧誘をするほど熱心な連中が、いつ始まるかわからない戦争に備えて帰っているのは当然よね。最後にここアリアドネーは中立で、学術都市なの。学ぶことは推奨され称賛され賛辞されるわ。学ぶ意志ある者なら如何なるモノであろうと守られる、それがアリアドネーなのよ。つまり学ぶ意志さえあれば、ここが旧世界と魔法世界合わせて一番安全なところなの。あぁ、旧世界というのは今までいた世界のことね」

……学ぶ意志さえあれば誰でも暮らせるのか。ここで何を学ぶのかとか色々と考えないといけないけれど、今はここが安全な場所だということだけで十分かな。

さて、今日は何をしようか？　時計の針はもう頂点で一つになりそうだ。日課は勿論するとして、それを終えてから森に潜るにしても悪魔を召喚してもらうにしても時間がなさすぎる。

「あぁ、それとハル。今日は外に行くから日課が終わったら支度を整えてわたしの部屋に来なさい。せっかくだもの観光でもしましょう」

「……わかりました。おやつの時間までには準備が終わると思います。ではいってきますね」

観光かぁ。観光なんて卒業旅行で北海道に行った時以来じゃないかな？　まさか魔法世界が初めての海外旅行になるとは想像もしていなかった。当たり前のことだけど。それでは日課をこなしに行きましょうか。

日課を終え風呂で汗を流し、一年前にメルから外出用と言われたままタンスの肥やしになっていた服に着替える。黒めの長ズボンと白地に赤色で幾何学的な刺繍がされたシャツを着て、その上にゆったりとした滅紫のフード付きマントを羽織る。滅紫いいよね滅紫、名前が気になって覚えてしまった色だけれどいかにも魔法使いという色だからお気に入りになった。簡単に言えば濃い紫なんだろうけど。って今はそんなことよりメルの部屋に行かないと、そういえばメルの部屋を訪れるのは久しぶりな気がする。

「メル、入りますよ。私の準備は完璧です」

「今少し片づけをしているからそこの椅子にでも座ってゆっくり待っていてちょうだい。くれぐれも机のものや棚の中とかを不用意に触らないこと。下手したら腕が溶けるから気をつけなさいね」

誰がそんな状況でゆっくりできますか、と片づけをするといって左奥の扉へと消えていったメルの背中に念を送る。

片づけにどれくらい時間がかかるかわからないど、ゆっくり待っていてと言うくらいには時間が掛かるのだろう。出発前に疲れても何だし、ここは言われたように椅子に座って待つとしましょうかね。

部屋の壁には理科室でしか見たことないフラスコやビーカーといったガラス器具が、種類ごとにしっかり分けられて鎮座している棚が沢山ある。というかガラスってもう一般的なのかな？　魔法使い自体には関係ないことだけど少し気になる。他には緑色の分厚い本と、紙が散乱している机に器具の洗い場、禁庫みたいな錠付きの棚があるくらいかな。魔女の代名詞的な大釜がないけれど、普段から

あんな大量に作るわけないしどこかに保存されているのだろう。魔道書や論文などの書物も劣化したり、研究の影響を受けないように別のところに保管されているのだろうな。

そんな風に部屋の中をざっと見回した後で、暇潰し代わりに実験器具の名前をどこまで覚えているか挑戦していると奥からメルが出てきた。

最初に会ったときと同じような淡い緑色のローブに唇には薄い桜色のルージュ、耳には碧い石の入ったイヤリングをしている。決して下品な大きさでないそれは、メルにとても似合っていた。

「準備できたわよ。それでは行くとしましょう、魔法世界へ」

本当にここ魔法せ、ってえぇえ今のコスプレじゃ……うわあっちで人が飛んでるし、うん、ここは間違いなく魔法世界だ。

以上が私の魔法世界初体験の感想である。

ここのマーカーは前の様な路地裏ではなく、一軒の家のドアに付けられていた。元々は少なくない数の魔術師や魔法使いが人目を避けるために、路地裏等といった裏通りにその拠点を構築していたのだが、ここが学問を修めるには者には寛容であること、数が多すぎて本来の目的を為せないこと、そしてアリアドネーより己の知識や研究結果を財産であると明文化されたことでここでは家の中にマーカーを設置するのが公に認められたのだ。

そして家の中にマーカーをつけて倉庫兼作業場として使い商売をしたり、侵入者対策にトラップを仕掛けまくったりするのが一般的

になったらしい。最近は普通のお店に対して魔法仕掛けをする商売もあるのだとか。

メルと二人で通りを歩く。普通の住居だけでなく、喫茶店や酒場といった普通の店も結構あるみたいだ。それにしても本当に魔法が一般的なだけで、街並は外となんら変わりが無いように思える。いや、よくみると角とか耳とか生えてる人（？）とか箒でそら飛んでいる人とかいるけどね。それでも普通の生活があるのは技術として確立しているからだろう。

「ハル、先ずは魔法や……て、お腹がすいてるの？」

通りにある店を眺めているとメルにそう言われた。そういえばいつもは日課を終えて軽食をとってから修行か研究の手伝いをしていたけど、今日は身支度を整えていたから抜いていたなぁ。あ、そう認識したらお腹すいてきた。

「そういえば朝から何も食べてないですね。できれば何か軽くお腹に入れておきたいです」

「そうね……せっかくだから広場でなにか屋台を覗きましょうか？あれなら時間も取られないでしょうし、名物があるでしょう」

「それは楽しみです。ここの名物料理とはどんなものかメルは知っているのですか？」

「よく覚えてないわ。なにせ前に来たときは年が二桁になるかどうかの頃だったもの。食べられるものではあるけど、記憶に残る程のものじゃないということね」

期待できるような出来ないような。まぁ、それも観光の醍醐味なのだけれども。

広場では多くの商人と行き交う人々の声が飛び交っていた。大盛況である。晩ご飯の買い出しや、仕事帰りの人達が多いのか布や雑貨などの日用品より食材や酒などの店が目立つ。そういえば、日本酒久しぶりに呑みたいなぁ……。ここじゃあ、どうしてもワインが中心になるし、蜂蜜酒はどうしても好みにあわなかった。

「ハル、夜は予約を取っているから軽いものにしましょう。あれなんてどうかしら」

いつの間に予約なんて。それならあっさり系のものがいいかな。特に反論もないのでメルの指差した屋台に向かうのだけれど……これはなんだ？　食パンみたいなものにに赤や黄色や緑といった果肉らしいものが乗ったものが数種類展示されている。たしか、出前ピザの広告に似たようなものがあった気がするけれど緑って。というかピザなら先ずは普通にお肉とか海老乗せようよ。それとも、ここは果物が有名なのだろうか。

「メル、これは食べたことはありそうですか？」

「やっぱり思い出せないわね。でも、これなら果物がメインだから重くはないし、挑戦してみてもいいんじゃないかしら？」

「いや、挑戦って……これ大丈夫ですよね？魔法世界外の人間が食べたら植物になるとかないですよね？」

「大丈夫よ、旧世界の人も沢山いるんですから。これとそれ、一つずつ頂戴」

毎度あり、といいながらメルの注文した青い果肉が乗ったものと、赤、黄、緑の三点盛りの商品を取り出す店主。もちろん、私はこの世界の貨幣を持ってないので支払いはメルだ。仕方ないといえ、ちょっと傷つくプライドがあったりする。

「ハルはこっちね」

メルから渡されたのは三点盛り。ひんやりしているということは、やはりデザートなのだろう。どれも新鮮で瑞々しく、生地はパンと言うよりピザの方が近いかもしれない。うん、これ完璧に広告で見たアレだ。違いがあるとしたら乗っているものだけだな。青一色の方がよかったなぁ、未知の味覚三点盛りは勇気が……。でもメルからしてみれば、色んな味が一気に楽しめると思っているのかもしれない。いや、お人好しなメルのことだからそうに違いない。ここはメルの好意に感謝しよう。

「有り難うございます。では、頂きます」

……結論から言うと、とても美味しかった。ただ、緑の果肉がどうしてもスイカの味だったり、赤がバナナだったりするので頭と舌が混乱したことを付け加えておく。

その後はメルに連れられて色々な場所を回った。薬草や魔獣の角等を扱う魔法薬店、札やクロスにチョーク等を扱う魔法雑貨店、杖型や指輪型等といった発動媒体を扱う杖店、布の販売から仕立て、術式付加をする魔法仕立て屋……お店だけでなく、図書館や中央アリアドネー学院などにもしっかり足を運んだ。図書館では探している本を司書に伝えると、目的の本を呼び出してくれるという魔法様様なサービスまであって驚いた。あと、どんな言語でも読めたこと

にも。便利だから突っ込まないけれど、多分過剰分の存在ポイントとかが関係しているということにしとく。便利だし、深く考えることじゃないと思うしね。

そして今、メルが予約をしていた所で料理が来るのを待っているのだけれど。

「メル、ここはとても静かですね」

「そうね、わたし達以外は誰もいないものね」

「それに掃除が丁寧に行き届いています」

「管理を任せている使用人がしっかりしているからね」

「それに廊下に飾る絵画にメルによく似ているものを飾るなんて、本当に手の込んだ歓迎ですね」

「あれは確か母の物ね。そんなに似ているかしら」

「それに何ていってもこの広さ。まるでお城です」

「正確には一部よ。権力を示すためじゃないから、大広間と食堂を繋げているの」

一瞬の沈黙。でも、これは聞かなくてはいけないことだ。

「……メル、ここはどこなのですか？」

「言ってなかったかしら？　レストラン・モンノクテ――わたしの

城の一部を使ったレストランよ」

まぁ、レストランと言っても入るには条件があるけどね、と付け加えるメル。いやいや、突っ込みたいのはそこじゃないのですが。

「ええと、メルってお嬢様だったのですか？　それとも、もしかしてどこかのお姫様とか」

「そんな大層なものじゃないわ。この城も譲り受けたものだし、わたし自身はただの魔女。気付かないのも仕方ないけれど、ある程度裕福じゃないと魔術の探求なんて無理よ？　研究成果なんてほとんど公開しないし、費用は掛かるしね。それと、もしかしては余計よ」

今まであの世界から出たことなかったし、メルの部屋に入ることも数える程しかなかったからなぁ……。昔話なんて私から避けていたし。もしかして、これが今日の目的だったのだろうか。いや、そんな訳はないか。

「失礼します」

軽くノックが叩かれる。料理が出来たのだろう、執事服の男に続き給仕が入ってきて料理と食器を並べていく。スープに包み焼き、チキンのソテー、果物の盛り合わせ……。もしかしたら、コース料理などはまだ生まれてないのかもしれない。それにしてもこの執事服の人は本職なのだろうか？　後でこっそり聞いておこう、覚えていたら。

「料理の説明はいいわ。それと、わたしが呼ぶまで誰もここへ近付かせないで頂戴。あぁ、ワインも自分達でやるから結構よ」

「かしこまりました。御用の際はそちらのベルをお使いください。では失礼します」

メルがそう命じると、再びここは私とメルの二人きりになった。未知の食材があるので説明が欲しかった反面、これ以上格式高いものは勘弁して貰いたかったので心境は複雑だ。不味いことはないだろうし、毒もないのだろうけどね。それにさっきとは違ってほとんど見た目は変わらない。いや、だから一層というのもないことはなけど。まぁ、美味しいことには違いはないだろう。

「いただきます」

さすがに慣れてきたけど、やっぱりお箸が欲しいものだなぁ。

「ハル、ありがとう」

食事も進み、最近の修行で感じたことやメルの研究のことについて話をしていると、急にメルが流れを変えた。

「え、どうしたのですか？助手のことでしたら、当然のことをしているだけですよ」

「違うわよ、ハルと出会えたこと。そしてわたしに付いてきてくれたことよ」

これが本来の目的なのかな？　でも理由がいまいちわからない。

「そういえば今朝もそんなことを言ってましたね。少し聞きたいの

ですが、あまり感謝される謂われが思いつかないのですが」
深い赤色のワインでで唇を湿らせるメル。芳醇な香が漂ってくるが、テーブルを挟んだ距離では空気に溶け込むほどの淡いものだった。
「ふふっ。ハル、魔法と魔術の本質とは何かしら？」
「自己魔力を自由魔力に干渉させること」
なんどもやったことだ。体も頭も覚えている。
「じゃあ、扱える魔法や魔術の威力が上がるのは何が原因だと思う？」
そんなことは簡単だ。
「自由魔力が多い所を見極められるから。もしくは、自由魔力を任意の場所に収束できるからじゃないですか？」
これは多くの魔法、魔術に関するモノが半ば無意識に行っている。障壁なんていい例だ。周囲の魔力をどれだけ収束できるか、それが障壁の堅さに大きな個人差を生み出す。他にも魔法使いの基本的な魔法の射手も収束に慣れることで、同時に扱う数を増やせる。治癒系統に関してはこれの上達がなければ扱うことすら難しい。
「そう、その通りよ。そして本質を知るものは自然と世界をそう見てしまうわ。ここは自由魔力が薄い、この鉱石には自由魔力が自然と収束している、とかね」
それは事実だ。私にもそう見えてるし、後者に関しては魔法薬や

魔法装飾の分野で大いに役立てられている。収束率の高い鉱石は魔法使いの使う杖に加工や装飾されたり、反対に低いものは戦士の鎧や武具に用いられる。

「さて、昔に一人の男がいました。彼は類い稀なる魔術士で、彼が雨を請えば旱魃した大地が潤い、種を蒔けば一晩で実りをもたらし、仇なす軍勢あらば腕の一降りで姿形さえ消し去ったというわ。彼は多くの魔術を統合、別離し今に伝わる魔術に彼の関与なきものはありえないほど。彼は知に飢えていた。いえ、知らないことが恐怖だったのかもしれない。とにかく彼はありとあらゆる未知を既知に変え、神秘を解きほどき、奇跡を説き伏せた。しかし、一つだけわからないことがあった。後に知の探求者と呼ばれた彼が残した、未だ誰も解へと辿り着けない問題『魔力とはなんぞや、世界とは何ぞや』。それはいつしか全ての魔術士の命題となった」

また一口ワインを口にするメル。魔法とは、魔術とは魔力による現象である。では魔力とはなにからできたのか？　なぜ一定の濃度ではないのか？　なぜ世界とはこうあるのか。私の世界でも地球の誕生について、宇宙の誕生について研究されてきた。彼はそれを魔術を用いて行っていたのだろう。私も流し込みながら話を整理する。本質を知る、魔術士、魔力、世界、そして私。たぶん、そういうことなのだろう。

「ピンと来たみたいね。数多くの書を残した彼の意志を継ぎ、この世界の根幹を知るために人生を捧げるのが、わたし達魔術士よ。飽くなき知の探求者を継ぐもの。彼がどの魔術を用いてどこまで根幹へ近づいたかは、一切資料が残っていないわ。だから多くの魔術師が、自分の魔術こそ彼を越えるとして自身の研究を秘匿し続けるの。誰にも真似されないようにね。最初は変わった魔法具を使うと思ったけれど、あの札を見てから変わったわ。あの札、使われている紙

も、インクも、並のもので書かれている術式は滅茶苦茶。でもそれにも関わらず見事ハルを隠してみせた。わたしでさえ黒猫を待機させて、黒猫の居る場所として記憶しないとすぐに記憶を改竄される程の札。そんな不思議なもの放っておけるわけが無い」

いつかのようにテーブルの下で亀裂を開き、ニケの札を取り出す。今なら私にも素材の質があまりよくないものだとわかる。メルも懐からいつか研究に使うからと言われて渡した札を取り出していた。魔術士が二人、同じ札を持って談笑するこの光景は傍から見たらどう見えるのだろうか。

「ちゃんと持っていたのね。この一年、暇なときはいつもこの術式について考えていたわ。先ずはルーン魔術の観点から、次に魔法の観点、次にカバラの観点……わたしの知る限りの方法で調べたけれど、どれも核には辿り着けなかった。完全にお手上げ、ハルの故郷へ行こうかと何度も考えたわ。そんな時にあの侵入者が来て、ハルから事実を聞いたの。世界とは、幹とは、次元。求めていた解がそこにあった。魔術を極めることがそれに繋がるならば、逆もまた然り。それからは早かったわよ。なにせ答えと数式があって、後は数字がそうなるか確認するだけなのだから。この術式を調べるために多くの数式を用意していた甲斐があったわ」

数式というのは魔術の種類のことなのだろう。メルはグラスに入ったワインを飲みきると、頬杖を突き私に視線を向けた。見つめられたまま沈黙が流れる。沈黙に耐えられず声を掛けようとしたその瞬間。

「ありがとう」

いきなり左から聞こえた声に驚き顔を向けると、暖かくなめらか

な感触が口を塞いだ。そして瞬き一つすると、目の前には両目を閉じて、口付けをするメルがいた。いつの間にか首にも手を回されている。

数時間、あるいは数秒そうした後メルは顔を離し札をちらつかせる。

「この術式の本質は『周囲が全く疑問に思わない姿形に使用者の存在を変える』こと。元はハル限定だけど、今のわたしなら改変くらい余裕よ。対象は使用者以外の全て。全くもってでたらめな効力よ、いわば世界をねじ曲げているのだから。ねぇ、ハル。わたしはいつからハルの横にいたでしょうか？」

ep. 08　契約と私と卒業と旅立ち

魔法世界に引っ越しをしてから五年程経ったのだろう。数年前から旧世界ではイングランドとフランスの戦争が始まった。このアリアドネーで勧誘しようとして追い出されるのを、何度見かけたことだろう。そういえばこの図書館から持ち出し禁止の魔法書を持っていこうとした不届き者もいたな。

「すいません、これ貸し出し出来ませんか？」

思い出に耽っていると、カウンター越しに声を掛けられた。何故、声を掛けられたか？　それは私が司書をしているからだ。アルバイトだけど。

「こちらの紙にサインを頂けますか？　それと返却日は一週間後になるのでお忘れないように」

そういって貸し出し契約書を渡し、貸し出し中のリストに本のタイトルと整理番号を記入する。

「書きました」

「……はい、結構です。丁寧に扱ってくださいね」

本を片手に玄関へと向かう姿に一言送る。まぁ、彼女は常連だから形式的な注意なのだけど。

契約書をしまいながら、図書館内をぐるっと見回す。今はテスト

の時期なので学生の姿が多いが、それでも騒がしくないのは流石学術都市といったところである。私が学生だったころは、放課後皆で集まっては勉強ではなく遊びに遊んだものだ。そのおかげでテストは散々なできになることが多かったけれど、それもいい思い出になっている。

私がここ大図書館で働き始めたのは、引っ越してから一月ほど経った頃だろうか。当初、私は中央アリアドネー学院の魔術学部で生徒になる予定だった。しかし、その学部の授業風景を見たメルが「こんな物を教わるなんて有限な時間への冒涜ね」　と言って私の入学を中止したのだ。まぁ、魔術とは魔法の下位互換であるとか、魔法の使えない人間が編み出した苦肉の策であるとか教えているのを見た私としても入学は遠慮したかったので何の不満もない。

そしてしばらくはメルの助手として生活していたのだが、暇な時はこの図書館で本を読んでいたためか顔を覚えられ、人手が足りないからバイトしないかということになり今に至る。実際、ここアリアドネーで学生でも教論でもましてや自営業でもないのは肩身が狭かったので渡りに舟の提案だった。

「ハル君、交代の時間だよ」

今度は後ろから声を掛けられた。時計をみると午後六時を回っている。そうか、もうそんな時間だったのか。

「そうですか、では先に失礼しますね。お疲れ様です」

挨拶をし、足元に置いていたカバンを持って家へと帰る。さて、今日の晩ご飯は何にしようか？　最近お肉が続いているので魚にしようか？　頭の中で夕飯の献立を考えながら帰路に着く。これが私

の日常だった。

また時は経ち、司書歴が十年になり正式に採用しようかと話が出る頃、一つの転機が訪れた。それは朝食を取り終え、今日の予定と組んでいる時だった。

「ハルに弟子卒業を言い渡すわ」

「え、卒業ですか？」

「えぇ、もう教えることはない。魔術は今日の魔法みたいに画一化されたものじゃないわ。だから自分で研究するしかない。特にルーン魔術は如何に自分に合わせて用いるかが大事なの。大規模なルーンを刻み莫大な魔力を使うか、小規模のルーンを連鎖させるか、考え方組み合わせ方は無数にあるわ。その中から己に合うものを学びぬくの。ハルには基本的なことは全て教えたわ。ルーンの種類、媒体の善し悪しの見分け方、理想の環境、他にも研究に必要な器具の扱い方から処理の方法まで……。後はハル自身が己のルーン魔術を作り上げなさい」

いつかは来ると思っていた。でもあまりにも唐突……なのはいつものことだからこれでいいのか。魔術については前々から聞いていたから不満はない。それにメルのやり方を聞いたところで、魔力量も得意系統も練度も異なるから無意味だ。でも、物理的な準備の時間は欲しいな。

「なにも今日明日に出ていけとは言わないわ。一週間あげるからその間に準備を済ませなさい」

「わかりました、では今暫らく厄介になります」

準備の時間があるならもう、何も言うことはない。頭の中で積み上げた予定を崩す。さてなにから始めようか？

一週間後。私は思いつく限りの準備をした。一月程の飲食物から魔法のテント、魔法薬に衣類、予備の杖など一人旅には多すぎる荷物だが、亀裂のおかげで何の問題にはならない。当初は白札とか布などの媒体も買おうとしたのだけれど、それはまず拠点を作ってからだとメルに言われたため先送りにした。特に忘れ物はなし。

「準備はできたかしら？」

「えぇ、思いつく限りの準備をしました」

「そう。じゃあわたしから卒業祝いと独立祝いにプレゼントがあるわ」

プレゼント？

「黒猫、いらっしゃい」

メルの呼び声に応じて窓辺で微睡んでいた黒猫が近寄ってくる。まさか黒猫がなんてことは……。

「何かバカなこと考えてない？　まぁいいわ。黒猫、久しぶりの仕事よ」

「あいあい、わかったニャ」

ひょっこりと前足を持ち上げて、直立する黒猫が答える。って、え？　なにこのこ喋れたの？　しかも立って、え？

「ニャニャニャ、自己紹介をしニャいとニャ。僕はケット・シーの黒猫だニャ。得意なものは契約陣、好きなものは日溜まりと愚者の魂ニャ。ご主人、仮契約でいいのかニャ？」

「いえ、本契約よ。……あら、どうしたのハル？　奇妙なものでも見た顔して」

現在進行形で見ているのですが。ケット・シーといえば確か妖精じゃなかったか？　ただの猫じゃなかったのか？

「だって、いや、黒猫が立って、妖精で、本契約が、好物がなんか趣味悪くて」

「んニャ！　愚者の魂はとっても美味しいのニャ！　こう、無垢故にニャっぱりで、歪みがアクセントでピリッと」

「そんなことはいいからさっさと仕事なさい」

床にチョークで何か描いていた黒猫が私の言葉に反論するが、メルに遮られた。というか今からメルと本契約するの？　それがプレゼントってことかな？

「ハルも何をそんなに驚いているのよ。妖精については教えたはずよ？　それに魔女が使役している動物がただの動物なわけないじゃない」

そう言われれば、その通りか。魔女の友、しかも黒猫。真っ黒だ。だけれども今の今まで只の黒猫だと思っていた。ケット・シーって実物を見るのは初めてだ。何か変わったわけではないから見慣れた黒猫なのだけどね。

「それは納得しましたが、何故に黙っていたのですか？」

「黙っていたもニャにも、特に影響はないからニャ。僕は契約陣を書くのが使命、それ以外はさっぱりニャよ。そして君が契約することはニャイし、やることがないニャ。ニャらば話しても話さなくてもかわらないニャ。ご主人、描き終わりましたニャ」

「もう下がっていいわよ。ハルはこっちにいらっしゃい」

「え？　あぁわかりました」

個人的にはとても驚いたことなんだけどなぁ。確かに黒猫の正体を知っていたからといって、何がどう変わったかなんてないけど。

「陣からはみ出ないようにね。それじゃあ本契約を始めるわよ。わたしの後に続いて詠唱しなさい」

「わかりました」

陣の上に二人で立つ。それ程陣は大きくないので少し窮屈だ。メルが懐から拳大の透明な石を取り出し、右手に持つように言う。メルの右手にも一つの同じような石が握られていた。

「古き王よ　我らの契約　見届けよ」

――古き王よ　我らの契約　見届けよ

「黒ありて白あり　闇ありて光あり　天ありて地あらん」

――黒ありて白あり　闇ありて光あり　天ありて地あらん

「王よ　我ありて彼あれば　彼ありて我あらん　この対祝福したまえ」

――王よ　我ありて彼あれば　彼ありて我あらん　この対祝福したまえ

詠唱が終わると同時に契約陣が白く光る。その光はだんだんと色を変え、若草色の光と真朱の光に剥離した。そして真朱は私の右手に、若草色はメルの右手にと光跡を残し、やがて光は消えた。右手を開いてみると血に塗れた様な赤い石がそこにはあった。

「ふむ、上々ね。ハル、こっちを向いて」

メルに言われたように顔を上げる。これで契約終了なのだろうか？　たしか契約をすると契約カードが出てくるって聞いていたのだけれども。

「ハルの方も上出来みたいね。今からこの石をお互いの胸元に当てれば契約の儀式は終了よ」

「わかりました」

今更、胸元に手を当てるくらいで動揺したりなんかしない。メルの手を見てみれば、私のように色が変わった石を持っていた。

お互いの胸に石を当てる。メルには真朱の石を、私には若草色の石を。石は肌に触れると、一切の抵抗なく体の中に入ってしまった。特に異物感はない。むしろ、心地のよい暖かさが体中にじんわりと広まる。思わず右手でメルの触れたところを触ろうとしたが、その手にはいつの間にか一枚のカードが握られていた。

「従者はハルみたいね。まぁ、妥当なところかしら」

メルの手にも一枚のカードが。恐らくあれはマスターのカードなのだろう。って、主従カードがでるものなのか？

「メル、確かカードは従者の物しかでないと思っていたのですが？」

「仮契約の場合はね、これは本契約よ。そういえば仮契約についてしか教えていなかったわね。。まず仮契約というのが比較的新しいものなのよ。本来の契約、つまりはこの本契約が唯一の契約なの。そしてその証に出るのが主従二枚のカード、別名主従の鎖。これは従者にとって主は一人で、主にとって従者は一人を表しているの。一対一の不可侵の契約。最も自然な状態だと思うわ。でも、すぐに戦力がいる場合や一生を誓いあえるかわからないといった魔法使いが増えたために、今の従者のカードだけ出るように改変した仮契約というものができたの。仮契約の成立と歴史についての講義はこのくらいにして、アデアットしてみなさい。私の知っている物なら説明してあげるわ」

「良いものが出てくるのを祈ります。アデアット」

ポンッと召喚の言葉と共に現れたのは、指輪だった。銀色の、一切装飾のないシンプルな指輪が二つ。普通のところなら、魔法発動

体としての指輪なのだろうけれど呪いとかないよね？

「メル、わかりますか？　見た目は普通のシルバーリングなのですが」

メルに手渡すと、しばらく指輪を眺めた後奥から一冊の本を持ってきた。そして、私のカードを一度確認し納得のいったかの様にあるページを開いた。

「『無名の指輪』、それがこのアーティファクトの名前ですか？」

「そうね、間違いないと思うわ。それにしても星辰性がｎｉｇｒｕｍ　ｆｏｒａｍｅｎ（黒い穴）のくせに徳性がｓｐｅｓ（希望）なんてハルらしいじゃない。そのアーティファクトの説明なら全てここに書かれているから読んでみなさい」

アーティファクト『無名の指輪』、古代ローマに実在した最古の婚約の契約の指輪をモデルにしたと言われる。このアーティファクトは、本契約且つ色調がａｒｇｅｎｔｕｍ（銀）に限り出現する。効果は伴侶を忘れない、ここでの伴侶とは主のことである。所有者の同意を取り、記憶消去を試みたところ主に関することは二十年前の朝食ですら覚えていた。その検証により記憶消去に対して高いレジストがあると推測されるが、主以外のことには効果がない、常時装備可能だがそれ以外の効果はないという点から実用性はとても低い。

……デメリットは何もないけれど、ないけれども。

「これはアーティファクトとしては優秀なのでしょうか？」

「性能としては底辺ね。ロマンチックな妖精が作ったのでしょう、こういうもの好きそうだわ。戦力として不確かな物になるよりかはマシじゃないかしら？」

「ふぅむ、確かにそうですね。今まで武術を学んだこともないですし、下手に有用な武器じゃないのはいいかもしれません。アベアット」

指輪をカードへ戻し、亀裂の中へ放り込む。メルには、あの食事の後に明かしてあるので隠すことはない。もっとも、メルは初めて会ったあの日から何かあると思っていたらしく驚かれることはなかった。

マントの裾に着いたチョークをはたき、玄関の前に立つ。今生の別れではないかもしれないけど、再開までには長い時間がかかるだろう。世界最高の魔術師メルが隠した空間への入口を見つけ、仕掛けられた罠を突破しないといけないのだから。さて、別れの挨拶をしましょうか。

「今までお世話になりました。メルがいなければ、今頃フランスかイングランドに徴兵されていたかもしれません。そうですね、次にメルと会うときは結婚でもしましょうか」

そう軽く問いかけると、メルはカードを口元に当てながら笑みを浮かべた。

「残念、さっき結婚したじゃない。でもハルのプロポーズというのも聞いてみたかったわね」

……そういえば本契約にはその意味もあったなぁ。むしろ最近は

その意味でしかないか。

「じゃあ、私が帰ってきたら新婚旅行に行きましょう。行先は私が今から探してきます。メルが見たことない景色を探してきますよ」

「ふふっ、じゃあそういうことにしましょう。ハルキ、いってらっしゃい」

「いってきます、メルディン」

扉を開いて石畳を踏みしめる。さてさて思わぬ旅の目的ができてしまった。メルの見たことのない景色……まぁ今から私がしたいことをする過程で見つけられるだろう。なにせ、ついに神器を探す旅を始めるのだ。超常のものがある場所が普通のはずがないのだから。

ep. 09　奇跡と私と共闘と神器

枯葉が敷き詰められた地面を踏み締める。木々は来る寒波に備えて葉を落とし、そこかしこで小動物が冬籠もりの準備に走り回っている。空は鈍い雲に覆われていて、近いうちに決壊しそうだ。日が落ちきるまでそんなに時間もない、そろそろ野営の準備をしないといけないかな。地図を見ながら、野営ができそうな人の少ない方へ歩く。目的地まではまだ随分とあるため、一日二日延びたところで何の影響もない。それにあそこに近づける魔法使いは少ないはずだ。自身の魔術に誇りのある魔術師ならなおのこと近づかないだろう、あの奇跡の台座には。

奇跡の台座。多くの魔法使いが奇跡という人知を超えた力を追い求め、多くの魔術師が己の叡智を否定すると唾棄する場所。名前とは裏腹に魔物が跋扈し、通りかかる旅人や墓場荒らしの屍で山を築き、流れる血で河を描いているといわれる草原でその中心には一本の大樹が聳え立っているらしい。ならば何故に奇跡などと言われているか、それはひと振りの神器による。

快癒のヴィーティング――北欧神話に登場し、決闘家ベルシが振るっていたとされる非常に切れ味の鋭い剣である。同じ北欧神話に登場した世界を焼き尽くしたスルトの炎の剣、世界すら切り伏せるリーチを持つレーヴァティン、与えた傷は癒せず持ち主に勝利をもたらすティルフィングなどとは違い、この剣には強大な攻撃力は有していない。では何故に神器と呼ばれているか、それはこの剣を装飾している癒しの石が原因だ。癒しの石がついた剣自体はこの神話にも多く登場している。しかし、この剣はそれらを掃いて捨てるほどの力を持っているのだ。そして、信仰により異常とすら言える程の力を持ったそれは、持ち主に不死身をもたらすと喩えられている。

さて、そんな神器の座する場所が何故そんな地獄絵図を体現しているのだろうか？　始まりは一人の戦士である。ある時、この剣を手に入れた幸運な戦士がいた。その戦士は剣の正体を知らなかったが、戦場で生きる戦士が快癒の力に気付くのに時間はかからなかった。その戦士は多くの戦果を上げ、将軍から篤い信頼を得ていたがそれをよく思わない高官たちの計略にかかり、一人で千の敵とさらに視界の悪い森の中で対峙する絶望的な戦いへその身を投じることとなった。ヴィーティングは風を撫でるように敵を切り伏せ、戦士が受けた傷はその身が水であるかの如く癒した。しかし戦士は英雄にあらず。戦士は死線を潜り続ける緊張に心を擦り減らし、遂にはその身を数十の槍に貫かれ、木に縫いつけられることとなる。そんな状態だったがヴィーティングは戦士を癒し続け、傷で死ぬことを許さなかった。心を擦り減らして上での何度も繰り返される死の苦痛、戦士は愛剣が持ち主に終わることなき死を齎す魔剣だと思うのは自然なことだった。一方その戦士を打倒した敵も、その身を槍で貫かれながら息絶えることない戦士の姿を見て確信した――あれは等しく死を与える魔剣だと。

この顛末にいち早く行動を起こしたのは魔法使いだった。なにせ、持ち主に不死身を与えと喩えられている程の力を持つ剣が落ちているのだ。多くの魔法使いが誰よりも早くと戦士のもとへ駆けつけた。そして、最初に辿り着いた魔法使いはは後ろから氷の槍で貫かれ、次に剣に手を伸ばした者は雷に打たれ、その次は召喚された悪魔に食われた。三日三晩続いた魔法使い達の死の宴は血の臭いに惹かれた獣や魔物の手で幕を引かれ、その後ここへ来た魔法使いも成長した魔物には歯が立たず屍を増やしただけだった。魔法使いからすれば奇跡を手にすることができる伝説の場所、魔物からすれば待ってれば餌が来る絶好の狩場。奇跡という誘惑と生還した魔法使いがいないことからこの妙な共存関係は長いこと続き、周辺の木々は魔物

の瘴気と魔法使いの広範囲攻撃魔法で薙ぎ払われたとか。最近になってやっと実態が明らかになったが傲慢な魔法使いの侵攻は絶えないらしい。

そんなこんなで、名前とは裏腹に物騒な場所となっている奇跡の台座が今回の私の目的地である。魔術師として考えるのなら自身が研究し発展させた魔術ではなく、こんな作者も本質もわからない奇跡なんかに手を出すのは邪道も外道だが、まぁ私にとってそんなことは結構どうでもいいことだ。私の目的は生き抜くことだしね。

森の中をしばらく進むと岩肌をくりぬいた様な洞窟を見つけることができた。中を覗いてみると、奥行きは十メートルほどで雨風を凌ぐには十分な広さだった。今日はここで一晩明かすことにしよう。入口にヤドリギの棒を用いてルーン文字を刻んで簡易結界を張る。結界の効果は認識阻害、強度を犠牲にして効果を高めている。簡易結界の発動を確認したら、今度はその一歩内側に幻術を見せる結界を張る。たとえ認識阻害を超えてもこの幻術結界でこれ以上先へ進めないようにする。最後にヤドリギで敵の攻撃を無効化するルーンを刻めば、安全な宿の出来上がりだ。亀裂から魔法のテントを取り出して中に潜る。この魔法のテントは中が拡張されていて、ワンルームくらいの住居になっている。キッチンやトイレなどは付いていないがどこでもベッドで寝れることは、ミドルと言われる年齢に足を踏み入れた私にとって有り難いものだった。

十日後。今私は目的地まで数キロの場所で野宿の準備をしている。ここまで来ると小動物たちの気配はなく、おこぼれに与ろうとする形すら保てない魔物共と私と同じ目的だろう魔法使いの気配がするだけだった。できれば夜は大人しくしてくれればいいのだけれども、奇跡を一人占めしようとしている奴らだ、一波乱が来るのは明日が来るのと同じくらい確実だろう。私は大人しくいつもより障壁を堅

くし、防音結界を張ることにしよう。わざわざ魔物が活発な夜に行動を起こすほど、私は世間知らずではないのだ。

朝の目覚めは鮮血と共に、つまりは最悪な目覚めである。モーニングティーのの為に火を起こそうとテントの外に出ると、湯気が立っている赤い水たまりと噎せ返るような生臭さ、そして昨夜より幾人か少なくなった魔法使い達がぽつぽつと集団を作っていた。勿論、私と同じように一人のままの魔法使いも零ではない。奇跡の台座の方に目をやると何本か煙が上っている。恐らくは抜け駆けしようとした魔法使い――元々仲間でもないから抜け駆けも何もないのだが――が夜闇にまぎれて行動、思わぬ魔物の強さと多さに返り討ち、そして興奮した一部の魔物が襲撃してきたのだろう。そして実力不足な奴らの一部がムシャムシャされて、残る奴らは命の危機に手を組み、分相応な奴らは私と同じようにこの光景にうんざりしていることだろう。はぁ、ケチらずにテントの中で魔法具を使って紅茶を淹れるべきだったなぁ。

「おい、ここにも誰かいるんだろ？」

火を起こすのはあきらめて、亀裂に保存していた紅茶を飲んでいると結界の近くをウロウロしている男が声を掛けてきた。視線がこちらを捉えてないということは、こいつもまた徒党を組んでいた側の魔法使いなのだろう。自分が張った結界を悪く言うのもなんだけど、この結界くらい見抜けないなど役者不足としかいえないよ。

「なぁ、返事しろよ。お前もこの惨状は見えているんだろ？　全く酷いもんだ。確かに死んだ奴の身の程知らずっていうのもあるが、こうなっちまったら団結して生き残る確率を上げるべきだ。そこでだ、俺ら『奇跡の担い手』に入らないか？　あぁ『奇跡の担い手』っていうのはさっきできたばかりの魔法ギルドなんだが、快癒のヴ

ィーティングをみんなで協力して手に入れて多くの人を助けようっていう善意の集団だ。世界には傷や病で苦しむ人が数え切れないほどいる。それを少しでも助けたいんだ。お前は昨日の襲撃に関して、自分で自身を守りぬいた魔法使いの一人だ、実力は認める。だが、お前ひとりじゃ台座まで辿り着くのは難しいだろう。ここは協力し合うべきだと俺は思っているぞ」

何を言ってるんだこいつは？　素晴らしい志を持っているのはわかるけど、そのためにギルドを作った？　しかもさっき？　まさかまさか、その仲間を信用しているの？　だとしたらこいつは頭がお花畑であるとしかいいようがない。

「俺が伝えたいことは以上だ。他の奴らは見向きもしなかったがお前なら来てくれると信じている。俺らは日がてっぺんに差し掛かるころに出発する予定だ。もし、お前に正義があるなら俺の所へ来てくれ。じゃあな」

言うだけ言って男は集団へと帰って行った。なるほど、あの集団はそんな名前になったのか。まぁ、どうでもいいことだけれど。それより問題はどう動くか、だ。あのお花畑男がいうには他の実力のある奴らが仲間にならないと言っていた。ならばあの集団を囮に使って仕掛けるはず。どのタイミングでしかけるべきか、実力不明の実力者を出し抜く方法を考えないといけないなんて頭の痛い問題である。

日が頂点に差し掛かるころお花畑集団は森へと入っていった。周囲を警戒しながらゆっくり移動しているから、中心まで早く見積もっても二時間はかかるだろう。残った気配は私以外に四つ。ここからが勝負どころだ。

すぐに動き出した気配は二つ。一つは集団の後を追う様なルートで、もう一つは大きく迂回するルートを選んだようだ。どちらも良い選択肢だと思う。集団の後なら少なくとも雑魚を警戒する必要はないし、迂回すれば囮に釣られた魔物を相手にしなくてすむ可能性がある。攻撃に自信があるなら前者、隠蔽に自信があるなら後者を選ぶのが最適だと思う。私なら後者を選ぶだろうか？　残ったもう一つの気配はどう動くだろうか？

もう一つの気配を注視していると、突然炎が森の中から上がった。遠視の魔法で確認すると、お花畑集団が魔物に襲われている。背中合わせになって死角がないようにしているが、気付くのが遅かったらしくすでに一人犠牲になったようだ。先程のお花畑男がゴブリンのような集団に向けて巨大な火炎球を放つ。先程の炎もこいつの魔法だったのかもしれない。他の魔法使いも色々な属性の魔法の射手を撃っていたり、雷を走らせたりしている。でも。

「遅いな。これじゃあその内、数に押し切られる」

そう、遅いのだ。魔法発動までが。魔法の射手程度で牽制になる魔物なら兎も角、それ以上の魔物が来た時恐らくこの集団は終わりだろう。強力な魔法はそれに伴い詠唱が長くなる。これが少数対少数、もしくは天と地ほどの実力差があるのならば関係ないが、逆に言えばそれ以外のときは致命的ともいえる。今はまだ強力な詠唱を行う者を、周囲の者が手助けする余裕があるが……。噂をすれば土で塗り固められた体長五メートルほどの蜘蛛が現れた。あいつはメルの世界の森で何度か戦ったことがある。土の鎧のおかげか防御力がとても高く、また地面から土の槍を飛ばしてくる厄介な敵だ。特に私が得意な火とは相性が悪く、最初は何度も命の危機にさらされた。今なら片手間にあしらえるけれどもね。集団も蜘蛛の強さに気づいたらしく浮足立っている。そろそろ私も仕掛けなければ。

認識阻害を張りながら森の中を駆ける。ルートは迂回した魔法使いと集団の間。さらに精度は荒いながらも、移動しながら使えるように意識した魔法探査で魔物の少ないルートを積極的に採る。時折集団とは全く違う方向から氷柱が見えることから、あの迂回した魔法使いも魔物と遭遇しているらしい。今現在もっとも中心に近いのはそいつだが、先程から位置が変わってない所を見ると強敵と出会ってしまったようだ。おかげでサクサクと進むことができる。

森を抜けると、枯れ草が風になびく中にポツンと木が一つ聳えていた。森の中のような魔物の姿は見えない。しかし、森の中とは比べようもない濁った魔力が渦巻いていた。恐らく長い間魔物が棲み付いたため、この場所そのものが魔界に成りつつあるのだろう。何よりこれほどまでに魔力が濁っているのに今までの魔物の姿が見えないことがマズイ。つまりは森の中の物が恐れている物がここにいるはずだ。草原の一歩手前で亀裂から幾つかの道具を取り出す。身代わりの型代、エオローのルーンが刻まれた頑丈さを追求した鉄の剣、予備の杖、それと魔力を貯めた宝石を三つ……などなどできる限りの準備をしておく。遠視の魔法で一度他の魔法使いの位置を確認すると、迂回ルートは未だ交戦中、残っていた奴はまだ動かない、そして集団の後をつけていた魔法使いがそろそろ到着するころだった。丁度いい、ここは様子見をするとしよう。

森から飛び出した魔法使いは、急に魔物の姿が消えたことに警戒をしながらも木へと歩みを進めた。周辺に不自然に濃い魔力があるから、恐らく遅延呪文か何かをストックしているのだろう。腰には細身の剣を下げているが中々の魔力を感じる。伝説級とはいかないまでも家宝にしては上位のレベルだ。名のある一族の者なのかもしれない。

腰の剣に手を当てつつゆっくりと近づいている。今のところ何も怪しいところは見られない。私の思い過ごしだったのか？　と遅れを取るまいと森から飛び出そうとしたその時だった。

――――キシャアアアアアアアアアアアア

いきなりの咆哮に身を竦めていると、草原に居た魔法使いが地面から出てきた何かに飲み込まれていた。

障壁をすぐに展開できるように準備して巨大なソレを観察する。体長は尾を入れれば三十メートルほどだろうか。苔の蒸した緑色のトカゲに似た体、背中には人の背ほどの針が剣山のように生え、長い尾の先端は鎌のような刃を備えている。目は赤く、紫色の長い二股の舌が魔法使いの亡骸を咀嚼するたびにチラチラと見え隠れしていた。

――――キシャアアシャアアアアアアアア

獲物を呑みこみ、魂の凍るような咆哮をまた上げる。これはまた大物が出た。ここの濁った魔力はこいつがその原因だろう。爵位級に届くかどうかの魔力を感じる。悪魔という理性がある物ではなく、ただの本能に従う魔物にとっては想像だにしない力だ。

「ようやっと会えたぞ、わが宿敵よ」

声に驚き後ろを向くと、そこには最後まで動かなかった気配の主がじっとトカゲの化け物を見据えていた。

「ふん。おいお前、ファヴニル相手にどのくらい戦える？」

「ファヴニル？　あのトカゲの化け物のことですか？」

「あぁそうだ。あれは俺が探していた獲物、いや俺が殺さなければならない獲物だ」

そういって手にしたロングソードの腹を撫でる。その長剣は塚が金色で柄元には碧い石が埋め込まれていた。さっきの細身の剣とは違い、明らかに伝説級の力を内包している。

「それで、お前は魔法使いなのだろう？　あいつの障壁を破れるか？」

「……みたところファヴニルとかいうあいつと私の相性はいい。どのくらいの障壁が展開されているかわからないが、それを破るくらいの自信はあります」

「そうか……もう一度言うが俺の目的はあの化け物だけだ。奇跡というのには興味がない。そこで取引だ。宝はやるからあの化け物の討伐に力を貸せ」

「とても魅力的な御誘いだけれど、私は臆病なことに定評があってね。奇跡に負けないほどの剣を持っているのに仲間を募るなんて、怪しくて仕方がないよ」

「残念ながらこの剣は魔法障壁にはあまり効果がなくてな。障壁さえなければ俺がすぐに細切れにしてやるんだが。それにお前、後衛型の魔法使いだろ？　ここはお互い利用し合おうぜ」

良い条件だ。私はお宝を手に入れられるし、あの化け物の相手をまともにしなくて済む。それにもしダメな場合でも囮くらいには使

えるだろう。信用できないけれど、利用はできる。

「わかりました。では魔術師と魔法使いの誇りに掛けて障壁を吹き飛ばして見せましょう」

「ふん、いい面できるじゃねぇか。ちっ、どうやらあのデカイ目は飾りじゃねぇようだ」

トカゲの化け物、ファヴニルはこちらに気づいたらしく背中の針を一斉に飛ばしてきた。その場をとびのき、草原に出る。背中の針は生え換わるらしく、みるみるうちに元通りの剣山が生えそろっていた。先ずは障壁の程度を調べないといけないな。

「火よ」

周囲に白い火球を配置する。私が今まで一番長く、また多く使ってきた魔法だ。

「行け」

それぞれの火球を上から下から前から後ろから右から左から、全ての三次元軸から強襲させる。砂煙が舞いファヴニルの体を隠すが、所詮小手調べほどの魔法だ、大したダメージを与えていないだろう。

――――キジャアアアアアアアア

砂煙の中からまたもや無数の針が飛び出す。しかし、所詮は直線的な動きなのだ。避けるのは難しくはない。迫りくる切っ先を最小限の動きでかわす。しゃがみ、反らし、時には剣で持って針の軌道をずらす。私はただでさえ補助系の魔法を扱うことができないのだ

から、余計な体力は使えないのだ。

全ての針を捌き切ると、砂煙の中からファヴニルが姿を現した。予想通りダメージが入った様子はないが、いきなりの全方位攻撃は予想外だったらしく障壁に揺らぎが出ている。

「おい、全く壊れてないぞ。誇りはどうした」

横で全ての針を避けずに叩き伏せた男が呆れ顔で尋ねてくる。というかなんでわざわざ全部叩き落したのだろうか。魔力補助がかかっているのだから避ければいいのに。

「さっきのは障壁の性質を調べるための物です。性質によって欠点が異なってくるのですよ」

「へぇ、そんなこと聞いたことないけど、お前がそういうならそうなんだろうな。で、どうだ？　いけそうか？」

確かにこいつより私の方が魔法に関しては専門家と言えるだろう。それでも鵜呑みにするなんて、もしかしてこいつもお花畑……まぁ、今はそんなことはどうでもいいか。

「えぇ、詳しい説明は省きますが。ただ少し集中する必要があるので時間を稼いでもらえますか？」

「ふん、任せろ。それが魔法使いの従者としての働きさ」

そういって長剣を脇に構え男は滑るように駆けていった。その動きはまさしく狩人のそれで、男の実力を示していた。それにしても魔法使いの従者、か……ならばその主として私も負けてはいられな

いだろう。亀裂から白い手袋を取り出し、黒いそれと付け替える。手袋の手の甲の部分には円と幾何学模様を合わせた紋章が赤色で刻まれている。恐らく私のいた世界で一番有名な炎の錬金術師をイメージして作ったそれは、炎を扱うイメージには最適の物だった。糸の素材から、織り方、赤い塗料、紋章全てにこだわり抜いた私専用の杖だ。もっともそのせいで内包する魔力が大きくなりこうして普段は亀裂の中にしまうはめになったのだけれどもね。

「火よ火よ火よ、我が意に従え」

周囲の魔力に干渉して簡易の神殿を作る。火の魔法を扱いやすく、それ以外は扱いにくく、この場所を私の領域に持ち込む。男はファヴニルの攻撃を時にはいなし、時には弾いて注意を引いている。全く頼りになる男だ。

「火よ火よ火よ、始まりの英知をここに示せ　業火絢爛」

――――ギシャア?！

ファヴニルの背後に火柱を顕現させる。もちろん味方を巻き込むような愚行はしない。そうとう驚いたのかわざわざ動きを止めてくれた。

「わざわざ的になってくれるとは有り難い。私は射的は魔法ほど得意ではないからね。まぁ、その巨体なら元々心配はしていないけどね」

まだ自身の障壁が機能していることに気付いたのか、ファヴニルは落ち着きを取り戻し私をその紅い瞳で睨みつけてくる。だが、これくらいじゃ障壁を破れないのは理解している。

「火よ火よ光よ、風を切りて燃やし尽くせ」

ランスともいえるほどの大きさの火の矢を顕現させる。その熱に足元の枯れ草が燃えていくが、生憎と私は自然保護委員会のものではないのでね。右手をゆっくりあげ狙いをつける。狙う場所は化け物の頭、火柱の上がっているちょうど反対側。

「光陰火矢」

――――キィ……

詠唱と共に右手を振りおろす。光の名を冠した矢は音を置き去りにして狙い正しく飛んでいく。そして、障壁をあっさりと割って頭を串刺しにする。私の魔法が敵に刺さったのを見て、男も瞬き一つの間にその頭を落とした。それでは飽き足らないのかさらに斬撃を加えていく。さすがに頭を失った状態じゃろくに抵抗もできず、宣言通りファヴニルの細切れが出来上がっていた。

「ふん、なかなかやるじゃねぇか」

返り血で全身を赤く染めた男が、同じく血を滴らせている長剣を担ぎながら話しかけてきた。いやいや、血に毒があるとは思わなかったのだろうか？　まぁ、この化け物のことを知っていたようだから大丈夫なんだろうけど。

「あなたこそ。約束通り見事な細切れですね。身のこなしからタダものじゃないとは思っていましたけど、予想以上でした」

ファヴニルの横を通り木へと向かいながら話をする。男が頭を落

としたときに濁った魔力が掻き消えていくのを感じたから、もうこれ以上の魔物は出てこないだろう。

「ふん、お前こそ見事に破りやがったな。最初は見当違いなとこに火柱なんか出しやがるから驚いたが、結局あれはどういった仕組みだったんだよ」

「あぁ、アレですか？　ファヴニルの障壁は負荷の高いところ、つまりは攻撃を受けているところが強固になるような膜状のものだったんですよ。攻撃する箇所に合わせて障壁が強固になるので魔法使いにも使う人はいますね。もっとも人が扱うには消費魔力が大きすぎるっていう問題があるのですが」

「ほう？　それは化け物が使うには完璧な障壁だな」

「完璧な障壁というのは存在しないんです、どんな障壁にも破り方があるんですよ。攻撃を受けるところが厚くなるのなら、当然他のところは薄くならざるを得ません。これが魔法使いならば予備の障壁を張ったりするのですが、トカゲにはそんな知能はないようで。だから尾の方を障壁をわざと厚くさせて、手薄になった間抜け面に音速を超える速さの魔法をぶち込んだだけです」

いくらトカゲでも迫りくる魔法を防がないはずはないので、速さに重きを置いた魔法を使うしかなかった。業火絢爛のように自身から離れた地点を基点にすれば速さは関係なくなるのだが、今はあのレベルの魔法を複数そのように扱うことはできないから仕方ない。只の火球ならば数十は扱えるのだけどね。

そんな会話をしていると、ついに木の足元まで辿り着いた。木にはボロボロの布切れを纏った骸骨が、柄の朽ち果てた槍によって縫

い付けられている。この骸骨が名もなき戦士なのだろう。その骸骨の前にまるで墓標であるかのようにひと振りの剣が刺さっている。長い間風雨に曝されていたはずだが、刀身は白銀のように美しく時の流れを感じさせない。柄を握り軽く力を入れて引き抜くと、日の光を反射し刀身が全てあらわになる。鍔元には翠色の癒し石がその身に宿した力と耀きを誇示している。刀身は一メートルほどだろうか、柄を入れれば一般的な剣よりかは少し長いものになる。これは専用の鞘を作ってもらわないといけないなぁ。

「それが噂の奇跡ってやつか？」

「えぇ、私が探していたものです。渡しませんよ？」

「ふん、そんなやさっこい剣はいらねぇ。俺には相棒がすでにいるしな」

そういってちらっと長剣をみやる男。そういえば幾ら障壁がないといってもあのトカゲをあっさりと解体したのだから、かなりの切れ味を誇るのだろう。それにまだ隠し種がなにかあるはずだし。

「さて、それじゃあ私は他にも行くところがありますのでここでお別れと行きましょう」

「そうだな、俺もまだ用事があるしな。その前に名乗りぐらいはしとこう。俺の名前はシグルズだ」

「そうですね、一時とは言え背中を預けた仲ですし。私の名前はハルキです。もし、縁があればまた会いましょう」

亀裂にヴィーティングを放り込み歩きだす。これで生き抜いて死

ねる確率が一気に大きくなった。まだ一回目の生がどれほど残されているかはわからない。ただ私は、私にできることをするだけだ。

「あぁ、じゃあな」

ep. 10　子供と私と賞金と指名手配

対人戦、および対悪魔戦において重要なファクターというものは情報である。これは昔から変わらないことで、その戦いが魔法などというオカルトな技術を用いた物であっても変わらない。情報というのは相手の目的から始まり所属組織、年齢、パートナーの有無、得意魔法、苦手な物など多岐にわたる。それゆえ組織と呼ばれる集団にはほぼ必ず情報を処理する人員がいるのだ。そして、その人員にとって未知とは畏怖し、克服し、唾棄すべき存在であるといえる。そして、数多の手を使って未知を既知にしようとするのだ。それは対象が興味を持ちそうな情報を流したり、金銭で雇用するとの先触れを街にだしてみたり、対象と接触した人を調べたり、召喚した悪魔に襲わせたり――賞金をかけて指名手配したりだ。

「見つけたぞ！　お前が『白の異端』の魔法使いだな」

「はぁ、またですか……」

鬼の首を取ったかのような表情の魔法使いを見て、思わず心の声が漏れる。心底うんざりする。最近は隙あらばこういう輩が春先のつくしの如く出てくるので目新しさもない。せめてもの救いは襲ってくる前に必ずこのような問いかけをしてくることか。おかげで闇に紛れて不意打ちされることはないが、せっかく人の多い街中に宿を取ったのにご丁寧に人払い、認識阻害、建物の保護結界を張ってまで怒鳴りこんできたときにはその執念に感動すらした。なぜこんなにも有名になったのか、それはこの前の奇跡の台座の件が関わっていた。

最初にこの事態にあったのは、ヴィーティングを手に入れてから一週間が経とうとした頃だった。私はメルに言ったように世界の絶景を探すため、先ずは世界に十一か所ある魔力溜まり巡りをしていた私の前に一人の男が現れた。

「おい、お前が『白の異端』の魔法使いか？」

「……誰ですか、それ？」

「しらを切るつもりか。まぁいい、剣を交えればわかることだ」

「いや、だから誰ですかッ、て！」

障壁で男の剣を受け止める。剣自体には特別な力は全く感じないが、通常ではありえない踏み込み速度から男が何らかの術を行使できるのは明らかだった。というかなんで私は襲われているのでしょうか？　これは少しでも話を聞きだす必要があるかな。男の足元に土の槍をだして距離を取る。

「土も使えるのか、いやそれとも本人ではないのか？」

「だから一体誰だと思っているんですか。事と次第によってはそれなりの代償を払ってもらいますよ？」

「誰だ、か。お前これを見たことはないか？」

そういって一枚の紙を風に乗せてこちらへ飛ばしてくる。紙を切ることなくこちらの手元に飛ばしてくるということは、風魔法が得意なのだろう。相性は悪くはないが逃げ切った方が早いな。手元の

紙を覗きこむと、なんとも頭の痛いことが書かれていた。

――――<ＡＬＩＶＥ　ＯＮＬＹ>――――

『白の異端』

備考：奇跡の台座より国宝の強奪、同場において十三人の魔法使いを殺害した疑惑あり、発動媒体が珍しく白い手袋に酷似している、重要参考人であるため生け捕りにすること、情報はその場で査定する

報酬：金貨２００　魔法石１０　翼竜、もしくは牙竜の角　その他素材

引き渡しは近くの魔法教会にて

――――<ＡＬＩＶＥ　ＯＮＬＹ>――――

紙は手配書だった。名前は書かれていないが、人相書きと私の顔を見れば十人中七人が同一人物だと思うだろう。いつの間にか私は大泥棒になっていたようだ、しかもあの場に居た魔法使いの殺人疑惑も追加されているとは。そもそもあの奇跡の台座はどこにも所属しておらず、ヴィーティングにしたところで所有者など決まっていないのに国宝の強奪とは屁理屈どころじゃない。それにしても金貨２００とはまた大した額を懸けられたものだ。金貨一枚あれば独り身なら一月は暮らすことができる。四人家族でも四年は楽に暮らせるだろう。それに加えて高位の発動体に使われる魔法石や武具の素材として人気のある竜の角、他にも素材なんて大盤振る舞いもいいところだ。まぁ、その価値がヴィーティングにあるのは認めるけれど。

「というわけだ。なに、殺しはしないさ。ただ腕の一本くらいは貰

って行くがな」

そういって再び突っ込んでくる男。ご丁寧に風の加護も付けているのか先程より強い衝撃が展開させた障壁をたわませる。事情はわかったが、だからといって大人しくお縄に付くなんて間の抜けたことはしない。かといって戦うのも馬鹿らしい。身体強化の使えない私にとって戦いという行為はそれだけで体力を大きく減らすものだ。必要に迫られたわけでもないのにそんな苦労をしたくはない。もう、私も若くないので苦労を避けても許されるだろう。

「すみませんが、面倒なのでお断りします」

魔法の射手を牽制代わりに放ち距離を取る。いつもの火球じゃないのは手の内を悟らせないのと、実は手配書の人物じゃなかったのかと思わせるためだ。それがどのくらい効果はあるかわからないけれど、やっといて損はないだろう。体内魔力を練ってゲートを開く準備をする。

「逃がさん！」

また風を纏って突っ込んでくるが、男が踏み込んだのと同時にバックステップを入れゲートを発動させる。去り際に「光の……媒介に……」と男の言葉が聞こえるが、それよりもこれから増えるであろう襲撃者の対応を考える方が優先度が上だった。

それから姿を隠しながら何故こんなことになったか探ってみると、すっかり忘れていた迂回して進んでいた魔法使いがほうほうの体で草原に辿り着き、私がヴィーティングを抜くところを見ていたらし

い。さらに運の悪いことにそいつはフリーの魔法使いではなく、地元の魔法教会から派遣された腕利きだったらしく教会に見たままを説明し、今こうして指名手配になったそうだ。あの場では害にならないから放っておいたが、今思ってみればしっかり殺しておくべきだったなぁ。

その後も、時場所を問わず賞金稼ぎは現れては恥ずかしくなるような二つ名でもって人物確認をしてくるのだから精神衛生上もよろしくない。中には逃げ辛いように集団で襲ってきたり、転移を阻害する結界を張ったりする奴もいるから毎回逃げるわけにもいかないのが余計に苛立たせてくれた。まぁ、その苛立ちは元凶にきっちりお返ししたが。最近は賞金首の間で襲いかかるとは無傷か灰になるということから実は吸血鬼なんじゃねぇかと噂もあるらしい。それで放っといてくれるならそれでもいいや、もう。

「おい聞いているのか！」

「生憎と馬鹿の声は聞こえないようになっているので」

「嘘をつけ！　しっかり聞こえてるじゃねぇか！」

「なんだ、ご自分で馬鹿だと自覚していたのですか。賢者の道はまずは己のことを知ることから始めるらしいですよ。よかったですね、元馬鹿さん」

「殺す、絶対殺す。生け捕りとか関係ねぇ。八つ裂きにしてやる」

怒鳴り声で回想から引き戻される。それにしても沸点の低い男だ。軽く会話しただけなのに激昂するとは、幻術が得意な者にとっては卵を割るほど手間がかからない相手だろうな。私は幻術がまだ不得

意なので使わないけど。

「ドゥク・ウナ・プルメ・トゥムセパ　風を切る鳥の　空を奪えよ
　歪な鳥籠　鳥の嘆きは　ついぞ絶えず　禁移結界」

「うわぁ、貴方も使えるのですか……」

　禁移結界、簡単に言うと転移魔法を妨害する結界だ。数ある結界術でも特殊な魔法なため使い手は余り多くない、ということになっている。実際は個人が使うメリットがあまりないためだ。そもそも転移魔法自体が高位な魔法であるため使い手が少ない。また、その使い手にとって転移魔法は面倒事から逃げるもので、封じられたところで敵を殲滅する、結界を破壊する、範囲外に出るなど抜け道がとても多いのだ。なので一般的にこの魔法は治安の為転移を禁止する場所、刑務所や銀行の金庫、ゲートポートなどで利用されている。なのでこの結界を一度も見ることなく一生を終える人も多いはずなのだが……私はこの結界の使い手に会うのは既に五度目だ。

「ふふふ、驚いたか！　これでお前の逃げ道はなくなった。なぁに安心しろきっちり、すっきり、さっぱり殺してやるから」

「一応聞きますが、何でまた禁移結界なんてマイナーな魔法を使えるのですか？」

「ん？　そうかそうか、せめて冥土の土産にそれくらい教えてやろう。あれは俺が賞金稼ぎとしては駆け出しの頃の話だ……」

「なにか、始まった……」

　どこか空を見つめて彼の語りは始まった。割愛するが、どうやら

私の光を媒介にした転移魔法が、傍から見ると空間に溶けていくような幻想的な物だったらしい。それでその儚ささと美しさに心を打たれた賞金首の一人がその光景を絵にし、そのなんともいえぬ幻想的な光景から転移魔法を美しく使うのが高位の魔法使いの間で流行りになったそうだ。落雷と共に転移する者、その場に可憐な氷像を残す者、舞い降りる白い羽根の幻術を出す者などなど……。その絵は複製も多く行われ、中等魔法よりも先に転移魔法を習得しようとする魔法使いも少なくはないのだとか。そうして転移魔法の使い手が多くなった結果賞金首になる者も増え、対抗手段として賞金稼ぎたちはこのマイナーな魔法を覚える者が増えたということらしい。

聞かなきゃよかったなぁ……、最近街中で視線を感じるのはその絵が原因なのだろうな。未だこの旧世界では宗教絵しか認められていないが、魔法教会は独自領のため普通に魔法世界の絵画などが飾られている。全く、こんな中年を捕まえて描いて何が面白いのか。それとも超超美化されて見目麗しい美青年に描かれているのだろうか。

「というわけで俺は師匠の墓前で決意を新たにし、こうして更なる修羅の道へと足を踏み出したのさ……」

「そうですか……その師匠さんもきっと天国で弟子自慢をしていると思いますよ」

「そうかなぁ、俺は良い弟子だったかな……」

「人を敬うものは、また人から敬われるものです。貴方のその師匠さんへの思いと同じく、師匠さんも思っていてくれてますよ。そろそろ私は用事があるので失礼しますね。今度は墓前で立派になった姿を見せれるように、これからも精進して下さい。では私はこれで」

「ありがとう、ありがとうよぉ……」

回れ右をして結界の外まで歩く。この結界の欠点として個人では範囲が狭いというものもある。熟練の者でも半径二十メートルが限度なのだとか。身を守る結界なら兎も角、その中で戦闘するということを考えるとあり得ない狭さだ。なので十秒もかからず結界から出ることはでき、巷での転移魔法ブームの火付け役となった光を媒介にした転移魔法を発動する。弁の立つ者を言葉の魔術師と呼ぶこともあるらしいが、年を取ればこの程度造作もないことだ。

後にこの時の魔法使いが精進に精進を重ね、普通は死後や現役を終えた高齢の者に与えられる立派な魔法使いという魔法使い最大の名誉を齢四十にして受勲されるとは、当然私には想像もできなかった。

将来有望な青年を丸め込んで煙に巻いてから数日、私は今スペインの山奥にいる。目的は『ミステルティン』と呼ばれるヤドリギの始祖だ。神話の中では完全無欠素敵無敵でさらにオーディンの子にして後継者の太陽神バルバドルを殺したとされている。自身が死ぬ夢を見たバルバドスが母にそれを報告すると母は全ての動物、植物、鉱物、果ては水などの自然にまで息子を傷つけないと誓わせた。そして神々は様々な物をバルバドルに投げつけて傷つかないのを祝っていたところに、北欧神話での有名いたずらっ子ロキがバルバドルの弟で盲目の神ヘズを騙してミステルティンで胸を貫かせたという話だ。なぜミステルティンはバルバドルを傷つけることができたたかというと、ミステルティンの元となったヤドリギはとても小さく、生まれたばかりで無力だったので見逃したからである。そんなこん

なで神殺しを果たしたヤドリギは、とても魔法魔術てきに価値のある植物となったのだ。

森の中を掻き分けて進むこと数時間、日はすっかり落ちて夜の帳が下りていた。できればこうなる前に野営地を探して各種結界を張りたかったのだけれど、まぁこれも旅の醍醐味と思えば、だ。月明かりに照らされて歩くのも風情があることだと思う。いつか日本に行って侘び寂びに浸るのもいいなぁ、もちろんメルを連れて。

さらに森を進むと、よっと開けた場所に出た。近くには泉があるのかそこかしこに動物の気配がする。今日はここで一晩過ごすとしよう。そうと決まればさっさと準備をすませるか。今日は軽い認識阻害だけを掛ける。ここは動物たちの水飲み場なのだから人だけに干渉するような軽いものだけだ。それにもし人が来たなら人間よりも敏感な彼らが教えてくれるだろう。現地のものと上手く付き合うことは旅においては必須のスキルだ。

テントを張ったり火を起こしていると、急に森がざわめいた。人ではない。只の人なんていくら稀代の魔法使いだったとしても自然が恐れるはずがないのだ。息を殺してじっと待つ。魔力に気づかれて襲いかかってくる可能性があるから、無闇に魔法や魔術は使えない。こんなことなら遠視の魔法だけでもあらかじめ飛ばしておくべきだったか。

ざわめきが大きくなっていく、いや近づいてくる。動物たちは機敏に反応し、草木はただ流れに身を任せている。気配は泉と反対側、私が歩いてきた方向からゆっくりとこちらへ向かってきている。もうすぐそこだ。厄介なことに月が雲に隠れてしまい姿がまだ見えない。それとも月すら恐れているというのだろうか？

サクッ

遂に気配の主が森を抜けた。そして一陣の風が広場を吹き抜ける。吹き付ける風に顔をしかめながらも見逃すまいと目は離さない。一瞬の隙は死に繋がることなどよくあることなのだから。月が姿を現し、広場を端から照らしだす。それはやがて気配の主を鮮明に、そして鮮烈に浮かび上がらした。

「こ、ども……？」

光を放つかのような鮮やかな金髪、月明かりに照らされたせいか不健康なほど青白い肌、そして無理やりしがみ付いているかのような不釣り合いな魔の気配。それが自然が恐れていた来訪者だった。どうみても少女にしか見えないのだが、魔術師である私の目がそれを強く否定する。顔を上げ、目が合う。やっぱりこの程度の認識阻害など効かないか、せめて襲ってこないことを祈るだけだな。

「あなたは……」

おや、私を知っているのか？自慢ではないが私は知り合いが少ないから一応知人の顔くらい全て覚えているつもりだったのだが。一方的に知っているとしたら、図書館の利用者だろうか？でも、こんな気配の持ち主なら私も覚えているはずなんだけどなぁ。それ以外で私を知っているとしたら。

「まさか、君も賞金稼ぎですか……？」

「賞、金稼ぎ……ですか？」

異口同音。ほぼ同時にお互いが問いかける。相手も訪ねてくると

いうことは、恐らく賞金稼ぎではないのだろう。若干身構えているし、同じ賞金首仲間だろうか？　演技の可能性もあるから油断はできないけど、少し話を聞いてみるか。

「違います、むしろ追われている側です。貴女もお仲間ですか？」

「仲間……そう」

音もなく倒れる少女。勿論私が何かしたわけではない。用心しながら近づいてみると、洋服は辛うじてその体をなすほどにボロボロで、傷は見当たらないが所々に土汚れが付いている。

「見捨てる、というのは後味が悪すぎですね。それにこの魔力についても知りたいですし」

少女を抱え上げテントに連れていく。羽のように軽いとはこういうことをいうのだろうな、貴重な体験ができた。少女に魔力を抑える魔法をかけ、とりあえずベッドに寝かせる。これで起きがけに襲いかかろうと対処できるだろう。泉から水を汲んでくるとしようかな。

泉で亀裂の中の水と、今日使う分の水を汲んでテントに戻り亀裂の中からテーブルや椅子を取り出す。テント内で使う物の予備だが、少女が目を覚ますまでテントに入るのは危険だから今日は外で使う。こんなことならテントの予備も買っておくべきだったなぁ。寒さはマントに刻んだ術式のおかげで大丈夫だけど、明日の体の痛みを想像すると思わず顔を顰めてしまう。今度魔法世界に行くことがあれば絶対予備を買おう。

椅子に座って一夜を明かす。体の隅々から嫌な音が聞こえるが、寝れたことだけで良しとしよう。十分に時間を掛けて体を解し、火を焚いて食事とお湯を準備しているとテントから少女が出てきた。

「あなたがここの主ですか？」

「主かって言われても。この結界を張ったりテントの持ち主は私ですが、ここへは旅の途中で通りかかっただけですよ。それにしても君は一体何者なんですか？」

いきなりの問いかけに答えつつも、こちらも問いかける。私が知りたいのはその一点だといっても過言ではない。一応魔法世界に住んでいたころは様々な魔獣、悪魔に出会った私だが、そのどれとも違う気配が少女からは感じられたのだから。

「私？　私は……」

そう言ったきり黙りこむ少女。他人には言えない種族なのだろうか？　特定の相手にしか正体を明かせない種族というのはいくつか本で読んだことがある。生憎と、私はまだどの種族とも会ったことがないから筋は通る。だが、そういった種族は他の名前を言ったりするのがお決まりだったはずなんだけれどなぁ。少女は何か思いつめた顔できつく唇をかみしめているだけだ。

クウゥ……

これまたなんとも可愛らしい虫の鳴き声だ。少女は顔を真っ赤にし、服の裾を手が白くなるほど握り締めている。それを見て何も思わないほど、私は達観してはいない。

「とりあえずご飯がもうすぐできるので椅子に座って下さい。話はそれからでも遅くはありませんから」

その言葉に少女は驚いたのか口を数回開け閉めした後、私に突っ込んできた。マントに顔を埋める少女の頭を軽く撫でる。まるで子供ができたかのようだ。押しのけるわけにもいかず、魔法で食事の準備をする。後で替えのマントを出さないとなぁ。

「さて、とりあえずはお互いに自己紹介といこうじゃないですか。私はハルキ、魔術師もしているが魔法使いです。今は見聞を広める旅をしている途中ですね」

食事を取り終え、朝の紅茶を飲みながら話を切り出す。向かいに座る少女はお茶うけに出したクッキーをかじりながら紅茶を飲んでいる。私の問いかけに彼女は一度目を伏せるが、何かを決意した後真っすぐに私を見つめてきた。

「私はエヴァンジェリン、吸血鬼、です……」

カップを置き、また俯く少女。肩が揺れているのは見間違えのわけがないだろう。それにしても吸血鬼？　昨夜ならまだしも、今は太陽が昇っている。なのに彼女にはなにも変化が見られないのだが、いつから吸血鬼は太陽を克服したのだろうか？　いや、もしかしたら。

「もしかして、君は真祖のですか？　私が知る限り日光を克服したただの吸血鬼はいなかったはずなのですが」

あからさまに肩を跳ね上げる少女。これは答えを聞くまでもないだろう。そうか、真祖か。これはまた大物と出会ったものである。

私が知る限り伝説上の種族だと思っていたのだが、火のないところに煙は立たないとでもいうのだろうか？

「怖くないんですか？　私は化け物ですよ？」

「まさか伝説の種族に会えるとは思いませんでしたが、怖いかどうかで言えば全く怖くはないですよ。もしかして、魔力を封印されているのに気付いてないのですか？」

「え……？」

危機管理能力がない。もしかして真祖の吸血鬼というのは全てがこうなのだろうか？　ならば伝説と言われるのも納得する。そんなことで生き抜けるほど、その世界は甘くないのだから。少女はさっきから手を振ったり握り締めたりしているが、やがて封印されたことを受け入れたのかカップを再び手に取る。なんだか調子の狂う化け物だ。

「それにしても伝説だと思っていたのですが、どこからやってきたのですか？　他の真祖の吸血鬼はいないのですか？　どんなことができるのですか？」

「伝説とか、真祖とか、そんなの知らない……家族はいたけど、もう誰も残っていない……」

そこからポツリポツリと彼女の独白は始まった。領主の一人娘として楽しく過ごしていたこと、両親はとても優しく、メイド長はちょっと厳しかったこと、十歳の誕生日にパーティーが開かれたこと、次の日起きたら人ではなくなっていたこと……。

「そして私は追われるようになった。昼間はできる限り人目に付かない場所で休んで、夜に活動した。どこへ行くとかはなかったけど、誰も私のことを知らない場所を目指していた。もちろん襲われることは沢山あったよ。昨日もいきなり3人に囲まれて、なんとか逃げ出したらハルに出会ったの」

「ふぅむ、それはまた波乱万丈なんて目じゃない過去ですね。それにしても真祖の吸血鬼化の術ですか。そんなことを考える人もいるんですねぇ」

いったいその魔法使いは何を目指していたのだろうか。真祖の吸血鬼はそれは不老不死、強大な魔力、太陽や流水の克服などしているけど、魔法世界の生物を何種類か合成させた方が余程効率的な気がするのだけれどなぁ。まぁ、所詮他人からしたら研究の価値なんてそんなものだ。

「ハルは魔法使いなんだよね？」

「一応そういうことになっています。本業は魔術師のつもりですが、魔法の方が使う機会は多いですしね。専門の学校に通ったことはないですが、一人旅をしながら賞金稼ぎを追い払うほどの力は持っていますよ」

「……お願い！　私に魔法を教えて！」

真祖の吸血鬼に魔法の教えを請われたのは私が史上初だろう。貴重な記録なので是非とも歴史書に書き加えてほしい　。それにしてもどうしたものだろうか。恐らく少女、エヴァンジェリンが求めているのは自身の身を守りぬくための魔法だろう。不釣り合いなその魔力量から優れた魔法使いになるとは思うが、生憎と私自身がそう

いう魔法を教えてもらったことがないため教えようがない。

「ダメ、ですか？」

「ダメというわけじゃないんだけれど、君が習いたいのはおそらく攻撃系の魔法だろう？　生憎と私のそれはすべて独学というかオリジナルだから、君に教えたところで効果は薄いでしょう。一応何冊か魔法書は持っていますが、私が教えることはできないので君が一人で学ぶしかないですね」

「一人で……」

「ええ。一番手っ取り早いのはアリアドネーの学校にでも入ることですが、真祖の吸血鬼とあってはゲートポートで止められるでしょうね」

「アリアドネー？　ゲートポート？」

「アリアドネーというのは……」

アリアドネーとゲートポート、さらに旧世界と魔法世界について説明する。元は一般人なのだから知らないのも当たり前か。

「といったところですかね。さて、どうします？　私と一緒に付いてきますか？」

「いいの？」

「別に少女が一人増えたところで変わることはありませんし、真祖の吸血鬼というものに興味はありますからね。君といればその原因

の魔法使いといずれ会えるでしょうし、その時にそいつの魔法書などが手に入れば対価としては申し分はないですから」

エヴァンジェリンに賞金を掛けたのは間違いなく吸血鬼化を行った魔法使いだ。なにせそれ以外に真祖の吸血鬼だとわかる人などいないのだから。真祖の吸血鬼化の術式には興味はないが、それに至るまでの魔法書はとても魅力的だ。恐らく絶版になった魔法書などがごろごろあるに違いない。

ふいに動物たちが移動していくの感じる。森はざわついていない。どうやら彼女の答えを聞くより早く一仕事しなければならないようだ。遠視の魔法を使わなくても、ダダ漏れな殺気でどういう相手かわかってしまうことにため息が漏れる。慣れって恐ろしい。

「おい貴様！　その化け物をこっちに渡してもらおうか」

「お断りします、あとうるさいです。ついでに口が臭そうなのでもう喋らないでください」

「言わせておけば減らず口を。大人しく渡せば今なら殺すのは勘弁してやろう」

「お断りします、ハゲ。ついでに後ろのデブとメガネにも伝えといてください。それとやっぱり口が臭いのでもう喋らないでください。森に住む動物がかわいそうなので」

なにやらハゲデブメガネが騒いでいるが気にしない。エヴァンジェリンは殺気に当てられたのか私の背中にしがみついている。人見知りの子供を持った親の気分だ。ここは父親として一つかっこいいところを見せますか。

「兄貴！　あいつの顔見たことありますぜ」

「確か、あいつも賞金首だったはずなんだな」

「なに！　本当か！　クククッ、残念ながらもうお前を逃がすのはなしだ。さっさと化け物を渡していれば気付かなかっただろうに、愚かな奴め」

「火よ」

余りにも面倒なのでリーダー格と思われるハゲの口の中に火球を顕現させる。並の魔術師なら障壁とかの関係で難しいことなのだが、それができるという時点で格が知れている。こいつらは一体今まで何を相手に賞金稼ぎをしていたのだろうか？

「兄貴！　よくも兄貴を」

「もう黙っちゃいられないんだな」

口を押さえて転げまわるハゲを見て突っ込んでくるメガネとデブ。二人とも剣を持っていることから剣士なのだろうが、一般人並の早さだ。身体強化なしに突っ込んでくるなんて久しぶりに見た気がする。ハゲは魔法使いだと思っていたのだが、もしかして山賊上がりの一般人だったのだろうか？

「土よ」

メガネとデブが次の一歩を踏み出す場所に穴をあける。高さ十メートルほどの只の穴だ。二人は音もなくきれいに落ちて行った。も

う、なんで賞金稼ぎなんて始めたのだろうか？　大人しく畑でも耕しとけばいいのに。今まで襲ってきた賞金稼ぎの最低記録を更新し尽くした二人をそのまま土で埋める。勿論ふんわりとした土ではなくしっかりと魔力で固めた土なので、今頃身動きできずに絶望でもしているだろう。自業自得です。

「ふぇめぇ！　ふぁくろしやふぁれ！」

恐らくはてめぇ覚悟しやがれ、である。ハゲは貧相な杖を構えて何かぶつぶつ呟いているが、もうこんな奴らと付き合って時間を無駄にしたくない。幸い障壁を張ってないことがわかったのだからアレで終わらせよう。

「火よ」

「んぁ！　ふぇ」

どさっと地面に倒れるハゲ。見る限りなぜ死んだのか誰もわからないだろう。なにせ、肺と心臓を直接燃やしたのだから。これも相手が障壁を張ってないからこそできる荒技である。少し火力を上げれば火ダルマにでも灰にでもできるが、わざわざ魔力を浪費することもない。賞金稼ぎが弱かったのを喜ぶべきか、こんな賞金稼ぎを相手にしたことを悲しむべきか判断に困るなぁ。

「今のって魔法？」

「そうですよ。私の、私だけの魔法です。私のことが怖くなりましたか？」

そう聞くとエヴァンジェリンは頭が取れるほどに首を振って否定

した。まぁ、彼女も人を殺したことがあるのは間違いないのだろうし、相手はこちらの命を奪おうとしているのだから怖がられたところでなんとも思わないけどね。

「私、ハルに着いていく」

「そうですか」

「これからよろしくお願いします」

「はい、こちらこそ。とりあえずはその汚れを落としましょうか。ついでに服は私の予備のを繕ってあげます。街に着くまではそれで我慢して下さい」

再び私のマントに顔を埋める少女の頭を撫でながら、ミステルティンと近くの町のどちらに先に行くか思考を巡らせる。今ならメルの気持ちが少しわかる気がした。

ep. 11　生徒と私と宿木と盲目

子供ができた次の日、最初の予定通りミステルティンのあるヤドリギの森方に進むことにした。せっかく目的地まで半日程度の所まで来たということもあるし、魔法発動体としてヤドリギは優秀なためエヴァンジェリンの杖として利用できるからということもある。紅茶を飲んだ後テントや椅子などを片づけをし、ヤドリギの森へと出発する。エヴァも少し大きめのマントを羽織り私の後を付いてくる。マントは昨日私が自身のマントを一つ裁って繕ったもので、若干障壁の硬さが落ちてしまったがその分認識阻害を強く掛けなおしたものだ。この認識阻害を抜けるものは街中で攻撃を仕掛けてくるほど思慮が浅くはないだろうから、安全に街中に入るためにも必要な物だった。

「ハル先生。この、属性を知ることって何？」

「ん？　それはその言葉の通りだよ。先天的に得意な属性、系統というのはだいたい決まっているからね。私は、私の師匠の下で一週間ほどかけて調べた覚えがあるなぁ。本当ならそうした方がいいのだけれども、生憎と私はその見極めができないからねぇ。いつか魔法世界に行ったときに正確なものを取るから、今は扱いやすい属性の魔法を使えるようになればいいと思うよ」

「扱いやすい属性の魔法？」

「えと、確かこの本の……あった。はい、このページに初心者用の魔法が乗っているからこれを片っ端から試してみれば感覚で分かるはず」

そういって袖口から亀裂を開き、中から青色の魔法書を取り出してエヴァに手渡す。『初等魔法大全集』というのがその魔法書の名前だ。その名の通り初等魔法が集められた魔法書だ。一番初歩的な「火よ灯れ」や「風よ」などが載っている。たしかどこの魔法学校でも最初に買わされる魔法書だったはずだ。そのために分かりやすい言葉を用いて書かれている。

「ありがとう。えぇと、プラクテ　ビギ・ナル　火よ灯れ」

とりあえず代用品として渡した予備の杖で初心者用の魔法を片っ端から試していくエヴァ。本来なら歩きながらではなく、きちんとした方がいいのかもしれない。けれど目的もあるし、エヴァも真祖の吸血鬼として体力も人外の域なのでこうして歩きながら修業をすることになった。

「プラクテ　ビギ・ナル　風よ吹け」

今度は後ろからそよ風が。初等魔法といってもかなりの数があるはずだから、扱いやすい属性がわかるまではそれなりの時間がかかるだろう。だが時間はたっぷりあるのだからゆっくりやればいいだろう。特に彼女には永い永い時間があるのだから。

「今日はここで野営をすることにしましょうか。エヴァ、薪を集めてくれるかい？　あぁ、間違ってもヤドリギの森の方へは行かないように」

「え、目の前なのにわざわざ明日にするの？　先生、私なら全然大丈夫だよ」

「いや、この森はちょっと厄介でして。詳しいことはまたあとで話しますから」

森の目の前で野営の準備をしながらエヴァに仕事を頼む。日はてっぺんを回ったが、まだまだ明るい。森の中でも十分に光があるけれど、このヤドリギの森はちょっと特別だから仕方ない。テントを出したり結界を張る準備をしていると、私が一抱えできるかどうかの量の枯れ枝を浮かしてエヴァが運んできた。なかなかに順応性があるようだ。

「これくらい？」

「十分だよ。じゃあ結界を張るから少し待ってなさい。それが終わったらお昼にしようか」

認識阻害、幻術、魔法障壁の結界をそれぞれ展開させる。ちなみにこの結界にもヤドリギの杭が使われている。このような何回も使う結界は個人が毎回毎回、自力で展開することは不効率なので多くは自作の魔法具を利用する。というか認識阻害に関しては一から展開させることの方が少ない気がする。街中に入る時は変装魔法か、認識阻害展開型の魔法具を付ける場合がほとんどだし、魔法使いの拠点などはこのように設置型の魔法具が使うのが一般的だ。最近では魔法雑貨店に簡易型の認識阻害符なども売られているしなぁ。まぁ、人はより合理的に進化するものだから良いことなのかもしれないけど。

「それで、なんで森の中はダメなの？」

昼食を済ませ、食休みをしているとエヴァがそんな疑問を投げか

けてきた。今日はゆっくり時間もあるし、後で話すと言ったから今説明しても良いだろう。

「まずエヴァはミステルティンというのは知っていますか？」

「聞いたことがあるような、ないような……」

「じゃあそこから始めましょうか。ミステルティンとは神殺しの……」

ミステルティンの説明から始める。まぁ神話なんて十歳には少し早いのかもしれない。勧善懲悪という面もあるけれど、結構神様というのは自己中心的だったりドロドロの恋愛関係だったりするからね。

「それでそのミステルティンがあると言われているのが、ここヤドリギの森なのです」

「へぇ……」

「それで本題に入りますが、この森に入ってミステルティンの元まで辿り着くことは簡単です。しかしヤドリギを持ち帰ろうとすると盲目になってしまうのですよ。周囲の普通のヤドリギならばただ盲目になるだけなのですが、ミステルティンの枝などを持ち帰ろうとすると手の感覚もなくなるのです。どちらも森から出れば回復するので、普通のヤドリギを取る時は入口からロープを付けて入り、帰りはそれを辿ることで安全に出れるのですが、ミステルティンとなると少し手間がかかりまして」

「その準備のために時間がいる、と」

「つまりはそういうことです。せっかくなので妥協はせずミステルティンの枝が欲しいですからね。元々の仕込みはほとんど終わっていますが、一番効果のあるのは日中ですから。今から入って、枝を選別して、帰ってくるとなると辺りは真っ暗になってしまいますから今日はここで一晩明かして朝から森に入ろうと」

「じゃあこれからどうするの？」

「そうですねぇ……エヴァは魔法の修行をするとして、私は消耗品の魔法具でもコツコツ作りましょうか。見てほしいことがあったら手伝いますよ」

「じゃあこの部分のことなんだけど……」

そうしてエヴァの魔法修行の様子を見たり、古くなったヤドリギの杭を作り直したりしながら一晩を過ごした。エヴァは自己魔力が莫大なのだが、まだまだ無駄が多いためしばらくは自己魔力の扱いを習熟するのが先だろう。このエヴァの魔力なら魔法の射手だけで並の魔法使いなら圧倒できるのは間違いない。エヴァもいつかは私のようにオリジナルの魔法を作りたいと言っていたが、先ずは普通の魔法を修めることにしている。なぜなら彼女には安心して修行できる場所はなく、一刻も早く自分の身くらいを守れるほどの力をつけなければいけないからだ。

一夜明け、朝食を取った後に出発の準備をする。エヴァは魔法の修行に精を出している。今まで人気の少ない夜に活動していたせいなのか、夜に住む吸血鬼の性なのか、エヴァは朝に弱かったけれど

少しでも早く魔法を習得するために努力している。できれば朝方に戻ってくれると嬉しいな。これから毎朝起こさないように腰に巻き付いた腕をそっとほどいたり、絡み付いていた足をどけたりするのは避けたいものだ。

「さて、そろそろ行きましょうか。今日の目標は自分に合った杖の材料をゲットする、でいきましょう。その前にエヴァ、これを渡しておきますね」

テントを片づけ、なにやら気合の入っているエヴァに懐からある物を出して渡す。ヒマワリの種ほどの小さな石だ。エヴァはたぶん、自分専用の杖が手に入ることが嬉しいのだろうな。

「これは……石？　見たことないけれど、これも魔法石というものなの？」

「そうですね。一応魔法石に分類されていますが、おそらく魔法具としての方が有名ですね。クリソベルキャッツアイという名前なのですが、まぁ説明するより実際体験した方がいいでしょう。その石を両手で包みこんでみなさい。光が入らないように、それでいて虫を捕まえた時のように少し空間に余裕をもたしてね」

疑いとわくわくが入り混じった表情で空気を握りこむエヴァ。随分と微笑ましい光景だけれど、これから精神年齢だけ成熟していくと思うとそのズレに苦労するのだろうか。そんなことを考えていると、エヴァが興奮を抑えきれない調子で話しかけてきた。

「先生！　これ、これ動いてる！　なんか掌にこつこつ当たってる！」

「はいはい、そんな大声出さなくてもちゃんと聞こえていますよ。クリソベルキャッツアイの特性は二つあります。一つは身につけていると夜目が利くようになること、もう一つは太陽の方へ動くことです。後者は周りの暗さに比例していて、遺跡などを冒険する人たちによく利用されています。そしてこれが仕込んでいた物です」

「あれ、動きが変わった。……その水晶に引っ張られてるの？」

今度は水晶を取り出す。占いなんかにもよく使われる透明な水晶。大きさは拳よりも二回りほど大きく、表面にはあるルーン文字が刻まれている。結構な重量があり片手で持っていると腕がプルプルと震えそうだけど、そこは矜持として抑え込む。

「これが私が仕込んでいた物です。この文字が見えますか？　これは太陽を意味するルーン文字で、擬似的にこの水晶を太陽にしているんです。私の腕では太陽のように熱と光を生み出すことはできませんが、その性質をある程度持たせることはできます。そしてそのクリソベルキャッツアイもこの水晶を優先して太陽と思うように魔術を掛けているので、いわばこの間に見えない糸が張られていると思ってください。また水晶は光をよく通すので、日中に使うとその効力が上がるので朝まで待ったのですよ」

「これを使えば安全に森から出れるの？」

「一応は。まぁ使い方などはまたその時に説明するので、その石はくれぐれも落とさないように気をつけて下さいね。さぁ、森に入りましょうか。いたずらに時を浪費しても得るものなんて少ないですからね」

森を進むこと一時間。森の中は枯葉をすっかり落とした木や所々に緑を残した木が並ぶだけで寂しいものだった。敷き詰められた枯葉の絨毯の上をちょこまかと走り回る動物の気配も感じられたが、やはり魔力的に特殊な場所は敬遠されがちなのか普通の森のそれとは活気が感じられなかった。まぁそのおかげで野犬や猪、熊といった動物にも遭わないので今はこの静けさに風情を見出すとしよう。

「先生、そういえば私、ヤドリギを見たことないんだけれどどんな木なの？」

「見たことない、というのはあり得ませんね」

「いや、本当だって。そんなことで嘘なんか付かないよ、もう」

そういって膨れているけれど、私が言ったことは事実だ。エヴァはヤドリギを見たことがないのではなく、これがヤドリギです、と見せてもらったことがないのだろう。だってここはヤドリギの森なのだ。

「木に残っている緑の葉っぱこそヤドリギの葉ですよ」

だからヤドリギが無いことなどあり得ない。

「え、あれって木の葉っぱじゃ……」

「ヤドリギは寄生性の常緑種植物です。主に鳥を媒介にして宿主となる樹木を増やしていきます。また、光合成を自力で行うものと、光合成も宿主に行ってもらうものとがいて前者が半寄生型、後者が

全寄生型といわれています。葉っぱや枝は一般にも薬草として普及していますね。また魔術、魔法的な物では昨日話したバルドル神の他にも、ドルイドたちはワインの樽などにも利用されているオークの木に寄生したヤドリギの下で儀式をしたり、ワラキアやトランシルヴァニアの方では幸運の源として信仰されていますね」

「……寄生、か」

「えぇ。寄生というと皆あまり良くないように思いますが、そうでもないんですよ？」

「どういうこと？」

「まず寄生というものは宿主がいないと成り立ちません。よって宿主を殺すようなことはあり得ない。そして常緑種であることから多くの動物が糧としての恩恵を得ています。またあのように団子状に密集しているので鳥が巣として利用することも多いですね。そして鳥が増えれば動植物が増えます。もちろん宿主に対して全く害がないということはありませんが、以上の点を考慮すると周辺の活性化に関して貢献していると私は考えますね」

「ふぅん、じゃああの木は？」

「私もあまり木に詳しくはないのですが。その木は幹の黒さから多分ブナ科の……」

そんな話をしながら暫く歩くと、泉に出た。水底は太陽の光をなにかが反射していてきらきらと光り、水面に反射している空に星を描いている。そしてその泉から少し距離を取って一本の奇妙な木が生えていた。恐らくどんなに高名な植物学者でも、この「隙間なく

蔦が巻き付いた」木の名前はわからないだろう。というか流石にこれは宿主が危ういのではないだろうか？

「これがミステルティンなの？」

「えぇ、そうで」

いや、何か違う。確かに目の前のヤドリギとは思えない蔦からは濃い魔力を感じるけれども、とても神話に登場したいわれる物には遠く及ばない。普通の魔法使いなら喜んでこの蔦を切り取るだろうけれど、ヴィーティングを持っている私にしてみればこれが神話級のものとは思えないのだ。

「エヴァ、少しあたりを散策してみましょう。私にはこれがミステルティンとは思えません。一時間、それだけ探してみましょう」

「それはいいけど、私にはどれが正解かわからないよ？」

「大丈夫です、神話級の物となればそれなりの格が違いますから。むしろ魔力の本質を見慣れている私よりもみつけやすいかもしれません」

「そんなものなんだ。じゃあ私はこの木の近くを探してみるね」

「お願いします。私は泉の近くを探してみます。もし何かを見つけたら触る前に呼んでください。危険があるとは聞いたことないですけど、それはこの蔦がミステルティンだった場合ですから」

エヴァに木の周辺の散策を任せ、私は泉へと向かう。泉を今度は遠視の魔法も使って隅々まで見てみる。魚や水草などは全くなく、

大きな水たまりのようだ。底には金貨や銀貨が埋もれている。先程光を反射していたのはこれだろう。そういえば与太話でここに財貨を投げ入れると願い事が叶うとかあったような……。よくわからない力を信じるとかそれ以前に情報の真偽くらい確かめないのだろうか？　まぁ私には関係のないことだけれど。それにしても特にこれといったものは見つからない。もしかしたら私が神器に関して敏感になっているだけなのだろうか？　でも、あの程度の物なら私の白手袋の方が基本性能が上だ。相性云々の関係から白手袋を超える杖は私には無いと思うけど、基本性能は上回って貰わないとわざわざ来た甲斐がない。

「先生！」

半ば諦めていると、木の裏の方から私を呼ぶ声がした。期待を隠しながら言ってみるとエヴァがじっと木の根元を見ている。訳を聞くとどうにもそこが気になるのだとか。私には蔦の濃い魔力しか見えないけれど、もしかしたらそれを隠れ蓑にしているのかもしれない。掘り起こしてみる価値はあるだろう。

「エヴァは私の後ろに。土よ、我が意に応えよ」

掘り起こしてみると、これまた奇妙な物が姿を現した。木の幹に絡んでいた蔦が、不自然に球形をなしているのだ。まるで何かを包み守る繭のようなそんな意思を感じる。

「それ、その中に何かある」

「蔦の魔力の所為で私にはよくわかりませんが、少し切り開いてみましょう」

袖口て手を突っ込んで亀裂を開き、ヴィーティングを取り出す。そういえば鞘を作ろう作ろうと思ったままあの手配書の所為で作れそびれたままだったなぁ。別に今の状態でも困らないし、手配書の件が無くても何か厄介事に巻き込まれそうだしこのままでもいいか。

――――シュッ

「火よ！」

蔦を切り払い、中が見えようかとしたその時何かが私の顔をめがけて飛んできた。障壁で受け止めて燃やしてしまったが、今のは……。

「先生、今のって」

「一瞬しか見えませんでしたが、恐らくは植物でしょう。どうやらあそこにはよっぽど大事な物があるようです。エヴァお手柄ですよ」

視線は真っすぐ根元を見たままエヴァに答える。蔦の繭には一筋の亀裂が走っており、そこから蔦のようなものがそれを押し広げ出てこようとしている。私も袖口から白い手袋を出し、ヴィーティングを地面に突き刺し臨戦態勢に入る。この異形を相手に剣で立ちまわれるほど私は精通していないし、それならば石の恩恵を受けれるところに置いておいて魔法で対抗した方がマシだ。

「エヴァ、貴女に構ってられる余裕はないかもしれません。援護はしなくていいです。その代わり自分の身を守っていてください」

「わ、私も」

「来ます！」

ミシミシと音を立て、繭の中が露わになる。そして実体として重みを感じるほどに濃厚な魔力が流れ出してきた。これだ、この与太話だとされてしまうほどの存在感。ミステルティンは確かにあった！　蔦の魔力はこの魔力に影響されたもので、この繭はこの魔力の存在を隠すためにあっただろう。目を細め、じっと繭の中を見ると細長い何かが中心にあるのが見えた。あれか、あれがミステルティンか。

――――シュアッ

「火よ　盾となれ」

再び伸びてくる蔦を火の壁で焼き切る。どうやら随分とお怒りのようだ、もし私が神話を編集する機会があったら「寝起きが悪い」と付け足しておこう。それにしても、どうしたものだろうか？　ヴィーティングの時は周囲の魔物さえ打倒せば手に入れるのは簡単だったけど、今度はミステルティン自体が相手だ。どうすれば屈服させられるのだろうか。神々はバルドルを賛美しあらゆるものを投げつけた。ヘズはロキに誘われミステルティンを投げつけた。その後、その後はどうなったんだ？　神々は悲しみヘズは殺され、一人の神が冥府に交渉に行く。しかし交渉は決裂しバルドルが生き返ることはなくなる。そして、そして、そして遺体は船に乗せられ愛馬と妻と一緒に火葬される。……なんだ、シンプルなことじゃないか。

――――シュアアアアアアシュッシュッシュアアアアア！！

繭から数えるのも億劫なほどの蔦が飛び出す。その先端は鋭く尖っておりまるで矢のようだった。視界を染め尽くすような緑色が魔

力を受けてゆらゆらと揺れている。

「先生！」

後ろからエヴァがなにやら悲痛な声で私を呼ぶが、生憎とその期待には応えられそうにないな。なにせ相手は魔力を宿しているが障壁もない只ちょっと自力で動く植物で、私がやるべきことは火葬することなのだから。右手を胸のあたりまで上げ、魔力を練る。これだけ多くの自由魔力が存在しているのだから、それを最大限利用するのが正しい魔法使いというものだろう。白手袋から少し自己魔力を出して周囲に私の場を作り上げる。今なら超一流の相手だってできそうだ。それくらい今この場は私の為にあった。

「火よ火よ火よ、地を這い敵を迎えよ」

右手に白い炎が宿る。蔦はなにやら危険を察したのか一斉に突っ込んできたが、私が展開している障壁は普段から熱と火で構成されているのでね。大人しく何もできずそこで灰になるがいい。

「鎧袖一色」

右手を左から右へと振りぬく。白い炎は地面を舐め、一瞬にして目の前に赤い火の海を作りだした。真っ赤なキャンバスに緑の線が現れては消えていく。生きたまま焼かれているのだから正しく必死に抵抗している。蔦をうならせ地面を叩き、砕き、穿つ。燃え盛る大地を鎮めようとしているが、その程度じゃこの炎は消せないな。魔力によって生まれた炎を物理的に消すのはそうそう容易いことじゃないからね。実はこの魔法は地上に居るものにしか効果はない。一歩引いたところから見ればこの赤い海が三人分くらいの高さまでしかないことに気付いただろう。この火の海から逃れたいなら空を

飛ぶのがベストだ。ということで、残念ながらわざわざ地下に隠すという判断をした自分たちを呪ってほしい。せっかくヤドリギは木の枝、つまりは頭上に根付くものなのに。尤も植物がそこまで高度な思考をするのか知らないけどね。

――――ギュアアアアアアアアアアアアアア

断末魔の叫びを残しながら死の踊りを舞う蔦。夥しい数だったそれもその多くは一瞬すら耐えることができなかったのか、今では片手の数で足りるほどしかその姿は見えない。そしてそれも一つ、また一つと姿を消し全てが消え去るまで十秒もかからなかった。今度は左手を上げて右から左へと振りぬく。そうすると視界を真っ赤に染めていた火の海は消え去り、その代わり辺りは白い灰の積もる大地になっていた。まさか対軍用の魔法を使う日が来るとは思わなかったけれど、日の目を見ない技術など意味がないのでよかったとしよう。この結果を見る限りやっぱり対軍用以外に使い道はなさそうだな。まぁ、目的通りの成果を上げたのだから構成はこれで確定にしよう。

「火よ」

ついでにダメ押しで火球を三十個ほど繭にぶつけるが、どうやら抵抗する気はもうないようだ。ここでなら後三セットは軽く行けそうだけれど、視界の端っこで山火事にならないように氷の魔法の射手で消火活動を行っているエヴァが可哀想なので自重しておこう。個人的には生木なんて滅多に燃えないのだから放っておいても良いと思うんだけれどね。

「はぁはぁ、んっはぁはぁ、先生、もう少し周りを、考えて下さい」
「まぁ、そんな固いことは良いじゃないですか。それよりもエヴァ、見て下さい」
「……先生って、思ったより大雑把なんだね」
「合理的と言いなさい、合理的と。ほら、あれが見えますか？」
木の根元に近づき中を確認してからエヴァを呼ぶ。最初はしっかりとしていた繭も、散々に暴れた蔦の所為で今では目の粗い籠のように穴だらけになっている。そしてその隙間から中を見ることができた。矢だ。矢といっても鏃などは付いておらず、その形に木が削られている物だった。魔力は感じるが、それは中に渦巻いているだけで先程のように攻撃はしてこない。恐らくあれは一種の試練のようなものだったのではないだろうか？
「ミステルティンには色々と説がありますが、どうやら矢というのが正解だったようですね。あの神話の中でもそのように描写されていたので当たり前といえばそうですが。もう害はなさそうですし、手に取って見ても大丈夫でしょう」
「本当に？」
怪訝そうな表情を浮かべた後、恐る恐るミステルティンに手を伸ばすエヴァ。害はないと言っているのに信用されてないものだ。もっともそんな一日二日で相手を信用する魔法使いなんて信用できないけれどね。それにしても、恐る恐る慎重に事を進めている後姿を見ると驚かしたくなるのは何故なのだろうか？

「よっいしょっと、やっと取れた。これがミステルティン……」

そう言って立ち上がり、手にした矢をしげしげと眺めるエヴァ。日の下で見てみるとその矢は緑がかっていて、折れずに曲がりそうなしなやかさがあった。

「こんなものが刺さるとは思えないなぁ」

「ミステルティンは未熟者、つまり芽吹いてからそう時を重ねていないヤドリギをロキが矢に加工したものですから。本来なら物を貫くほどの硬さはなくても当然でしょう」

「そういうものかぁ。そういえば色々と説があるって言っていたけど、他にどんな形があるの？」

「矢の次に多いのは投槍ですかね。古くから武器としてはありますし使い方は似たようなものですから。他にも変わり物としてはヤドリギの剣であるとかいうものもありましたか。もっともあれは神話を基にしたお話に出てくるものですから少し事情が異なりますが」

「ヤドリギの剣ねぇ……え？」

――――シュルシュルシュル

エヴァが相槌を打った次の瞬間だった。手にしっかりと握られていたはずのミステルティンが二つに裂けたかと思うと、明らかに見た目以上の蔦が何本も這い出てきた。右手に魔力を集中させていると、その蔦は互いに絡み合い、押し固め、終には一振りの剣になっていた。鍔は横に長く伸びていて、握りも拳二つ分ほどあり片手剣

としては長めだ。刃の長さは一般的なため、大きな十字架に見えなくもなかった。蔦はその造形に満足したのかまた沈黙している。エヴァは口を開けたまま呆然と手にしたその剣を見ていた。

「せ、先生。いま、いま矢が」

「変わりましたね。何故剣なのかはわかりませんが、もしかしたらミステルティンには剣と矢の二つの形状があったということでしょうか？　もしそうなら、これまたエヴァはお手柄ですよ」

「いや違うんだ、これはこの剣は」

「それにしても妙な形です。どことなく私のヴィーティングに似ていますが、これほど握りは長くはないですからね。もしかしたら神話に出てくる剣というものは全てこういう形なのかもしれませんね」

「先生！」

「どうしたんですか大声なんて出して」

「この剣は、私が思っていた通りの剣なんだ……」

なにやら驚天動地しているエヴァから話を聞いてみると、どうやらこういうことらしい。先ず『矢のミステルティン』を手に取るエヴァ。次に私の話を聞いてヤドリギの剣を想像するエヴァ。そして最後に『剣のミステルティン』を創造したエヴァ。作り上げたその剣はエヴァの想像したものと寸分違わぬ姿かたちなのだとか。

「ううむ、エヴァ今度は杖を想像してみてください。どんな形でもいいです」

「わかった」

――――シュルシュルシュル

また蔦が何本も出てきてその姿を変えていく。今度はエヴァの身長よりも長く、先端が鉤爪のように丸まっていた。その反対は杭のように尖っており槍としても使えそうだ。

「また想像通りの形ですか？」

「うん、できるだけ変わった形をと思って考えたから偶然ではないと思う」

「ならばこれはそういうものなのでしょう」

「そういうもの？」

「えぇ、そういうものです。使用者の意志に応じて姿を変える、もしかしたらロキの魔術のせいかもしれませんね。まぁ加工する手間も省けるし、相手に杖の形を悟らせないのは強みですからね。これからは命を預ける相手にもなるので大切にしなさい。さて、それじゃあそろそろ帰りましょうか。目的の物も手に入れましたし、もうここには得る物はないでしょう」

「え、でも先生の分は」

「私にはこの手袋がありますからね。他にもヴィーティングなどありますし。それよりもエヴァ、出発前に渡した石はちゃんと持っていますか？」

「うん、ちゃんとあるよ」

懐からクリソベルキャッツアイを取り出すエヴァ。そして一度目をつぶると、ミステルティンは腕輪の形になりそのままエヴァの右手首に嵌った。手の触感もなくなるとあらかじめ言っておいたので、落とさないようにと変形させたのだろう。本当に応用力の高い子供だ。この分だといずれか自分の為の魔法を編み出すだろう。全く以って優秀な生徒である。

「じゃあ、それを口に含んで下さい」

「え？」

「口の中に入れるんです。手で包みこんでも触感がなくなるのですから意味ないじゃないですか。口の中に入れて石が動くほうに歩くんですよ。石は真っすぐに水晶の方へ動きますから。決して石を呑みこんだり吐き出したりしてはダメですよ？　口に含みましたか？

それじゃあ足元には十分注意して行きましょうか。それとエヴァ、ミステルティンが矢から剣に変わった時のことですが、大口を開けるのはレディとしてどうかと思いますよ」

「〇×□△※？！」

エヴァが口に石を含んだのを確認してからレディの心得を説いてみる。もごもごしながら抗議するエヴァを笑顔で流し、私も石を口に含むと再び森へと入った。暗い、暗い帰り道。足元に十分な注意を払わないといけないため時間を掛けて進む。行きはよいよい帰りは恐い、まさか現実で体験するとは思ってもいなかったな。黙々と歩き続ける。時折吹く風に揺られて木の葉が舞い木々が揺れる音と、

自ら踏み締めた枯葉の音だけが耳朶を打つ。それにしても律儀に口を閉じて抗議したエヴァだったが、あれは森に入る前だったのだからいったん口から石を出せば済むことだったのに。素直なことは物事を習う上で大切なことだけれど、少しはずる賢くなってほしいものだ。このままじゃそのうち敵を前に口上を述べたりして罠に嵌るのが容易に想像できる。私のその予想が実現するか否かはエヴァ次第だけれど、私の生徒としてそんな間の抜けたことはして欲しくないなぁ。もし実現したら除籍にしようかな。

ep. 12　噂と私と模擬戦と人形師

土地が変われば気候が変わる、気候が変われば生態系が変わる、生態系が変われば人の文化が変わる。そして土地は文化の発達により変わっていく。文化の多様性に表裏はなく、どちらもその地域独自の技法、芸術、価値観が顕わになる。それは世界的ネットワークの無い時代には特に顕著な物だった。そしてその違いは時にしがらみや争いをを生みだす。

「不思議なゴーレム、ですか」

その話を聞いたのは奇しくも傭兵ギルドが経営する酒場であった。傭兵ギルドというのは大きく分けて戦争や山賊討伐などの他人数で動く場合に招集のかかるものと、賞金稼ぎや護衛など単独で依頼を受けるものとの二つに分けられる。後者には特に表も裏も癖のある者が集まることが多く、一部が賞金首となったり賞金首が加盟したりするのが常だった。そんなところにどうして私達がいられるのかというと、それは二人とも容姿を変えているからだ。私は幻術と、アンスールという『F』に似ているルーンを逆さにして刻んだブレスレットをつけて相手に聞こえる声も変えている。そしてエヴァは元より子供の容姿を載せて賞金首とするのは抵抗があったのか、手配書に「金髪の子供に化ける」としか書かれていなかったため大人のレディに変装している。まだ私のように魔法で口調を変えたりなどはできないようだが、自主的に容姿に見合う高圧的な口調を使うよう努めているらしい。

「あぁ、なんでも南の方に現れた魔法使いが使役してるんだとさ。直接見たことはねぇが、少しは信用できる筋からの情報だ。生憎と今は失策王のつけを挽回しようと躍起になっていて仕事が沢山あってな。暇があれば何人か集めて確かめようと思っていたんだが、まぁあっちも中々実入りがいい話だし仕方ねぇよ」

「そうですか。マスター！　エールを一杯とミートパイを！」

「へへっ、なかなか気前がいいじゃねぇか」

「そちらこそ。面白い情報を飯を奢るだけでいいなんて太っ腹ですね」

「なぁに、情報は生物だ。腐りきっちまう前に安くても誰かに売った方がいいってもんよ」

「確かに。情報を大事にする人は好きですよ」

「野郎に好かれてもパン屋の１２個目ほどの足しにもならねぇよ。どうせ言われるならそっちの美人な姉ちゃんに言われたいもんだな」

「えぇ！　私は……フ、フン、まぁ暇つぶし程度にはなりそうだな。れ、礼を言っておくぞ」

「ハハッ、中々気の強い姉ちゃんだ。オマケだ、なんでもそのゴーレムは臭いに敏感らしい。もし厄介なことになったら役立ててくれ」

「それは一体……」

「詳しいことは俺もしらねぇ。ただ、生き残った奴が必死に消臭の

魔法を唱え続けていたんだとよ」

「あい、お待たせ。他になんか注文があるなら今のうちにしてくれよ？」

「じゃあこれを」

「もうお代かい……ってあんたこれ銀貨じゃないか！　困るよ、お釣りなんかうちにはないよ」

「いえ、これは彼の分もです。本当に面白い情報ありがとうございました。私たちはこれで失礼しますがどうぞごゆっくり。行こうか、キティ」

「あ、あぁ。じゃあな」

ミートパイとエールを持ってきた店員にお代を渡して店を出る。雪化粧をした中を歩きながらさっき聞いた情報について考える。ゴーレム、ゴーレムねぇ。意外と手間暇かかるものだからあまり使い手はいないと聞いていたが、それでもいなくなったことではないということか。

「ねぇ、せん」

「どうしました、キティ？　寒いので早く宿に戻りましょう」

「そ、そうだなマクダウェル。さっさと帰るぞ」

なにも面白そうな話題がなければ日本に行ってみようと思っていたが、まずは近場からだ。日本にはメルと一緒に行くのも悪くない。

あぁそれにしても寒い。よくよく考えれば日本より北に位置するんだから寒いのは当たり前だけれど、宿に着いたら残りのマント全部に防寒を施そう。

「とりあえず結界はこれくらいでいいでしょう。全く認識されなくても困りますし」

あらかじめ取っておいた宿に入り簡単な認識阻害と侵入者を察知するための結界を張る。用心のしすぎかもしれないけれど、寝床に結界を張るのは習慣になっているからむしろ張らないと落ち着かない。マントを脱いで椅子にかけ、亀裂から大図書館をやめる際に餞別としてもらった魔法事典を取り出す。ゴーレム、実物を見たのはいつのことだっただろうか？　知識も錆びついているし、少し復習をしておくのがよいだろう。襲ってくると言っていたし、無知よりかは役に立つはずだ。

「ふぅ、もう先生で大丈夫だよね」

「えぇ。エヴァ、そろそろ慣れませんか？　それと人目のあるところではアタナシアと呼ぶようにと何度言ったら」

「それはわかっているけど……普段から名前で呼んだことないし、あんな高圧的な口調なんてお母様もしてなかったからちょっと抵抗が……」

そういってキティを見る。すらっとしたモデルのような体型に腰

まで届く艶やかな金髪をした美女がと困ったような目で私を見ている。キティというのはエヴァの偽名で、つまり私の目の前の麗しきレディはエヴァの魔法による幻術である。ちなみに私の偽名はアタナシアだ。何も考えなしにつけたのではなく、不死という意味の言葉をつけることで私がルーン魔術師であることを悟らせにくい狙いもある。不死の研究をしているのはもっぱら魔法使いだしね。ちなみに魔術の方でそういう研究はないかというと盛んではあるが、そのアプローチが個人個人で違うために誰も研究してないように思われている。私の知る中では魔族になろうとしたり、魂を取り出して物に定着するのを試みたり、中には高位竜族の生き血を飲もうとしている奴もいたかな。そういえば彼は元気だろうか……確か大図書館で私にしたり顔で「ちょっくら狩りに行ってくるよ。なぁに肉くらいは分けてやる。貴重な魔術師仲間だからな。おっとお前はまだ弟子だったっけか？修行頑張れよ！」と言い残したきり姿を見ていない。高位の竜族がその寿命の長さから数が少ないのだが、無事に見つけられたのだろうか……。と今は彼よりもゴーレムだった。

「先生、さっきの情報信じるの？」

「えぇ信じますよ。いや、情報の真偽はどうでもいいと思っていますが。噂になるということは元となるものがあるはずです。しかも今回はゴーレムなんて黴臭いと言われるような技法が出てきましたからね。何かが起こっているのは間違いないでしょう」

「ゴーレムって確か土で作った使い魔のことだよね？」

「そうです。古くからある魔法の一つで命令通りに動く人形だと思っていれば十分です。姿かたちは使用者が自由に決められることから昔は多くの用途に分けられていましたが、今では魔法具を媒介にした使い魔の召還やケット・シーやオゴジョ妖精を使役するのが一

般的になったことから本の中でしか見たことない人も多いと思います。私も学院の正門で一度見ただけですね」

「なんでそんなに廃れたの？　意思がないから？」

「まぁそれが一番の原因だと思いますよ。人形師ともなると意思の有無は関係なくなるのですが、その道を究めるには魔法なんて学ぶ暇はないですからね。魔法使いにとって欲しい助手というものは自分の意思を汲み取って効率的に動いてくれるパートナーですから」

「人形師？」

「人形師というのは人形を操る技法を修めている人たちのことです。操る際に魔力で編んだ不可視の糸を扱う人もいますが、魔法使いではありません。その道に長けた人は十の指で百の人形を自在に操るとか。私も一度だけその卵に出会いましたが、魔術師の目で見るまでは二人組だと思うほどでした」

「そんなにすごいの？」

「凄いです。しかも一切魔力を使わなくてもできるのですから普通の魔法使いでは気付く前に殺されるでしょうね。気配もなく、魔力がないから察知しにくく相手は自在に動いてくる。生物ではないので予備動作もあったものじゃありません。しかも安易に壊すと爆発したり毒液を放出したりしますし。まぁ彼らは好戦的な人たちではないので殺しあうことなんて滅多にないですが」

「その割には先生は随分と詳しいんだね。もしかして戦ったことあるの？」

「あるかないかで言われるとありますが、殺し合いではなく腕試しのようなものです」

「詳しく聞きたいな」

「あまり話したくないことですが、まぁいいでしょう。あれは……」

大図書館で司書として働き始めてから三年ほど経った。いつものようにカウンターの中で気になった本を読んでいると声かけられました。

「すいません、本を借りるのは初めてなんですが」

「大丈夫ですよ、こちらの契約書にサインをして下さい」

いつものように貸出契約書を引出しから取り出してカウンターに乗せ、視線を上げる。声を掛けてきたのはどこにでもいそうな青年で、彼に付き添うように後ろに雪のような真っ白な肌に青い目をした美しい女性がいた。

「この本は貸出できますね。期限は一週間となります。返却はこちらか、期限内でしたら外のボックスにお願いします。期限を一週間以上過ぎると当図書館の誇る精鋭、大図書館付属特殊返却係が向かうのでお気を付け下さい」

初めての利用者の為の説明をしながらも、チラチラと視線が女性に向かう。どうも彼女のことが気になるのだ。別に美しさに目を奪われたわけじゃないけれど。なにか、こう、ちぐはぐな違和感がどうしても気になった。そして青年の持ってきた本を貸出リストに追加するために視線を落とすと一つのことに気づく。気配が足りないのだ。カウンターの向かいには青年と付き添いの女性の二人がいるはずなのに気配は一つしか感じられなかった。

「ではどうぞ」

リストをつけ視線を上げると同時に魔術師として本質を見る目を使う。これは魔法でもなんでなく技術なので周りからは何かが変わったように見えない。魔術師の目で改めて女性を見ると、表面が魔力でコーティングされた物体であることが分かった。中に魔力は一切なく、発することもない。それはここに沢山ある、保護の魔法をかけた本と同じだった。

「わかりますか？」

青年の言葉に気づき目を向けると、頭を掻きながら苦笑している。どうやら珍しいものだったので注視していたようだ。さて、どう返事したものかなぁ。

「あぁそう言っても困りますよね。実は僕、人形師を目指していて……」

「人形師ですか？　それはまた珍しい。お会いするのは初めてですよ」

「人形師のこと知っているんですか！　いや、僕も知っている人に

は初めて会いました。もちろん人形を見抜かれたのも初めてです」

まさか人形師に出会うなんて思わなかった。人形師と言えばあの魔術でさえ一応教えられている学院で同好会も存在しない、空想扱いされている人達である。旧世界を知らない一般の人達からすれば言葉すら知らないだろう。それにこうも偶然出会うなんて、もしかしたら今夜はメルが料理を失敗するかもしれない。

「ハ～ル～君、交代の～時間～」

「あ、もうそんな時間ですか」

「お仕事終わりですか？　それなら少し話でもしませんか？　こんなこと滅多にないですし」

「な～に～ハル君、ナンパ～でもし～たの～？」

「いや、違いますってネイサさん。そうですね、私にとっても滅多にないことですし近くのカフェにでも行きましょうか。ではネイサさん、先に失礼しますね」

「ういういぃ～、また明日ね～」

「では行きましょうか」

カフェに入り奥の個室でいろんな話をした。人形師とはなにをするのか、魔法使いとは何ができるのか、団体はあるのか、人形は誰が作るのかなどお互い思いつく限りの質問を互いにして、答えられ

る範囲で答えた。私の魔術に関しては教えなかったし、彼の人形の仕組みや材料は教えてもらえなかった。けれどもとても貴重な意見交換の時間だった。

「あの、ひとつお願いがあるのですが……」

「何ですか？」

お互いの質問も尽き、武者修行をしているという彼の話を聞いているときだった。

「腕試しをしたいんですけど、ダメですか？」

腕試し、それはつまり模擬戦のお願いだった。元より武者修行をしているのだから当たり前のことだ。しかも今までの相手と違って目の前に人形師について多少知識のある人物がいる。私が彼の立場であっても申し込まないわけないだろうな。それに私にとっても人形師との戦いというものには興味がある。これを受けないという選択肢はないな。

「私も人形師と一度戦ってみたかったんです。ちょっと待って下さい、今場所を使えるか聞いてみますから」

了承の返事をして、念話でメルに事の次第を話す。すると今から玄関をはいると別の世界に飛ぶように設定してくれた。メルも人形師会うのは久しぶりらしく、質が上がったのか衰退したのか見届けたいらしい。青年に場所の当てができたことを伝え、店を出る。人形の装備を変えたりする時間が彼には必要で、私も魔術を迂闊に見せないように準備が必要だったから次に会うのは３０分後だ。知らないうちに釣りあがっていた唇を見て、私は魔術師なんだぁと実感

した。

「じゃあルールを決めましょう。終わるのは僕の人形が壊れた時、僕を直接狙わないということで。思いっきりやっていいですよ、壊れた人形を治すのも人形師としての修行の一環ですから」

「すぐに壊れないで下さいよ？　なにせ人形師と勝負するのは初めてなんで手加減できませんから」

「僕は魔法使いは何回も相手しているので安心して下さい。魔法使いの弟子さん」

「手厳しいですね、人形師の卵さん！」

言いきると同時に魔法の射手を無詠唱で三本打ちこみ遠視の魔法で目を上空に置く。普段は火球を使うのだが、これを見せるのはまだ早い。せっかく普通の魔法使いと思っていてくれてうるのだから盛大に騙してあげないと。

「結構、実践慣れしていますね！」

ほとんど動かずに矢を避ける人形。ちなみに彼には私がさっき作った防御結界のお札を渡してある。本来なら速やかに人形師を狙うのが得策だが、今回は「あくまで」模擬戦なので特別ルールだ。

「こちらからも行きますよ」

彼が右腕をわずかに上げたかと思うと、人形が突っ込んできた。その速さは魔法の射手にも負けない程度で、一体あんなけの動きの

どこにそんな力があったのか見当もつかない。

「人形相手に近づかれるのは得策ではないですね。魔法の射手・閃」

右手を払いながら改造した魔法の射手を放つ。といってもベースとなる魔法が魔法の射手であるというだけで、見た目は斬撃だ。威力こそ低いが横に範囲が広く、精密な動きをするために複雑な機構をしているであろう人形の心臓部の胴体にダメージを与えるには適しているだろう。

「ふふっ」

幽かに聞こえた笑い声と共に彼の左手が微かに動くと目の前で人形が上下真っ二つになった。勿論私の魔法によるものではない。それほどの威力なんてあるわけがないし、なにより未だしっかりとこちらを狙っている。つまりこれは計算された動きだ。

「そんなギミックありですか！」

魔法の射手を放つが的は小さく、そして増えたために狙いは粗くなりあっさりと避けられる。空に跳ね上がり、地を滑り、時には螺旋を描く様はとても人の手によって繰られた動きとは思えなかった。近づけまいと抵抗するが、そうして距離はあっさりと詰められた。上半身は綺麗な笑みを浮かべながらいつの間にか握り締めた刃物を振りおろし、下半身はシンプルながら品のある皮靴から串刺しにしようと針を出している。これはちょっと避けるほどの余裕はないかなぁ……。

「くっ」

突貫で障壁を作るが、それはあっさり突破された。もう見事なぐらいあっさりと割れた。仕方なしに常時展開している障壁で受け止めるが、相当な速度を持つ物体がぶつかって来たのだ。障壁自体にダメージは余りないが、衝撃が襲ってくる。身体強化さえできればこんなもの片手で払えるのに。いや、今はそんなことを考えている場合じゃない。

「なかなか硬い障壁ですね。それに普通の魔力障壁とは何か違う様な気が。もしかして切り札ですか？」

涼しい顔で呑気に問いかける青年。今は手元が見えないが、人形は障壁を削るように何度も何度も同じ場所の獲物を叩きつけてくる。そのたびに障壁が軋み、その部分の魔力が削られているところを見ると普通の武器ではないようだ。

「そちらこそ、人形はギミックが命なんじゃないのですか？　もう幾つか出してしまっていますが」

両方の掌に魔法の射手を収束させ人形のそれぞれに押し付ける。大仰な光と風が起き、人形は吹き飛ばされるように距離を取るが、やはり耐魔法処理も当然してあるのか衣服に傷すらついていない。まぁ、私もそれが目的ではないし見た目だけわざと派手にしたので予定調和だけどね。

「損傷なし……もしかしてインドア派ですか？　ダメですよ、技術は使ってこそ進歩するんですから」

「アウトドア派の魔法使いなんて変わり者しかいませんよ」

「十分な変わり者のくせに。僕みたいに武者修行してみませんか？」

和やかに会話しているが、その間も人形が舞い魔力が奔る。すでに地面には大小様々なクレーターができており、一秒一秒その数を増やしている。私が使っているのは相変わらず魔法の射手だけだが、青年も大きなアクションはなくきっかけを待っている。心臓が高鳴り、心が震える。今か、まだ早い、あと少し、それじゃ遅い、見極めるのは刹那だ。遅いも早いもなく、ただただ天地が逆回るような一瞬のその時だけを待つだけだ。

――――コンッ

「魔法の射手・連弾・光の５０矢！」

一歩後ろに飛び、弾幕を張る。状況は更新された、思考は止めるな、目を活かせ、全ての行為には前触れがあり全ての行為には影響がある。さすがに面で張られた魔法の射手をすり抜けることはできず、人形は大きく上に回避した。これで少しは時間ができる。

「リク・ラク　ラ・ラック　ライラック　契約に従い　我に従え
炎の覇王　来たれ浄化の炎　燃え盛る大剣　逆れよ　ソドムを焼きし火と硫黄　罪ありし者を　死の塵に」

「その呪文は……！」

先ほどよりもさらに早く人形が突っ込んでくる。さすが魔法使いを倒してきた人形師だ。学校や文献に残っている魔法の呪文はさすがに知っているか。でも、私は早口には自信があるのでね。

「燃える天空！」

炎をもって全てを灰にする火の上位古代語魔法だ。使える物も少なく、十全にこの魔法の力を引き出せるのはアリアドネー騎士団でも一握りしかいないらしい。もちろん私は無理だ。本来の範囲を再現するには魔力が足りないため、狭く自分なりにカスタマイズしている。しかし、そのために威力は落ちておらず、『今の』私にとっての最高威力の魔法だ。

「これは予想……内ですよ」

炎の向こうから青年の声がしたかと思うと、人形の上半身が炎の壁を突き破ってきた。先ほどとは違い、白い布を身に纏い赤い穂先の槍を右手に持っている。

「ははは……私は予想していませんでしたよ」

さらに距離を詰め槍を振るう人形。私もまた無詠唱で障壁を張るが、今度はそれを「すり抜けて」穂先が私に迫る。

「チッ！」

右足を引き、体を開いて体を逸らす。槍は私の首をかすめ、視界の端で髪が舞うのが見えた。今度は常時展開の障壁すら「すり抜けて」きた。あの槍はかなり危険だ。

「まだまだですよ」

人形はそのまま一回転してもう一度槍を振るう。先ほどよりも深い。まだ炎の壁は健在だ。一体どうしてそこまで的確なのか。もしかしたら人形の目とリンクしているのかもしれない。もしそうだとしても、私は何も驚かないな。引いた右足に力を入れて、そこを軸

にするように反転する。チッと風を切る音が耳朶を打ち、なんとか避けれたことを確認する。

「チェック」

反転して最初に目に入ったのは、地面から突き出た鈍色だった。わずかに白色も見える。それに遠視の目が上半身の人形がさらに一回転したのを伝えてくる。チェック、か。仕方ないね。

――――ガキッ

反転した勢いそのままに左手を鈍色に押し付け反らし、右手で槍の穂先をつかむ。右手が焼けるように熱いが、もうそんなことはどうでもいい。あぁ、できれば使いたくなかった。

「火よ火よ火よ、始まりの英知をここに示せ　業火絢爛」

詠唱と共に眩白の火柱が顕現する。突然の炎に周囲の空気が尽き、風も空間も巻き込んで全てを空へと還す。人形は一度体を捩るが、瞬きの間にその身を空へと還した。完敗だ。完全無欠に抜かりなく負けた。魔法使いとしても私はまだまだ未熟なのか。ちょっと人とは違うから、自分は魔術も使えるからと驕っていたか。これはまた一からやり直しだな。

「いや、凄いですね今の。見たこともないし、聞いたこともない呪文でしたよ」

「それは私のセリフです。なんですか障壁を破るのでも、無効化するのでもなくすり抜けるって。あんなふざけた代物聞いたことないですよ。それにあの白い布も。確かに不完全な魔法ですが、傷一つ

なく突破させるほど温くはないはずですが」

「まぁ切り札ですよ。世界は広いんです。どうですか？　武者修行いいですよ？」

「お互い詐欺師のトランプですね。……いつか旅の途中で出会ったら今度は互いに全力を出しましょう」

「えぇ、その時は全てを賭して」

「そして彼とは別れ、私はより修行に力を入れなおしました。いや、驕りというものは自分では自覚できないものだと思い知らされましたよ」

長い思い出話の後、紅茶を一口飲む。少々長話をしたために喉元を通る紅茶がやけに美味しい。空腹は最高の調味料というけれど、それは飲み物は同じということだ。

「えーと、幾つか質問があるんだけど」

「どうぞ、何が聞きたいのですか？」

「その人形師の名前は？」

ふむ、彼の名前か。確か最初にあった時は……。

「そういえばお互いに自己紹介していませんね」

「えっ喫茶店で色々話をしたんじゃ……」

「名前なんてどうでもいい情報ですからね。私は人形師を、彼は人形師を知る魔法使いを求めていただけですし。最後の方には、ほらよく言う心が通じ合う様な、そんな感じでまた名前とかどうでもよくなりましたし」

「……」

なんか呆れた目でエヴァに見られるが、名前なんて言われるまで本当に気付かなかった。それくらいどうでもいいことなのだ。会えば分かる。何の根拠もないが、幾ら歳を取り面影がなくなろうとも彼は私を、私は彼を見分けられるだろう。まるで運命を信じている恋人同士のようだが、ある意味それに近い気がする。

「じゃあ次の質問。リクなんたらって先生の始動キー？」

「えぇ、『普通の』魔法使いには必要な物ですから。もっとも今はたいてい魔法を使うときは、相手を確実に殺す時なので使う機会はありませんけどね。気に入ったのならあげますよ？」

「……少し考えさせて。それと最後の質問、これから行くそこに人形師いると思う？」

「それは着いてからのお楽しみということで。ほら、そろそろ寝ますよ」

なにやらぐるぐる考え込んでいるエヴァの頭を撫でる。不思議なゴーレム。それが人形師と関係あるのかどうかは私にはわからない。でもこんな時に彼の話をしたのは、恐らく私が心のどこかで関係を見出したのだろう。明日は早めに起きて準備をしないといけないな。

ep. 13　正体と私と卒業と別れ

宿をチェックアウトし南に向かうこと三日。あれから聞き込みをした結果、この辺りに例の魔法使いが隠れ住んでいる集落があるらしい。この時期ともなると農作業をする農民もおらず、それに伴い街道の人通りは少ないものだった。時折すれ違う旅人と情報交換しながら集落を目指す。情報ネットワークもない今の時代ではこういった情報のやり取りはとても貴重な物だ。

「そろそろ目印となる教会が見えてくるはずです。エヴァ、見えませんか？」

「ん……このまま道沿いに行ったところに十字架が見える」

「集落は実在する、と」

これはもしかしたらゴーレムの噂も本当かもしれない。ついでに人形師がいてくれればそれはそれで喜ぶべきことなんだけれど、エヴァは……。

「ねぇ、人形師はいないよね？　大丈夫だよね？」

「何事も可能性を否定することはできませんが、たとえ人形師がいたとしてもいきなり攻撃されたりはしませんから。多分」

「多分？！　多分なの？！」

「じゃあ、恐らく」

「変わらないよ！」

昨日の話で先生である私が完敗したことが余程衝撃的だったのか、人形師をとても怖がっているのだ。見習いで私が負けたのだから、一人前の人形師のはどれほど強いのかと想像して、夢にも出てきたのだとか。おかげで翌日の朝は後ろから羽交い絞めされることで私は目が覚めたのだが、エヴァには先生が怖い話をするからと怒られる羽目になった。うぅむ、理不尽だ。

エヴァに人形師は恐くないと、無闇矢鱈に恐れて思考を止める方が恐ろしいと説きながら進むと、肉眼でも十字架が見えてきた。教会の高さは六メートルほどだろうか、その天辺に十字架の屋根飾りがついている。あたりをよく見回すと、藪に隠れるようにして看板があった。

「↑　サン　マ　トロ」

……文字が擦り切れてしまって読めない部分があるが、なにか作為的な物を感じる。そういえば秋刀魚もマグロもまだ食べてないなぁ。アリアドネーでそんなっぽい味をした魚は食べたけれど、ここじゃあ魚といったら川魚が普通だし。よし、これが終わったら日本に行こう。メルも連れて絶対に行こう。

「先生、この先に……ってなに涎垂らしてるんですか」

「ハッ、すいませんすいません。つい故郷の味を思い出してしまいました」

「いきなり呆けるから何事かと思ったよ。それより、行くの？」

「行かない道理がないじゃないですか。さぁ蛇が出るか鬼が出るかお待ちかねの答え合わせの時間です」

「それだったらいいけど、人形師は……」

看板に従い歩くと、遠くから見えていた教会と古い石造りの家々に大きな畑や井戸、それと物見が見えてきた。勿論建物だけではなく、井戸端で洗い物や水汲みをする人達や畑と耕している男、ヤギを散歩させている少年などがいた。これは少し警戒度を上げた方がいいかもしれない。

「あら、旅のお方？」

こちらに気づいた村人が声を掛けてきた。年のころは２０後半くらいだろうか。大人の女性としての色香と、働く女性の溌剌さがこの女性を強く引き立たせている。

「えぇ、教会の十字架が見えたので主に祈りをささげようかと」

「それはいいことです。この通り何もない小さな村ですがゆっくりしていってください」

「ありがとうございます。キティ、行きましょうか」

いきなり呼び名が変わったことに戸惑っているキティの手を取り、村の奥の教会へと足を急がせる。私の行動からなにかを読み取ったのかエヴァも素直についてきてくれた。教会はこれまた簡素な石造りの物で、扉にすこし意匠が施されているだけだった。まぁ田舎の教会なんてその地域の集会場としての面が強いのものだし、奢侈を

恥じることは普通のことだからね。もっとも都市部に行けばそんなこと知らずと神官どもが闊歩し、政治ごっこに精を出しているけどね。エヴァの手を引いてマリア像の下まで歩いていく。教会の中には長椅子がいくつも置いてあるが、今は誰もいなかった。

「おや、旅のお方ですか？」

「えぇ、安全な旅をできたことに主への感謝をと立ち寄らせていただきました」

「それはいいことです。なにか御用向きがあればなんなりとおっしゃって下さい」

そういって神父は奥へと帰って行った。膝をつく私の隣で同じようにしているエヴァが小声で話しかけてくる。

「アタナシア、どう思う？」

「何がいるのか、それはまだわかりません。ただ一つこの村は明らかに魔法使い、ないしは魔術師がいます。キティも警戒はしておいて下さい。無闇に魔法を使うのは相手を刺激しますので、幻術や認識阻害はかけないように。それでも善後策として呼び名を変えます」

「わかった。この姿で口調を変えるのは慣れていないけれど、頑張る」

暫く黙とうを捧げ、教会を出る。空はいつの間にか鈍色に染まっていて、今すぐにでも零れ落ちてきそうだった。これはどうしたものか。この小さい村では宿屋なんて勿論あるわけがない。ここの神父に一晩泊らせてもらえるか交渉をしてみるか。

「あぁ、旅人さん。よかった、雨が降り出す前に会えて」

「貴女は先程の……」

「いや、いきなり空模様が怪しくなりましたから宿に困ってないかと思いまして。小さな村ですし、この教会にも泊まれる部屋はないですからね」

「そうなのですか？　それでは神父様は？」

「神父様は、普段は裏手にある家で寝泊りをしています。なんでも神の家に住むなんて畏れ多い。マリア様にも一人になりたい時が必要でしょうとのことで」

「それはまた独特な考え方で。いえ、別に異端と思っているわけではないですよ」

「風変わりなのはみんな分かっていますのでお気になさらずに。それで、もしよろしければ私の家へ来ませんか？　一応この村の長の家なので客室もありますし、主人もぜひ会ってみたいと」

「どうする、アタナシア。私はお前に従うぞ」

小さな子供が尊大な口調なことに驚いたのか女性が目を少し見開くが、特に言及することはなかった。渡りに船だが石橋を叩くかどうか、いや虎穴に入らずんばなんとやらか。恐らく何者かが書いたストーリーだと思うが、狙いがわからない今は綺麗に踊った方が安全か。

「ではお言葉に甘えましょう、いいですねキティ」

「構わん」

「では案内をお願いできますか？」

「えぇ、私の後についてきて下さい」

女性の後について行く。畑で働いていた男たちも農具をしまい、森へ狩猟に行っていたのか犬を連れた若い男達の姿も見える。得物を背負っている人と、捕えた獲物を担いでいる人がいることからこの村では狩人は協力して狩猟を行うようだ。鳥やウサギなど種類や獲物の大きさは様々だが、大猟といっていいだろう。男達の顔にも自然と笑みが溢れている。

「小さな村ですから皆協力して生活しているのですよ。村というより大家族といった方が近いかもしれません。若い男で狩りの才能があるものは狩人を、手先が器用な物は罠を張ったり器具の手入れをしたり、土いじりが好きな物は畑をいじり、子供はヤギ番に精を出し、女は家事をと分担しています。他にも今は村にはいませんが、商才ある者は都市部へ行き物売りをして、そのお金で村では手に入らない薬などを買ってきます」

「珍しいですね。こんな村は初めて見ました」

「ふふっ、ここに来る人達はみなさんそうおっしゃいますね。なんでも欲がないとか」

「あぁ、どんな人間でも欲というものは必ずあるものだ。今の村人だけならまだ分かるが、都市部に行きお金を手にする者もいるとい

うのにこの状態は珍しいだろう」

「毎日生きるだけでこんなにも楽しいというのに、他の村では苦労なさっているんですねぇ。あ、ここです」

女性の家は入り口と教会の間くらいの場所にあった。たしかに他の家より一回りほど大きく、扉の近くに長の印なのか赤い布が掲げられている。曇り空の所為でいつもよりも暗いためか既に灯りをつけているらしく、窓から光が漏れている。

「お邪魔します」

「はい、どうぞ。今なにか飲み物を入れてきますので、リビングで待っていて下さい」

そういって女性は左を指さし、自身は右手の方へ歩いて行った。恐らくあちらがキッチンなのだろう。指示された方にいくと、一人の老人が椅子に座り本を読んでいた。こちらに気付いたのか視線を上げる。

「ん？　おぉ、君らが旅のお方かな？　ようこそサンチマガストロへ。何もない場所だが他にはないくつろぎがある場所。私はアーロン、一応この村の代表を務めておる」

「今日はお招きありがとうございます。私はアタナシア、こっちがキティです。危うく濡れ鼠になるところでした」

「ハハハッ、本当に急だったからの。なに、そんな畏まらないでくれ。旅の途中で立ち寄る人なんて珍しくてね、少し旅の話でも聞ければと。まぁ座りなさい、いま家内がなにか持ってくるから」

じっと私の顔を見詰めたまま向かいの席を勧める老人。欲がないとは言え、たまには外の話も聞きたいのだろう。新しい本を買う様な気分なのかもしれない。それか私たちの監視か。

「この歳になると自分の想像の中でしか自由に動けなくてな。じゃから少しでも世界を広げようと本を読むのじゃが、体験談より面白いものはない。なんでもいいから何か聞かせてくれぬか？」

「そうですね……。ではドラゴンを狩りに行った友人の話でも」

「おおう、魔法と幻想の話は幾つになっても心躍るものじゃ。では頼もうかの」

「あれは確か2，3年前の話でしょうか……」

それから私がそれとなくぼかした魔法の話をしたり、先程の女性がこの老人の家内だと知って驚いたり、先程若い男達が獲ってきたウサギを使った夕食をごちそうになったりして夜は更けていった。老人は私の話全てに驚き、悩み、喜び、焦り、怒り、そして楽しんだ。話し手冥利に尽きるお客さんといえるだろう。

「ふぁあ」

「あなた、そろそろ」

「おお、もうこんな時間か。すまんすまん、年甲斐もなく夢中になってしまった。旅の疲れも溜まっているでしょう。部屋を用意しといたのでゆっくり休んでいきなさい」

「私も少し話過ぎましたかね、なにぶん人に話すのは久しぶりだったもので」

「なに、楽しい時はすぐに過ぎる物じゃ。それを永遠にするには人の生は短すぎる。今日はいつもより楽しい時間を過ごせた。部屋は階段を上がったところの突き当たりの部屋じゃ」

「何から何までありがとうございます。キティ、いこうか？」

「ん」

もう一度夫妻に礼を言い、欠伸をしたエヴァの手を取り部屋へ向かう。部屋には二人掛けのテーブルとクローゼットに化粧台、それと大きめなベットが一つあった。これはすごい、宿の中でも高級な部類に入る豪華さだな。エヴァはてとてととベッドに近づき、一度枕を叩くと潜り込んだ。私も外套を椅子にかけ、反対側へ入る。そして内緒話をするかのように向かい合って目を閉じた。

（エヴァ、聞こえますか？）

（うん。これって盗聴とか大丈夫なの？）

（えぇ、その心配はありません。魔力で気付かれることもないでしょう）

（全く、話過ぎだよ先生は。私が欠伸出さなきゃ朝まで続いていたと思うよ）

（あははは、それに関してはいい訳もないですね）

そう、勿論欠伸なんて嘘っぱちだ。夜の眷族の頂点に座する真祖の吸血鬼が夜に眠いわけがない。まぁ最近は私に合わせるために朝方になっているため、夜に少しは眠気を感じるらしい。とにかく、欠伸をするほど眠くなるはずはないのだ。

（それで先生、どう思う？　やっぱりゴーレムがいそう？）

（幾つか気になる点はありましたね。でもゴーレムだと確信することはできません）

（そうなの？　私には全然わからなかったけれど）

（例えば先程の老人ですが）

「もう寝たでしょうか？」

「わからん。どうせ途中で目を覚ますのじゃからどちらでも変わらないだろうて」

「そうですね」

（先生！）

（しっ、音を立てずに。この声は夫妻のようですね。エヴァ、杖の準備はいいですか？）

（大丈夫、いつでもいける）

（私よりも先に絶対に魔法を使わないこと。魔法を使うのは最終手段です）

（わかった）

――――キィィ

扉の軋む音がして、誰かの入ってくる気配がする。息遣いは二つ、一人は気配を殺しており、もう一人はマントを掛けた椅子の方へと向かったようだ。まだ攻撃をするのは早い、狙いは一体何だ？

「あなた、紋章はあった？」

不意に後ろから声がする。気配がなかったのは女性の方か、それにしても紋章とは何のことだろう？

「いや、見当たらないな。今まで来たやつらはこれ見よがしにつけていたのじゃが。もしかしたら無関係なのかもしれん」

「でもさっきの話……あれは魔法のお話でしょう？」

「そうじゃなぁ……」

紋章？　今までの奴らはつけていた、それを探しているのか？会ってから今まで話の中でその人たちの話は一度も出てきていない。取るに足らないことだと思っていたが、もしかして「来ていないこと」になっているのか？

「もしかしたら服につけているのかも」

そう言って毛布の端が持ち上がる。そこから入り込んでくる風と彼女の冷たい手が鼓動を速めた。だんだん毛布がはがされていく、

これ異常とぼけることはできないだろう。

「光よ、我らに揺り籠を」

毛布が全て剥ぎ取られる直前に跳ね起き、エヴァを抱えて窓を破る。雲はすでに晴れており、銀色とも金色ともつかない幽玄な月明かりが私たちを照らしている。亀裂から予備のマントと白手袋をつけて身構える。エヴァもミステルティンに魔力を巡らせ、目を輝かせている。

「アタナシア、どう見る？」

「彼らの独断、とは思えないですね。今まで来た人がいて、それを隠すというなら村全体でしなければ不可能なことです。噂をすれば」

正面の家から夫妻が出てくる。周りの家からも住人がそれぞれ手にフォークや手斧などをもってぞろぞろ出てきた。服装はまちまちだが、私達に敵意を持っていることは共通しているようだ。

「おやおや、これは一体どうなされたのですか？」

教会の方から神父もでてきた。手には何も持っておらず、疑問を放っているがこの村の住人であることには違いない。

「あぁ、神父様。先程その二人は魔法を使いました」

そう夫人が言うと、他の住民はざわつき手に力をより一層込めている。だが、その目には敵対心以外のなにかがあるように思えた。

「本当ですか？」

「はい、神父様。聞いたことのないものでしたが確かに使っておりました」

今度は老人が答える。じりじりと手に持った武器を持ちながら住民が私達を包囲し始めた。やはりそうだ、この住民たちは敵対心以外にもう一つ心に秘めたものがある。それは――――恐怖だ。

「こいつらの目……私のよく知っている目だ」

エヴァも気付いたらしい。今まで迫害され、恐れられ、そしてそれらを殺してきたエヴァだ。彼女がそういうなら間違いはないだろう。

「旅のお方、一つ尋ねてもよろしいですか？」

神父がこちらを向きそう尋ねる。距離は十メートルはあるだろう。この距離なら魔法でも避けられるな。

「こちらからの質問にも答えてくれるのなら」

「神の名のもとに、できる限り善処しましょう。先ずは私からの質問です、君達は英王教会ですか？」

「違います」

英王教会……イングランドに古くからある魔法教会の一つだ。たしかウェールズの辺りにあった気がする。ヨーロッパにおいて最も古い魔法教会であるらしく、その一員であることには誇りと名誉があるらしい。私が嫌いな団体の一つだ。なにせ私に賞金を掛けた張

本人だし。

「嘘だ！」

「信用ならねぇ！」

「やっちまえ！」

前後左右、３６０度から声が上がる。それは怒りに狂っているようにも、己の中の恐怖を打ち消そうと足掻くようにも見えた。緊張が高まる。エヴァは既に準備万端といった様子で、足元の草が凍りついている。これ以上の間を取ることはできないだろう。少々賭けになるが一気に詰めるしかない。

「次は私の質問です。あのゴーレムの作者は誰ですか？」

周囲から音が消える。何人かが青ざめるのがこの暗い中でもわかった。他の住人はずいと近づいてくる。近づく中には夫人の姿もあった。追い詰め過ぎたか。

「そこまでだ」

一番近くの男に狙いをつけていた時、そう誰かが制止を呼び掛けた。するとまるで時を止めたかのように、近づいてきた者達の動きが止まった。少しの動きもない。そして表情も消えている。声のした方を向くと、同じように立ち尽くすその後ろから一人の男が出てきた。マントのフードを被っているため容姿はわからない。声の質からすると私と同じか少し上といったところだろうか。

「目的はなんだ」

「特には。ただ噂で聞いたもので実物を見に来ただけです」

「何故わかった」

「正直言うと、確信は持てませんでした。けれど休耕期にも関わらず畑を耕す男、冬の水に手を浸しても微動だにしない女性、そして気配を完全に殺せるくせに息遣いを抑えられない夫人。それと私は一度同じようなモノと出会っていましてね」

「それは興味深い。もう一度聞く、お前は英王教会の手の者か？」

「違います。というか魔法使いだからといって一緒にしないでください。むしろ私は彼らに狙われていますよ」

そういって白手袋を男によく見えるように掲げる。私の手配書が出てからそこそこ経つので見たことはあるだろう。私の知る限りでは白手袋の魔法使いなんて私以外にはおらず、手配書の影響で増えたとも聞いたことないから。

「あ、あんたもしかして手配書の！」

青ざめていた若い男が声を上げる。まるで信じられないといった目で見てくるが、やめてくれないだろうか。私から積極的に行動はしたことないのだけれどなぁ。若い男の声を聞いた他の住人が次々と得物を下ろし、あちこちで「そういえば」や「白の……」などのひそひそ声がする。というか本人が目の前に居るのだからそういうのやめてほしいなぁ。

「賞金首か、それならば間違いなく英王教会の者ではないな」

男はそう言ってフードを取ると、怜悧な目と熱を放つかのような赤い髪が月明かりの中に煌めいた。はっきり言って美形だ。年のころは私より上だろう。だが年老いたというより威厳があると感じさせるほどの存在感を放っている。

「先に自己紹介と行こう。我が名はアルスター。人は私をこう呼ぶ、『境界亡き人形師』と」

人形師、アルスターの一声により住人はそれぞれの家へと帰って行った。その顔にはまだ私に対する疑いがあったが、余程この男を信頼しているのか反対意見もなく皆が従った。そして私達はアルスターに連れられ教会の裏手の家に入る。そこは家というより工房といったそれだった。ちなみに、エヴァには彼は害はないからと言い聞かせたのだが、人形師という言葉に囚われているのかガチガチになっている。

「彼女は大丈夫なのか？」

「お気遣いありがとうございます。ほら、キティ。少しは落ち着きなさい」

「いや、だ、だって人形師って。だって、せんせ、あっいや、アタナシア」

はぁ、ダメだこりゃ。しばらくそっとしといた方がいいだろう。

「なんだ、君達は師弟なのか」

「そんな大したものでもないですよ。ただ偶然に出会って、それから真似事をしているだけです。私が直接教えたものなんて野宿の仕方や裁縫の仕方の方が多いですよ」

「ほう、君は裁縫もできるのか。……ところでなんで彼女はそんなに我を恐れているのだ？」

「あぁ、それは恐らく私が人形師と模擬戦をした話をしたからだと」

「それはまた興味深い。我ら人形師は魔法使いよりもさらに数は少ないというのに、しかも戦闘ではなく模擬戦とは。その話、聞かせてもらってもよいか？」

こうしてまた彼の話をすることになった。内容は私が完敗したというものだから進んで話したい事柄ではないのだけどなぁ。というか流石に言えなかったけれど、エヴァが怖がっているのはこの環境にも問題があると思う。人のそれと何も変わらないほど精巧な生首がこちらを見つめていたり、骨格を作る際に参考になるのであろう骸骨がいたりするのだから。

「ふむ、その青年とはもしやローランか？」

「ローラン？　それが彼の名前ですか？」

「名前も知らずに再戦しようとしていたのか。いや、戦いの場においてそういうことはどうでもいいこと、か。少し前に武者修行の一環で魔法世界に入り、そこで好敵手を見つけたと騒いでる男がいてな。その男の名前がローランだ。ローラという女性型の人形を繰るのも一致する。あぁ、ちなみに彼は先月に晴れて人形師となったぞ」

「ローラン、ローラン、ローラン……そうですか、もし彼に会うことがあればハルキは弟子を卒業したと伝えて下さい」

「それがお前の名前か。いいのか？　我も知ってしまったぞ？　まぁ伝言は確かに伝えよう」

「構いません、敵対する気も理由も今はないですしね。では伝言はお願いします。それでついでといっては何ですが、英王教会とは何かあったのですか？」

何度も口に出し。彼の名前を頭に刻む。ローラン、今度会うのはいつだろうか？　そして私が一人前となったと聞いたら彼はどう思うだろうか？　そんなことを考えながらアルスターに伝言を頼み、ついでに一つ気になっていたことを尋ねる。

「それを聞いて何とする」

「何も」

「……よかろう。仲裁やら話し合いとか言い出したら刻んで人形の材料にしてやろうと思ったが、お前は中々身の程を知っているな」

「私は普通の人間ですからね。まぁ大体の想像はついていますが、英王教会は何をしてきたのですか？」

「ククッ、お前もあの連中が嫌いと見える。そうだな、話すには我のことも話さないといけないのだが……」

そういって顎に手をやり、考え込むアルスター。仲裁なんて私に

関係のないところで敵意を買う真似なんてしたくないに決っている。立派な魔法使いを目指す人達からすれば、喜んで関わるだろうけれど私は魔術師だからね。

神父さんが入れた紅茶を飲みながら、周りの人形をみる。よく見れば関節が球体の人形や、ビスクドールと呼ばれる一般的な西洋人形、他にもマリオネットや縫いぐるみみたいなものもある。少しは落ち着きを取り戻したエヴァに話しかけた。

「キティ、ゆっくり周りを見てみなさい。彼に敵対の意思はなく、私達に攻撃の理由もない。それに人形師と出会えるなんて珍しくて、その工房に足を踏み入れるなんて奇跡に近いんですよ？　ほら、この人形なんてとっても可愛いじゃないですか」

そう言いながら近くにあった緑色の髪の毛の人形を指さす。フリルのたくさんついたドレスを身につけているその人形は、可愛らしい笑顔をこちらに向けていた。エヴァも私に釣られて、その人形にゆっくりと目を向ける。

「かわいい……あの服も手作りなの？」

「まぁな。ふむ、こうするか」

エヴァの疑問にアルスターはあっさり答える。そして両手を目の前に上げ、魔力を集め指を動かし始めた。そしてそれに呼応するように緑髪の人形がふわりと浮きあがりテーブルの上に立つ。そして優雅に、でもどこか可愛いダンスを踊り始めた。エヴァは緊張や恐怖はどこへやらですっかり目を輝かせている。やっぱり、女性はいつまでたっても女の子なのだろう。特にエヴァ、不老たる彼女にとっては。

やがて一曲踊り終えたのか、人形はぺたんと座りこみ動かなくなった。エヴァはもう少し踊る姿を見たかったのかちょっと残念そうにいているが、もう警戒は欠片もしていない。そして人形が座りこむのと同時に魔力が拡散するのを感じる。恐らくアルスターは魔力の糸で人形を操るタイプの人形師なのだろう。魔力の気配でばれるという点はあるが、糸が不要で交換手間もないことから今では主流のスタイル……だったはず。

「気に入ったかな？　お嬢さん」

「うん！　また見せてくれる？」

「あぁ、時間があればな。それで……むぅ、我はお前を何と呼べばいい？」

「あぁ、ハルと呼んで下さい」

「では、ハル。今の我の人形捌きをどう思う？」

「人形捌き、ですか。そう言われても私は魔法使いですから……」

「ならもっと具体的に聞くことにしよう。人形師、ローランと比べてどうであった？」

「そう言われても操る大きさが……」

彼、ローランは等身大の人形を操っていた。けれど今アルスターが操っていたのは６０センチ程の人形だ。それに彼の手元なんて見えな、か……そうだ、見えなかった。

「気付いたか。我の動きが見え過ぎていることに」

そう、アルスターは操っていると分かりやす過ぎるのだ。ローランは私が魔術師の目で見るまで人形と気付かせなかった。それはつまり、それほど自然に人形を動かしながら自身の操る動きを見せなかったからだ。大きさが大きくなればそれほど操作は難しくなるはず。だけれど、彼はアルスターのように手を上げたりなんて一度もしていなかった。あまつさえ私に本を手渡したり、文字を書いたりもしていたのだ。

「ローランは人形を操る技術は人形師の中でも五指に入るほどの実力者だからな。我と比べれば違いがよくわかろう」

「えぇ、確かに彼の動きを見たことがありませんね」

「実力は当時からずば抜けていたからな。それに比べて我は人形を操るのは苦手でな。今のようにこの大きさを動かすにも文字通り手一杯だ」

けれど彼もまた二つ名がつくほどの人形師であるはずだ。珍しいからでは名は売れない。実力があるからこそ人は恐れ、羨み、妬み、尊敬して名前が売れるのだ。ならば、一体何が彼をそうさせた？

「されど我は人形師。子供サイズの人形をまともに操れないなど面汚しもいいとこだ。だが、何度、何度、何度練習しても腕は上がらなかった。そして、我は一つの解を得た、『人形自体が動けばいいじゃないか』と」

「それは」

「あぁ、それは人形師とは言えぬかもしれない。だが我にはそれしか道がなく、それが正しく我が道だった。我はそれを自律人形と呼び、それからは人形作りとして色々学んだ。人の骨格から魔法による召喚術の構造、魔術、蘇生術、不死の法……そしてその中にはもちろんゴーレムもあった」

人形を動かせないのなら人形が動けばいい。それはブレイクスルーとしては最高のものだろう。他人からは、その在り様は人形師とは呼べないかもしれない。だが言いかえれば、彼はその道の先駆者なのだ。彼が歩んだ道が新しい人形師の道の一つになる。

「学ぶには移動しなければならぬが、実践するには拠点が必要だ。魔術師や魔法使いならば己が力で作り出すこともできるのだろうが、我には不可能だ。人里では怪しまれ、山奥では不便すぎる。悩んでいた時にこの村に辿り着いた。我がこの村に辿り着いた時、ここは酷いものだった。畑は荒れ果て、子供は走り回る気力もない。村全体が死に行く途中だった」

当時を思い出すかのように目を伏せるアルスター。彼の瞼になにが浮かぶものは、私には見えない。彼の当時の気持ちは、私には湧きあがらない。それは彼だけのものだ。だから私はせめて彼の言葉を聞き逃さなぬように集中した。

「教会に行けばすぐに原因はわかった。そこには多くの若者がいた。目に矢が刺さったもの、腕があらぬ方向に向いている者、足のあるべき場所を必死で手探るもの。訳を聞けば近くで領主同士の争いがあり、そこで駆り出された結果だそうだ。どうにも当時の領主は傭兵に金を払うのも惜しかったらしい。そこで我は代表に一つ話を持ちかけた。『手足はいらぬか？』と」

エヴァはいつの間にか緑髪の人形を腕に抱いている。手櫛で髪を梳かしたり、洋服の乱れを直したりとまるで普通の女の子のようだ。そしてアルスターは紅茶で唇をぬらすと、また話を続けた。

「人形遣いであり、さらに自律人形を目指している我にとって義肢など容易いものだった。最初は疑義を抱く彼らも、我が義肢を取りつけた青年達に立って抱きしめられると涙を流して礼を言った。そして彼らは我の為に工房を作ったり食糧を提供したりし、我はここで研究を重ねその成果を彼らに還元した」

「それってつまり研究結果の実験じゃないの？」

「ふむ、その通りだ。だが彼らも望んでいた物であり、我も誇りにかけて下手な物は見せたくないのでな。まぁ、子供にはわからぬことだろう」

尋ねるエヴァに軽く返すアルスター。エヴァの目は何も感情が、それも全ての感情が打ち消しあったが末に亡くなってしまったような目であった。

「実践を重ねればそれほど研究は早くなる。最初の2年で人体の骨格を重要さを知り、次の4年で筋肉の仕組みを知り、次の8年で重心の大切さを知った」

「そしてそれの結果が彼、いやアレですか？」

アルスターの話の流れを切り、紅茶ポットを運んできた神父を指さす。神父はなんでしょうか、といった顔で私を見てくる。大したものだ。

「ハルは少し性急過ぎるな。いや、久しぶりの客人に我も年甲斐もなくはしゃいでしまったか。そうだな、彼の紹介がまだだったな。遅くなったが紹介しよう。彼は作品番号１１７８プリースト、境界亡き人形師が作りし自律人形だ。そして英王教会と対立する原因だ」

「どうぞ、よろしく」

プリースト、神官そのままか。おそらくキリスト教の奴らを黙らせるために作ったのだろう。いくらなんでも既に教会があり、信頼篤い神父がいる村に新たに教会を建てるのは現実的ではない。しかもこの村にはこれといった特産もないため強欲な者もその手は延ばさないだろう。まだ情報網が発達しているとは言えない今だけれど、完全に村一つ隠蔽することなどできない。ならばこの策は最適といっても良い手だ。もっとも村全体の意思が纏まっていなければ実行できないことであるけれど。

「え？　え？　嘘だよね？　先生、今のって嘘だよね？」

「ここで嘘を言っても何の利があるというのですか。あれは間違いなく制作物ですよ。エヴァにはまだ魔力では感じ取れないかもしれませんが、目を閉じてよく臭いを嗅いでみなさい」

マントの裾を引っ張りながら質問してくるエヴァに耳打ちをする。まだ魔法を習い始めて一年も経たないエヴァに、魔力と気配の違和感に気付けというのは酷だろう。しかし、血を啜る鬼の頂点にいるエヴァだ。疑いを持って掛かれば気付くはず。

「……血の臭いが、足りない？」

「ほぅ、その見方はなかなか興味深いものだな。お嬢さんの指摘通り彼には血は通っていない。魔力ではなく臭いで気付くとは……もしや吸血鬼かね？」

「ッ！！　わ、私は……」

「アルスター、レディの美しさを暴いてはダメですよ。秘密は女性を際立たせる至高のルージュなのですから」

「ククッ、確かに。礼を失してすまない、リトルレディ。お礼に何か一つ願いを聞こう」

取り乱したエヴァの頭を撫でながら事の成り行きを見守る。アルスターにとって話のできる客は本当に久しぶりなのだろう。本来なら囲まれたあの場で正体を探られてもおかしくはなかった。おそらく今の疑問も本意ではなく、おもわず口から出てしまったに違いない。まぁこれは全て私の推測であり、彼の本心なんてわからないけどね。

「……その自律人形って永遠に動くの？」

「それがお願いかね？」

「ううん、質問。適切な願い事をするための」

「ククッ、久しぶりの客人からの質問だ。答えぬ道理はないな。その質問の答えだが、是だ。ただし、それは人がメンテナンスを欠かさなかった場合に限る。人が作ったものは、その精度以上の精度を持つ物を作ることはできない。故に最後には人の腕が必要だ。ちなみにこのプリーストはこの冬で２０歳になる」

「そうなんだ……」

「全く英王教会の老害共もお嬢さんほど物わかりが良ければいいものを」

「あぁ、そういうことですか。あいかわらず思考の止まった、己の過去しか見ない愚者は考えが浅いものですね」

「あれと我らが同じ人間だというのが、この世の神秘よ」

つまりはあれだ、不老不死だ。何時の時代の権力者も目の色を変える定番のあれだ。目の前の、人と寸分違わぬ人形に可能性を見出すのは勝手だが少しは現実的になって欲しいものである。彼の手を離れた瞬間にこの奇跡は劣化し風化するというのに。これまでも繰り返され、そしてこれからも積み重ねられていくだろう愚行に憂いていると、何かを決したエヴァが俯いていた顔を上げた。これから彼女がなにを願うのか私は知らないし、その願いについて口出しをする気もない。

「私は、吸血鬼だ」

「……」

「それも夜を統べる吸血鬼の頂点に座する、真祖の吸血鬼だ。私にとってこの世は泡沫で、夢と現実の微睡の中でしか生を感じられない。人は死ぬ。そんな当たり前のことが私にはできない。人は老いる。そんな摂理に私は含まれない。だから、だから私は私が忘れられる日が来るのがとっても怖い」

「故に何を望む？」

「だから私は私が欲しい。何時までも私と在って、私のことを忘れない私が欲しい。だからお願いです。私にその技術、自律人形を作りだす術を教えて下さい」

人の死は、人から忘れられたその時だという。それならば不死の彼女はこれから何回死ぬのだろうか？　死んだ者は生き返らない。生きながらに死を積み重ねる、それが不老不死の本質だ。

「ハル、良いのか？　まだ卒業には早いのだろう？」

「彼女の意思は彼女だけのものです。それは何人にも侵すことのできない領域であり、それは侵してはいけない聖域です。だからキティが私のもとを去ると言うならただ受け入れるだけですよ。それに元々魔法に関しては書物を与えていただけでほとんどキティの独学ですからね。そういうアルスターはいいんですか？　その聞き方は肯定としか思えませんが」

エヴァの道はエヴァが決めるべきだ。それがどんな道でも、私が共に歩むことはできない。私は死ななければならない。だから私は見守るだけだ。それが無責任と言われようと、卑怯者と罵られようと、それが私の生き方なのだから。

アルスターはしばし目を伏せた後立ち上がると、奥から一つの古い本を持ってきた。タイトルはない。厚さもそれ程なく、本というより日記やノートと言った方が正確なのかもしれない。

「人形師のそれは魔法使いより魔術師の方が近い。それとは、己の技術を煮詰めることだ。人形師も魔術師も自身の考えに誇りを持ち、

それ故に他者に教えることを嫌い、それ故に技術は消えていく。基礎は教えても本質は教えぬのが常だ、それがたとえ失われていくとしても」

そう言いながら神父――プリーストと呼ぶべきか？――に目配せをすると、彼は二階に上がって行った。エヴァはアルスターの言葉を一言一句聞き逃すまいとじっと見つめている。私は紅茶を口に運ぶ。何もしないことが今の私にできることだ。

「だが私は違う。それは自律人形と言う形ある物を目指しているからかもしれぬが、この技術が消えていくのが耐えられぬのだ。我は我の技術が消えるのが恐ろしい。人形に継がせることも考えたが、先のようにそれは不可能なことだった。お嬢――いや真祖の吸血鬼よ。不老不死を背負った死亡き死人よ。お前は我が技術を受け継ぐ覚悟はあるか？　我が技術を理解し、発展し、破壊し、進化し、退化し、停滞し、そして理解しなおす。その覚悟はあるか？」

「私は私が欲しいだけ。そんな単純なことだけど、そのためには一切妥協するつもりはない。どれだけ時間がかかろうと、私には砂の一粒にしか過ぎない」

「ククッ、単純が故に思いは強い、か。ククッ、アハハハハハハハハッ！　いいぞ、いいぞ。そうだ技術は所詮技術。価値はあっても意思はなく、意味があっても方向性はない。全てを決めるのは人だ。人こそが技術を使いこなし発展させられるのだ。人形師として生を始めて早３０年、この技術を誰に託そうかと思っていたが君は最高だ。悠久の時を生きる君を、君が作り上げるがいい」

「――――はい！」

「それでは、私からも一言」

「あ、先せ」

「もう先生と呼ばなくても良いですよ？　ではここにエヴァンジェリン・マクダウェルの卒業を認める。しかし魔法使いに極みなどない。だからこれからも精進するように。これは餞別です」

なにか涙ぐんでいるエヴァに袖の中からいくつかの書物を渡す。青、緑、赤そして黒色の本だ。曲がりなりにも先生だったのだから餞別は当然だろう。それにエヴァはまだまだ魔法使いとして未熟で、それの原因が私の力量とされるのは自尊心が傷つく。べつに名誉欲など欠片もないが、与り知らぬところで貶されるのは気分が悪いのだ。

「この、この本はいつも使っている、本」

「ほら、何を悲しむことがあるのですか。とりあえず涙を出しきるまでは私の言葉を聞いていなさい。この青色の本は『初等魔法大全集』です。キティもほとんど内容は覚えているでしょうが、これには本質が書かれています。この緑色の本は『中等魔法大全集』、最近キティに読ませている物ですね。赤色の本は『高等魔法大全集』です。これに載っている魔法を扱えるものは多くはないですが、キティなら十分可能でしょう。そしてこの黒色の本は――――私の手記です。この本には幾重もプロテクトを掛けています。それを全て解除できる日が来れば、キティは一流の魔法使いとなっているでしょう」

「うん、……ぐすっ、ありがどう」

「では私はそろそろ失礼しますね。アルスターさん、キティをよろしくお願いします」

「あぁ、我が技術の全てを教えてみせよう。ハル、素敵な時間と弟子を感謝する」

「こちらこそ有意義な時間でした。じゃあね、エヴァ」

彼女の道を歩くには人の生は短すぎる。彼女はこれからなんども死んでいくだろう。私もいつか彼女を殺すのかもしれない。扉を開けると既に朝日が昇ろうとしていた。その光を使って転移をする。後ろからありがとうと聞こえた気がした。なるほど、これは悪くない気分だ。明後日になったら魔法世界に、メルに会いに行こう。それだけ時間があれば、目の腫れも引いているだろうから。

ep. 14　騒動と私と帰省と試練

「アリアドネーよ、私は帰って来た！」

周りの人々が奇異の目で見てくるが、そんなこと今の私にしてみれば些細なことだった。濃厚な魔力の気配に軒先を華麗に彩色する果物や魚、そして角や耳の生えた人達によって賑わう街並み。故郷に帰って来たという思いが強くなる。魔法世界に帰ろうと決意してから一年、この一年は特に長く感じた。それもこれも先の英王教会のせいだ。

一年前――――。

お土産を購入してゲートポートへ向かう。お土産はこちらのお菓子だ。まだ生クリームなどはないけれど、そのかわり果物がふんだんに使われたさっぱりとしたものが多い。そのおかげでカロリーを気にしなくても良いというのは、女性にとってはありがたいだろう。もっともこの時代ではそれを食べることのできる人は少ないけれど。ちなみに私のお土産は数種類のガレットだ。ガレットとは生地を薄く丸く伸ばして焼き、その上に色んなものを乗せる料理である。簡単に言うとクレープを巻かずに食材を乗っけて端を畳んだものだ。ガレットは元々家庭料理であることから庶民の食事から貴族用のデザートまで多くの種類があり、それゆえに洗練されている料理の一つである。

ゲートポートの前に着き、一度身なりを整えてから中に入る。このゲートポートを使えばアリアドネーのすぐ近くに出るはずだ。こちらに来るときに使ったのだから、間違いはないだろう。手続きを

している近くの待合所には十人ほどがゲートが開くのを待っていた。ゲートとは常に開いているわけではないため、この様に待つのは珍しくない。今では魔力の揺らぎを観測することでおおよその時間を予想することができるが、昔は一月もここに缶詰めになるのも珍しくはなかったそうだ。暇があればどの様にして予想しているのか詳しく知りたいけれど、今は私も手続きを済ませるとしようかな。

「すいません、アリアドネーに行きたいのですが」

「渡航目的はなんですかぁ？」

「里帰りです」

「はい、わかりましたぁ。こちらにサインをお願いしますぅ」

変わった喋り口調の受付嬢と少し会話した後、渡された名簿に「ハル」と記入する。ちなみにこれには馬鹿正直に本名を記入する必要はない。正確には今は、だけれど。この時代ではまだ戸籍管理はされていないので、どんな名前だろうと通るのだ。ではなぜこのような手順があるのかと言うと。以前にゲートポートを利用したことがあるか、あるならばどこからどこへ利用したかなどの情報を蓄積するためである。その情報によってゲートポートの利用状況を把握し、必要な設備や人員を割いたりするのだ。ゲートポートはある理由から損傷が激しいために、設備や人員の適切な配備はとても大切なことである。

「えーとぉ、ハルさん、ハルさんはぁ……っと。あ、室内ではフードを取ってくださぁい」

「あぁ失礼しました。これでいいですか？」

フードを外して顔を晒す。ここでは魔法の使用は固く禁じられており、禁移結界や魔力感知の結界が張られているため素顔だ。ここで魔法を使うとそれは敵対の意思ともとられるので、認識阻害はかけていない。だから人前では随分と久しぶりな素顔を晒すことになった。

「ハルさんはぁ、以前にアリアドネーから利用されてい、ます……」

情報の確認が終わったのか顔を上げた受付嬢が固まる。はてさて、どうかしたのだろうか？　私は生憎と声を失うほどの美形ではないが、絶句するほどの不細工ではないと自負している。むしろ最近は渋いおじ様であると思っているくらいだ。――――この阿呆としかいいようがない思考をしていた私にとって、次に発せられる彼女の一言は想像だにしないものだった。

「あ、あなた『白の異端』ですね！　警備兵集合ぉ！！」

ゲートポートの損傷が激しいその理由、それは逃亡目的で渡航する賞金首とそれを防ぐ警備兵との戦いである。

「第一、第二警備部隊は目標を半円包囲！　第三警備部隊は出入り口の封鎖だ！　それと教会に連絡をいれろ」

「先程までの馬鹿な私をぶん殴りたい……」

「あーあー、テステス。ゴホンッ、君は完全に包囲されているー！　無駄な抵抗は止めて速やかに投降したまえー！」

「そうだそうだぁ。お母さんが泣いてるぞぉ」
「ん？　何あいつ賞金首？　よっしゃ、ついでに路銀稼ぎだ」
「世を乱す痴れ者を放ってはおけまい。わしも加勢しよう」
「ホントだ！　私も見たことある！　……あれー？　そういえばあの人なんで賞金掛けられてるんだっけ？　貴族でも殺した？」
「確か国宝の強盗だったかと。盗まれたのは奇跡のアレです」
「お宝の臭い！」
「白の異端とか恥ずかしいな」
「大隊長！　第一、第二警備部隊共に目標の包囲完了しました！」
「大隊長！　出入り口の封鎖、並びに連絡完了しました！　教会より『決して殺さず、生け捕りにすること』との要請です！」
「ククク、俺様の前に姿を現したのが運のつきだったな。俺は漆黒の堕天使、最強最高の賞金稼ぎだ！」
「あいつはもっと恥ずかしいな……俺はちょっと隠れておくとするか。面倒事はごめんだ」
先程までの静かな空間が一転して天変地異の大騒ぎである。蜂の巣をつついてもこれほど騒がないだろう。受付嬢の大声を聞きつけたのか奥から３０人程の甲冑を身にまとった奴らが出てきたかと思

うと、私を逃がさないように周囲を取り囲んだ。警部部隊が唯一いないのは私の背後、つまりは出入り口側だけなのだが、先程のやり取りを聞く限り外で厳重に固めているのだろう。そとから人が入らないようにするためにも必要だし。そしてその騒ぎを聞きつけた待合室にいた利用者が参戦して……もうなんなんだ、これは一体。それとこっそり待合室に帰った青年よ、私のは勝手に付けられた二つ名なんだ。だからアレと一緒くたにしないでくれ……。

あぁ、失敗したなぁ。そうだよな、魔法使いを探すには魔法使いが立ち寄る場所で探すのが一番早いよな。それにここで認識阻害を使う人なんていないし、使ってもばれるから意味がないしなぁ。最近は常日頃から容姿を変えていたり認識阻害を掛けていたせいか、人相書きが出回っているのをすっかり失念していた。白手袋さえ出さなければいいと思っていた自分に一言、言ってやりたい気分だ。

「はてさて、後悔するのは今少し待ちましょうか。今はこの修羅場を切り抜けないと……」

「大隊長！　目標、沈黙から復帰したようです！」

「よし、これで声が届くな。大人しく投降しろー！　君にも理性は残っているはずだー！」

「お国のお母さんもぉ、泣いてるぞぉー」

「いや、私の家族はもうこの世界にはいないので……」

「大隊長！　目標再び沈黙しました！　それと先程の呼びかけは非人道的だと抗議します！」

「そうか、天涯孤独の身、か。それ故に盗みなど……。おーい、聞こえるか―！　罪は償える、今投降すれば私もできる限りの援助をしよう！　君は一人じゃない！」

「うぅ、白の異端さんにそんな過去があったなんてぇ。私もなにかしてあげたいですぅ」

混沌な状態って次々と状況が変わっていくことを指すものだと思う。いや、べつにそんなつもりで言ったわけじゃないのだけれどなぁ。これを上手く利用して外へ出れるかな？　外へ出れれば転移が使えるのだけれど。

「けっ、天涯孤独だから何なんだ。そんな理由で賞金首になるなら、どこでも賞金首だらけになってるぜ」

「うむ、油断はしない方がよかろう」

「そんなことより、お宝お宝」

「天涯孤独、そんなちっぽけなこと俺様の業とは比べ物にはならないな」

「何も聞こえない、何も見ていない、何もしていない」

混乱する警備部隊は余所に、即席集団は中々に冷静だ。ううむ、これじゃあ警備部隊の隙をついても外には出られないか。何かきっかけがあれば、それも皆の注目を集めるようなものがあればいいのだけれど。

「大隊長、目標に反応なし。攻撃許可求めます！」

「……仕方あるまい。余罪を重ねる前にここで罪の清算をさせるのが愛だろう。総員、戦闘準備！」

「ハッ！」

大隊長と呼ばれている羽の生えた兜が号令をかけると、周囲のものが一斉に杖を私に向ける。それに呼応するかのように即席集団も長剣や槍、はてには剣玉といった個性が溢れすぎている杖と思われるものを構えた。これは一戦交えなければ逃げられる気がしない。できれば人前で攻撃魔法を使う際は必殺しておきたいけれど、さすがに英国ゲートポート虐殺事件なんてした日には、いよいよもって犯罪者になってしまう。別に指名手配されることはもう慣れっこだけれど、それによって突っかかってくる正義馬鹿が増えるのは危惧すべきことだ。

「気乗りはしませんが、それも人生というものでしょう」

「へっ、そうこなくっちゃな」

「わしも参るとしようか」

「ふふーん、大人しくあたしにお宝渡しなさいな」

「この俺様に歯向かうか。面白い、お前の罪を見せてみろ」

「あーアリアドネーに着いたら何しようかな、そうだ、先ずは食事にしよう。たしか貴族気分で食べれるレストランってのが紹介されていたはず」

右手を水平まで上げて、前を見つめる。どうせなら白手袋を使いたいけど、流石にそれを見逃してくれる訳はない。私の戦闘態勢に気付いたのか、空気が張り詰める。先程まで何やら言っていた受付嬢も、その口を今はギュッと閉じている。無音ではない。むしろ何一つ聞き逃さまいと集中しているため、色々な音が聞こえてくる。新米警備員のものと思われる荒い息遣い、靴の底を擦る音、密集している杖と杖がかち合う音――――そしてドタドタ聞こえてくる足音。緊張はその足音の主によって弾かれた。

――――バンッ

「英王教会から応援にき」

「魔法の射手・火の３０矢」

「ちっ、魔法の射手・雷の１０矢」

「瞬動」

「魔法の射手・戒めの風矢」

「闇夜切り裂く一条の光　我が手に宿り敵を食らえ」

「あれだけ煽ったんだからそれくらい無詠唱でやろうぜ……」

いきなり開かれた扉に皆の注意がそれた瞬間、魔法の射手を地面に向けて放つ。私の次に気を取り戻したのは警備部隊ではなく、即席集団だった。この辺は場数によるのだろう。それとなんか偉そうにしてた奴、実力不足なのは私にとって大歓迎だがあの口調では先は長くないぞ。まぁ、私には関係ないことか。

「……ハッ？！　ぜ、全員構えぇぇぇぇぇぇぇ！！」

「「「サー、イエッサー！」」」

「ま、待て！　その位置では我々にあた」

「撃てぇぇぇぇぇぇ！」

「「「魔法の射手！！」」」

「白き雷！」

「しょ、障壁展開！　な、障壁が……割れる！　ってアギャア」

気を取り戻した警備部隊が一斉に魔法の射手を放つ。だが私が地面に放った魔法の射手により土煙が上がっているため、正確に狙いが付けられたものは十にも満たなかった。外れたものは当然私の背後へ逸れることとなる。つまり何十何百といった魔法の射手はそのまま出入り口に突き刺さった。もちろんそこには扉を開けた奴らがいた訳で、緊急展開の障壁に何百の魔法の射手を捌ける硬さもない訳で。ちなみに雷も当然逸れていった。それが見事に障壁の壊れた英王教会の連中だと思われる者に命中したおかげで、彼らは伸びてしまっている。ふむ、なかなかいい仕事をしてくれるじゃないか。今の内に外に出るとしよう。

「逃がさんよ」

「ちっ！」

――――ガキッ

袖口からヴィーティングを抜き出しながら相手の刀を受ける。あと一歩で外に出れたのに、厄介な奴だ。しかもこいつは接近戦が主体なのだろう、すこぶる私には分が悪い。

「ほっほう、わしの一太刀を受け切るか。それなりに名のある名刀なのじゃが、刃こぼれ一つせんとはな」

「さぁ、腕の問題じゃ、ないですかっ」

鍔迫り合いをしながらとりあえず挑発する。もちろん、腕は当然あちらの方が上だろう。だって私は剣術など習ったこともないし、一応それなりの筋力はあるが普通の農民と同じくらいしかない。鍔迫り合いができているのもヴィーティングのおかげだ。名刀とか相手は言っているが、神器には及ばないだろう。

「よくやった、そのまま抑えとけよ！　逆巻け夏の嵐　彼の者等に竜巻く牢獄を」

「あっ、これはやばいかも」

鍔迫り合いに時間を取られてしまい、土煙がはれてしまった。警備部隊は入口が半壊している状況に目が点になっているが、即席集団は私が動きを拘束されていることにすぐに気がついた。そして先程雷の矢を放った青年が詠唱を唱えているのだが、あの詠唱はまずい。今一番に危惧すべきことは動けなくなることなのだから。

「いい加減に、離れて下さいませんか、ねっ」

「わしがそう簡単に逃がすと思うか？　お主も腕に自信があるなら見せてみればよかろうに。おぉっと、言いすぎたかの」

ヤバイ、この状況はかなりヤバイ。相手は私が引けば押してきて、弾き飛ばそうとすれば自ら引くなど鍔迫り合いをやめる気配がない。足止め目的ならば最高の選択だ。というか剣の腕を貶されたのを意外と根に持っているのか。もしかして、そこを責めればいけるか？

でもそんな時間はない。警備部隊も気を取り戻したが、さすがに二度目はしないようで今は邪魔をしないように静かに魔力を溜めているだけだ。この空気を読めない馬鹿がいればいいのだけれど……。

「ククク、俺様の術を避けたか。これはどうだ？　痺れな、魔法の射手・雷の５矢！」

「占めた！」

「この愚か者がッ！」

大きく後方に弾き飛ばされる。鍔迫り合いを繰り広げていた相手もそのまま後ろに飛び下がるのが見えた。そして私達がいた場所に雷の矢が突き刺さる。雷属性の魔法の射手は触れると痺れてしまうため完全に防御するか、避けるのが定石だ。今回は鍔迫り合いの最中というわけで防御に意識を避けることもできないため、このように相手は私を弾き飛ばすしかなかったという訳である。視界の端で馬鹿が他の即席集団に取り押さえられているのが見える。また繰り返しになるが、なかなかいい仕事をしてくれるじゃないか。

「もぉー、バカバカ！　何考えてるのよ！！」

「お前らこの俺様に手を上げるなど、馬鹿な真似はよ」

「バカはあんたでしょ！　逃げられたらどうすんのよ！！」

「逃がさねぇよ、風花旋風　風牢壁！」

飛ばされて足を着いた瞬間を見計らってなのか、竜巻が私を中止に発生した。この魔法の効果は単純な物だ。本来ならこれにいろいろ効果を追加して使うものだが、生け捕りにするというならこのままでも十分だろう。だが、残念ながらここはもう外なのだ。

「ふむ。このまま転移しても良いですが、せめて一つくらい目に物見せてやりましょうか。運のいいことにこの竜巻の中なら詠唱を聞かれることも、魔法を使うところも見えませんからね。火よ火よ火よ、始まりの英知をここに示せ　業火絢爛」

白い火柱が焼き尽くす。私を取り囲んでいた竜巻など、まるで木くずのように燃やし尽くした。むしろふんだんに風を取り込んだためか、少々威力が強くなっている。さて、どこへかは決まっていないけれど転移しましょうか。

――――これが一年前の話だ。

この出来事は魔法使いの間でも大いに盛り上がり、私の賞金額も跳ね上がった。はっきり言って迷惑この上ないが、今回の騒動の原因は迂闊だった私なので受け入れるしかない。ちなみに今の私の手配書はこんな感じだ。

――――＜ＡＬＩＶＥ　ＯＮＬＹ＞――――

『白の異端』　『白炎の使者』　『異端の使い手』

備考：奇跡の台座より国宝の強奪、同場において十三人の魔法使いを殺害した疑惑あり。またゲートポートにて暴動を起こし、駆けつけた英王教会会員五名が重傷。発動媒体が珍しく白い手袋に酷似しているが、普段は黒い手袋もしている模様。重要参考人であるため生け捕りにすること、情報はその場で査定する。

報酬：金貨５００　魔法石２０　翼竜、もしくは牙竜の角　デーモンの大角　天然マンドラゴラ　その他素材

引き渡しは近くの魔法教会にて

――――＜ＡＬＩＶＥ　ＯＮＬＹ＞――――

これは現在出ている手配書の中でも五指に入る賞金額だ。それに付け加えて「デーモンの大角」と「天然マンドラゴラ」が追加されている。どちらもそれなりの高級品だ。この報酬は生け捕りにすることが条件の手配書の中ではぶっちぎりの一位である。全く以って嬉しくない。二つ名が増えたことも嬉しくない。というか二つ名をつけるのが好きすぎるだろう……。

ゲートポート騒動以来、半年は完全に身を隠す必要があった。なにせ普段使っている発動体も見られたのだ。主要な都市部には出入り口に認識阻害の有無を検知する魔法が掛けられたり、街の見回りが増えた。それに私を狙う者も倍以上に増えたおかげで、一か所に止まることもできない。だから、痕跡を残さないように気を配りながら常に移動するというまるで指名手配犯のような行動を取らざるを得なかった。いや指名手配犯そのものか、今は。難儀なことである。半年間身を隠した後は、ゲートポートを突破する方法を考え、それを実行するための準備を進めた。その準備に掛かったのが残りの半年である。

「さて、凱旋の宣言もこのくらいにしましょうか。とりあえずは顔を洗わないと」

警備が厳重になったゲートポートをどう抜けるか。魔法は勿論使えない。個人での直接転移は試したけれど魔力が足りずに断念した。調べてみると個人での転移は成功した人がいないらしい。その原因が全て魔力不足ということなのだから、どこにあるというのだろうか魔法世界は。話は逸れたけれど、つまりは魔法的アプローチは全てダメになったということだ。魔法が使えないなら取れる手段は一つ。

「はぁ、さっぱりした。これを女性は皆するというから凄いものです」

裏路地に入り、袖口から桶と水を取り出してメイクを落とす。水はその場に捨てて、桶とウィッグを亀裂の中にしまいタオルを取り出して顔を拭き、認識阻害を展開する。私が取った手段はメイクで人相を変える、だ。魔法は一切使わないので魔力でばれることもなく、わざわざ男性が受付をしているゲートポートに行って魔法世界まで来たのだ。なかなかいい案だと思う。これは自画自賛ではない、だって考えたのは私ではないから。このメイクをするというのは一部の賞金首、それも魔法世界と縁の深い者がゲートポートを通り抜けるために考えられた方法なのだ。何時、誰が考え付いたのかは分からないが、この方法は今でも受け継がれており専門の化粧師がいるほどである。この化粧師を見つけるのが困難だったり、ものすごい人物だったりしたのだがここでは割愛しよう。というか、できれば思い出したくもない。

「さて、確かメルの家はこの辺りだったはずですが……」

表通りに戻り、記憶と魔力を辿り家を探す。通りはそれほど変わっておらず、屋台の店主の顔触れが変わっているくらいだ。人を避けながら通りを歩く。さて、第一声は何にしようか？　あれから五年もたったがメルはすぐ私に気づくだろうか？　考えることは尽きない。あぁ、早くメルに会いたい。

しばらく考え事をしながら歩くと、懐かしのメルの家に辿り着いた。驚くほど何も変わっていない。まぁ、この建物はただの空き家であって、この扉を入口にしたメルの世界が本当の家なので当たり前のことか。それにしても本当にそのままだ。侵入者を排除する結界もきっちり残っている。

「先ずはこの結界をどうにかしますか」

さて結界を破らないといけないのだけれど、こういう結界を破るには数多くの方法がある。例えば力任せに破壊したり、術者に解除させるか殺したり、結界の構成を解読して解いたり、結界を改変させてみたり、結界が気付けないような術を作るとかいろいろだ。結界を抜けようとする人とその目的によって方法は千差万別なので「結界破り」といった魔法の分類は存在しない。つまりこの「結界破り」とはもっとも魔法使い、または魔術師としての個人の素質が問われるものなのだ。ちなみにこのことは結界を張る側にも言えることだ。結界もまた千差万別なのである。

「とりあえず、術の構成を見てみましょうか」

魔術師の目で扉を見る。今私にある選択肢は、結界を解除する、結界を改変する、結界に合わせた術を作るの三つである。帰るのが目的なのだから破壊はできないし、術者を傷つけるなんて以ての外

である。どれを選ぶのかは術の構成を見て一番可能性のあるものを選ぶのだが……。

「これはまた時間のかかりそうな……。できればあまり時間はかけたくないのですが、流石はメルと言ったところでしょうか」

正直、できれば避けたいほどの緻密さだった。結界と言うのは魔力で編んだ編み物のようなもので、緻密であればある程強固というのが一般論である。中には己の魔力頼みに、まるでこんがらがった糸のような結界を使う者もいるが、それは外からの衝撃には強くても解く方法は多くなる。力ある者による本気の結界は、まるで織物のように緻密だというけれど、目の前の結界はそれに近いものだった。

「あははは、一年以内に解くのを当面の目標にしますか」

術の構成を袖口から取り出した紙に転写し、荷物を持って通りを下る。確か市場の近くには宿屋が何件かあったはずだ。しばらくはそこにお世話になろう。それにしてもゲートポートの次はメルの家の結界、ただメルに会いたいだけなのだが予想以上に困難な道のりだ。女性に会うためにこんな苦労をするなんて聞いたことがないな。……いや、ある意味でありがちなものか。

「お姫様に会うのに試練を乗り越えるのは、どの世界でも勇者の条件ですからね」

ep. 15　結界と私と同僚と再会

――――カリカリカリカリカリカリ

ペンの走る音だけが、大図書館の静謐な空気を揺らす。手元にある紙には文字以外にも図や数字が縦横無尽に書き込まれていた。術の草案だ。勿論、結界を破るための。

扉に掛けられていた結界は、やはりと言うべきか、見た目以上に複雑な物だった。最初に私が見た結界は予想より早く破ることができたけれど、その次にまた結界が。それを解いてもまた更に次があり、しかも時間と共に破った結界も元に戻るので早解きが必須だった。他にも細かいところに細工がしてあり、例えば結界の術の構成で太陽を意味するルーン文字「シゲル」を刻みこちらの視力を奪おうとしたり、解きやすい道筋で解くと車輪を意味するルーン文字「ラド」の逆位置を辿ってしまい堂々廻りになったり、かといって困難な道筋ばかり選ぶと情報やコミュニケーションを意味する「アンスール」の逆位置、つまりは騙されたりする。裏の裏を表にしないような罠の数々に悉く引っかかっている。それはまるで、この罠が私の為に作ったかのような……いや、さすがにそこまではしてないよな。うん、それは深読みのしすぎだろう。そう思いたい。

――――カリカリカリカリカリカリカッ

一度、ペンを置いて眉間をじっくり揉む。ふぅ、さすがに長時間の座り作業と言うのはとても疲れるものだ。気付けば日の光が差し込んでいる。閉館時間からずっと作業をしていたので、少なく見積もっても八時間は籠もりっぱなしだったということか。体を伸ばす

とそこら中から嫌な音がするのが嫌でも耳に入ってくる。あぁ、早くこの世界にマッサージ機は登場しないものかなぁ。

「ハ～ル～君～ご飯ど～お～？」

「あぁ、ミャアさんおはようございます。もう開館時間ですか？」

「違～うよ～。ご飯に～誘いき～た～だけ～。いこ～よ～」

「はいはい、わかりましたからそんなに耳を伏せないで。フフッ、片づけるので少し待っていて下さいね」

ぺたんと頭にくっついていた三角耳をピンとさせて喜ぶ彼女を見て、自然と笑みがこぼれる。ミャアはここの職員でありアルバイト時代の同僚でもあった亜人の女性だ。亜人と言うのは人間に容姿が似ているが、ミャアのように猫の耳が生えていたり、翼や尻尾、角が生えていたりする種族の総称である。具体的にはもっと細かく系統立てができるらしいが、亜人同士であれば子を為せるので実質不可能であると言われている。ヘラス帝国といわれる国には昔から多くの亜人種が住んでいて、代々角を持つ皇族が国を治めている。また人間種が多いメガロメセンブリアを盟主とするメセンブリーナ連合とは確執があり、時折激しい討論会が行われているらしい。そんなことに国民たちの関心は薄く、両国間の流通はそれなりに盛んであるけどね。またここアリアドネーはヘラス帝国の東に位置していることから亜人種も多く生活している。

ミャアに後ろを向いてもらい、その間に机上の紙やペン、魔法書などを亀裂に放り込みマントを着替える。うーん、できればシャワーを浴びたいところだけれど、そんな余裕はあるだろうか？

「ミャア、シャワーを浴びたいのだけれど時間は大丈夫かな？」

「う～ん～、時間はある～けど～そのままが～いいな～。帰ってきて～から浴びれ～ば～？」

「いや、時間があるのであれば汗だけでも流したいのですが……」

「え～、ハル君の～臭い好きだから～いいじゃ～ないか～」

ちなみに彼女は、重度の臭いフェチでもある。

朝食をとり、大図書館へと帰ってくると丁度他の職員達の出勤ラッシュと重なったためか館内がざわざわしていた。大図書館は二階建ての建物で、一階には貸出可能な本が置いてあり、二階には貸出不可な貴重な本が棚に収められている。主に一階は一般の人や、考査前の学生たちが利用するのに対し二階は研究者や魔法使い、教授などが利用する傾向がある。また利用客には知られていないけれど、この建物には地下もある。そこには強力な封印や呪いが掛けられた本や政治的または倫理的観点から発禁とされた本が雑然と並んでいる、らしい。「らしい」というのは、そこに入るには館長と司書長の許可が必要で、私も入ったことは無いからだ。機会があれば是非とも入りたいけれど、そんな機会があるときは、なにかしら厄介事に巻き込まれているときだろうから迷いどころだなぁ。

「お、ハルじゃん。なになに今日もお勉強？」

「ハル君やっぱり戻ってきてよ～。ハル君がいなくなってから仕事がなんか上手く回らなくて」

「あぁ、君か。結界に関して面白い本をさっき捕獲したから処理が終わったら届けよう」

「皆さんおはようございます。中々手強い問題でもう少し時間がかかりそうです。それと昨日も言いましたがアルバイトの復帰は今は考えていませんので。私一人がどうこうできるほどこの大図書館は小さくないので、その感覚は気のせいだと思いますよ。結界に関しての面白い本ですか、ありがとうございます。私はいつものところに居るので」

元同僚たちと朝の挨拶を交わし、一階の奥へと足を進める。私は集中すると時を忘れてのめり込んでしまうため、無音の場所では作業はしないように心がけている。ここも夜になると静寂に包まれるけれど、朝になれば今朝みたいに誰かが声を掛けてくれる。うん、友達って素晴らしいものだ。

「さて、そろそろ突破させてもらいますよ。メル、いや『刻む者』メルディン・カルディアナ」

――――カリカリカリカリカリカリカリ

ここはこの道筋か？　いや、ここはFを贄にするところか。この空白はEでバイパスを通すとして、問題はMをどうするか、だ。

――――カリカリカリカリカリカリカリ

とりあえずIをKで打ち消すとして、生まれたLを利用することを考えよう。L、M……N？　ここにNを置くとしたらSが必要になるけど、いやSはその前に出ているから大丈夫だ。これでMも抜

けた。そうすればこの道が正しくなるからすべてはＦになって……いける。これはいけるぞ。

――――ガリガリガリガリ

余ったＬはＴと合わせてＭを増やす。Ｉの元凶であるＴｈにＧをぶつけるか。念のためにＷを合わせて置いておこう。Ｉはないから力は弱まっているはず。これで残りは……。

――――カタッ

「でき、た」

ペンを置いて、真っ黒になった紙を持ちあげる。完成だ。理論は私の思いつく限りでは完璧で、これ以上のものは暫く作れそうにない。つまりこれでダメなら、私の力量不足、修行不足ということだ。紙を片手に亀裂を机と自分の間に開き、机上の物を手で落とし入れる。後で取り出す時にごちゃごちゃしているかもしれない。でもそんなことは今はどうでもいい。早く、早くこの理論を試さないと！

片づけを終わらして、誰もいない夜の館内を走る。あぁ、今度こそだ。今度こそ再会だ、メル。大図書館の重厚な扉を押し開け、後ろ手に司書時代に使っていた施錠の魔法を使う。元同僚から今でもこの魔法を使っていると聞いていたからこれで大図書館は大丈夫だろう。石畳を走りぬけながら亀裂を開き、手袋を交換する。今が夜で助かった。軽い認識阻害で亀裂を見られることもないし、走って人にぶつかることもない。箒にでも乗れればもっと早いのだけれど、愛用の物は数ヶ月前にバラバラにされたから仕方ない。あぁ、戦いの歌か浮遊術が使えれば。前者は体質的に不可能だが、後者は私の修行不足だ。いつもは徒歩かゲートで移動するから、あまり必要性

を感じ……。

「急いては事をし損じる、ですか」

一度足を止めて息を整える。そうだ、転移魔法があるんだった。旧世界に居る間は人目に着かないように街中で使用することなど無かったので、すっかり頭から抜け落ちていた。大きく深呼吸をする。結界が逃げることはない。ならば私が目指すのは「最速」ではなく「最高」の結果のはずだ、それがこんなことでどうする。

逸る心と高鳴る鼓動を落ち着け、亀裂から取り出した水を一口飲む。夜風が通りを吹き抜け、走ったせいで火照っていた体を優しく撫でつけていった。空を見れば欠けた月が見たもの全てを魅了しようと微笑んでいた。数多の星も彼女を引き立てようとひっそりと妖しく瞬いている。視線を少し落とせば、徹夜で実験でもしているのだろうか、学院にぽつぽつと灯りが付いている。何を専攻している人かは知らないけれど、ご苦労なことだ。

「さて、十分に頭も冷えました。そろそろ行くとしましょうか、ゲート」

「富を奪われた人々は渓谷にイチイの木で橋をかけ、安住の地を求め旅にでる」

右手を上げ、目の前にある結界をしかと見つめる。左手には先程書きあがったばかりの紙を持ち、足元にはヴィーティングが通りの石畳にその身を突き立てていた。周囲にはヤドリギの杭が六角形を模るように打たれている。これは言うまでもなく結界だ、中の魔力を外に出さないための。結界を解くということは、その結界に使わ

れていた魔力が解放されるということに違いはなく、高密度な結界一つに使われる魔力というのは相応のもであるため、警邏や野次馬などうるさいのが近寄らせないために必須だった。今七つの結界が解かれたこの場は、いつぞやのミステルティンに匹敵するほどの濃密な魔力が渦巻いている。そしてその魔力は私の言葉に呼応するかのように次々と姿を変えていった。

「凍てついた歯車がカノンで廻り始める時、生命の泉が安らぎを与えん。太陽と水は木々は育て、人はまた富を得る」

詠唱を続ける。木々が空へとその腕を伸ばし、泉は絶え間なく溢れ、人々は相好を崩している。その光景は宗教画の一場面であるかのように美しく、また自然と人の力強さを表していた。

「人々が生を謳歌し、新たな生が産声を上げる時に彼は現われた。吹雪と茨で全てを拒む、氷原の主たる巨人が」

場面は一転した。木々はその手に六花を抱き、泉は時を止め、人々は身を寄せ合い彼の者を見据えた。果てよりきた巨人が私の目の前で剛腕をふるうと、涼やかな風が髪を揺らす。さすがに魔力で冷気までは再現しないのか。巨人は得物であろう棍棒を片手に、じっと人々を睨んでいた。巨人にとって人々は侵略者でしかなく、この地に人がいなかったのは彼が強者だったからである。巨人は誰がその手に武器を取り、自身を狙うか見ていた。それは長く生き、何度も同じ光景を目にしてきた圧倒的な強者の余裕であった。だが。

「人々は驚き恐れたが、立ち向かいはしなかった。身の程を知る人の行動に巨人は感銘し、追い出す代わりに居城に来るよう伝える。一人の青年が旅立ち、残された人々は成功を祈った」

人々はついに武器を手に取らなかった。それは彼らが武力によって追い出された過去に依るものかもしれない。人々はただじっと肩を寄せ合い、子を守るだけであった。今までとは違う人々の行動に巨人は驚き、去っていく。巨人も疲れていたのだ、飽きずに愚かな人々が領地を荒らすことを。人々は集まり、やがて私そっくりなものが一歩前に出た。思わず声を出しそうになるが、今は詠唱の途中なので飲み込む。ここら辺はアドリブなのだろうか？

「幾重の門を押し開け、茨を切り払い、吹雪を打ち破る」

さらに詠唱を続けながら、右手をヴィーティングの握りへと持っていく。眼前には私そっくりな顔立ちの青年と、それを拒むかのような試練が顎門を開けて待っていた。右手に力を入れて構えると、青年も剣を構える。行こうじゃないか、氷の巨人が住むと言われる城へ。

門は剣を突き立ててこじ開け、茨の檻は切り払う。一歩でもその足を引かせようと吹き付けてくる吹雪には剣を突き出し、雲を切って見せた。もちろんこの行動を行っているのは全て青年であり、私は結界に魔力を注ぎながら剣を振っているだけだ。そして青年はその身を賭して進み、ついに最後の門へと辿り着いた。詠唱も、もう終わりだ。

「ついに彼は氷の巨人の居城へと辿り着く。日の光が降り注ぎ、淡く時には苛烈に輝くその城は彼に一つのことを思い出させた。旧い記憶の底に横たわる、暖かくも悲しい思い出。そこは彼の」

「「故郷だった」」

飴細工を割ったような繊細で優しい音が辺りを包んだかと思うと、

いつの間にか私は屋内に居た。最初に目についたのはテーブル、次に分厚い本とメガネであった。あぁ、既に擦り切れてしまっている思い出だ。だけれど、忘れることのない大切な思い出。

「ハル、少しは成長したじゃない」

「いえ、あれを見てから術を構成するのに二年もかかってしまいました」

いつの間にかテーブルの横に、淡い緑色のローブを着た女性、メルディン・カルディアナが椅子に腰かけていた。膝の上には黒猫が喉を鳴らして丸まっている。

「ハルが去ってからどれほど経ったかしら？　いつの間にか渋くなってるじゃない」

「アリアドネーを去ってから五年、術の構成に二年ですから約七年ですね。メルは何も変わっていませんね、私はおじさんになってしまいましたよ」

「ふふふ、今の方がわたしは好きよ？」

黒猫の体を揺り動かし、目を覚まさせる。二度ほど耳をはたき、うっすらと目を開けた黒猫は一度私に向き直り「ナァ」と鳴くと、奥へと去って行った。メルは椅子から立ち上がり、私と向き合い見つめあう。久しぶりに見たメルは美しく、強い意志と聡明さを秘めた瞳、白く薄い桜色の肌、紅いルージュの引かれた色香を放つ唇、もしかしたら以前よりも美しくなっていた。

「メル」

彼女の名前を口に出し、ギュッと腕の中に引き寄せる。甘く、そして妖艶な香りが鼻腔をくすぐる。帰って来た。私はやっと帰って来たんだ。

「メル」

もう一度彼女の名前を呼ぶ。名前を呼ぶたびに彼女の存在をより強く感じられるような気がした。メルも私の背中に手を回し、互いに首筋へと口づけをする。それは妖しく、また神聖なものだった。ここには誰も邪魔をする者はいない。私とメルはお互いが離れるまで、相手を感じあっていた。会話はなく、時々思い出したかのように互いの名を呼ぶ。今、確かに私は幸せだ。

「そういえばハル、まだ再会の挨拶もまだだったわね」

耳のすぐ後ろから声がする。息がかかりくすぐったいが、それすらも今は彼女を感じられる大切な物だった。そういえば確かにまだ挨拶をしていない気がする。それにもっと大切なことを忘れていた。

「ハルキです」

「……」

「一度だけ呼んでくれましたよね。これからはハルキと呼んで下さい、家族はみなそう呼びます」

「……ふふっ、わかったわハルキ。私のことはメルでいいわ、ハルキにしか呼ばせてないのよ？」

「それは光栄です。ではメル、ただいま」

「お帰りなさい、ハルキ」

そうして自然と口づけを交わす。互いの唇に触れるだけの、優しく甘い口付けだった。そして、それが誓いの口付けだったことは、私もメルも既に知っていることだった。暖かな時が流れる。この世界に来るまでは、いや今この時まではこんな穏やかな瞬間が来るとは想像もしていなかった。今なら私を襲った『世界』が目の前に現れても、恨みなど微塵も抱かないだろう。むしろ感謝するかもしれない。それが世界の常識的に正しいことかどうかは知らないけれど、少なくとも私にとってはそんな常識はどうでもいいことだ。

「それで、なにか面白いことはあったの？」

「色々なことがありましたよ。えぇ、それはもう嬉しいことから厄介なことまで」

いつも使っていた二人用のテーブルをはさんで会話する。結局あの後、お腹をすかせた黒猫がご飯をよこせと言わんばかりに擦りよってくるまで抱き合っていた。件の黒猫はお腹が膨れて満足したのか、今は身だしなみを整えている。メルと私は、買いなおしたお土産をお茶うけにティータイムと洒落込むことにした。

「厄介なこと？　あぁ、それって白の」

「メルも知っていたのですか……。いや、もうホント勘弁して下さい」

「その様子だと一悶着どころじゃなかったようね。その奇跡とやら見せてくれるかしら？」

「いいですよ。特に呪いも何もないんでじっくり見てやって下さい」

亀裂からヴィーティングを取り出してメルに手渡す。白銀の刀身がまた妙にメルに似合うなぁ。ただ、メルが持つには少々大きすぎる気がする。もっとレイピアのような細身な物が一番似合うだろうな。メルはしばらく刀身を眺めたり、鍔の中心付いている翠色の癒し石をつついたりしている。おそらく、なにか探査かそれに近いものをしているのだろうけれど、私が困ることは一つもないので止める必要もないな。

「ふぅん、意外と奇跡って現実的なのね。ただの強力な石じゃない。はい、もういいわ」

「人が知覚できる物でないと、奇跡とすら認識されませんからね。まぁ私にとってこの石は必要ですし、剣も頑丈なので重宝しています」

ヴィーティングを受け取り、亀裂にしまいながら答える。なにせ生半可な甲冑なら紙の如く切り裂く剣だ。剣術の心得なんかなくとも十分に対抗できる。無論、私は魔術師なのでそんなことはしないけどね。それでも木を切りはらったり、薪を割ったり、獲物を解体するなど大活躍な一振りだ。……なぜか頭に「十徳ナイフ」やら「今ならまな板もついてこの価格！」やれ浮かぶが、いやいや私は大切に扱ってますよ？　ホントですよ？

「それで、他にはどんなことがあったの？」

「あぁ、それと弟子がいました」

「……へぇ、それは興味深いわね」

すっと目が細まるメル。かといって怒っているわけではなく、むしろ私がなぜそんなことをしたのか興味深いといった目だ。私にとっても弟子をとるなんてあの時まであり得なかったので、その反応は当然だろう。

「さっきの奇跡――ヴィーティングと言いますが――を手にした後、ミステルティンを探している時に出会ったんです」

「ミステルティン？　ヤドリギの？」

「えぇ、ヤドリギの。野宿をしようと準備していたら、森の中から出てきましてね。最初は賞金稼ぎかと思ったのですが、どうやら私と同じく追われる方だったみたいで」

「よかったじゃない、お仲間が見つかるなんて」

「まぁ、当時は彼女の方が賞金は上だったんですけどね。なにせ、真祖の吸血鬼でしたから」

「……ハルキって、もしかしたら何かオーラでも出しているんじゃないかしら？　その話、詳しく聞かせなさい」

「といっても、吸血鬼化に関しては何も知らないのですが……」

一度、完全に目を閉じた後に問いかけてきたメルに答え、それか

らエヴァとの旅の話をする。領主の娘で、誕生日にいきなり吸血鬼にされたこと、術者はまだ見つかっていないこと、家族はもういないこと、ミステルティンを取りに行ったこと、魔法を学ばせていたこと、そして卒業したこと。

「といったところですかね。その後は私もこちらに帰ろうとしてゲートポートで一波乱起こしたくらいです」

「そのゲートポートの一波乱は後で聞くとして、その不思議なゴーレムの話をもう一度聞かせてくれるかしら？」

「？　いいですよ」

もう真祖の吸血鬼に興味はなくなったのだろうか？　確かに私が答えられることはないし、メルがその術式を必要としているとも思えない。なにを思ってそう聞いたのかは分からないけれど、私と同じく探究心に依るものだろうな。

「酒場で男から聞いたのが始まりです……」

それから酒場で聞いた話からエヴァに人形師の話をしたこと、村で感じた違和感、アルスターとの出会い、そしてエヴァとの別れを思い出せる限り正確に話す。メルは相槌を打つだけで質問をすることはなく、ただじっと話を聞いていた。

「そして私はその村を去りました。それで、何が気になったんですか？　やっぱりエヴァのことですか？」

「それも確かに気になるわ。だけどハルキ、わたしが一番気になっているのは別のところよ」

「ではアルスターのことですか？　彼の技術は凄いものでしたから、私の話だけでは十全に伝えきれないのが残念です」

「それも一番ではないわ。ねぇハルキ、その酒場の男の情報は正しかったのかしら？」

「え？　まぁ、正しかったと思いますよ。人間と見分けがつかない人形がいましたし」

「そうね。わたしは実物は見ていないけど、ハルキがそういうならその通り見分けがつかないのでしょう。でもね、見分けがつかない精巧さのそれをその男が見抜けたとは思えないのよ」

「……」

「それに、消臭の魔法ってどんな意味があったのかしら」

彼の話によれば、何とか生き延びた魔法使いが必死に消臭の魔法を唱えていたはずだ。あの村を訪れた私からすれば、消臭の魔法の無意味さも、生きて村から逃げるという異常さにも違和感を覚える。あの場ではエヴァの感じた血の臭いとかだと思っていたが、あれは真祖の吸血鬼だから感じ取れたことだ。しかも、五感も知性もある自律人形相手に意味があるとはどうしても思えない。メルから投げ込まれた疑問は、石を投げ込んだ水面のように私の中に広がり、様々な可能性とそれの否定・疑問・肯定がそれぞれぶつかりあっていた。それらはやがて、混ざり合い一つの解を導き出す。

「別の、村が……ある？」

「可能性が最も高いのはそれね。さて、ハルキ。帰ってきたら新婚旅行に行こうと言っていたけれど、どこに連れて行ってくれるのかしら？」

「あ、えぇとそれは、日本に行こうかと」

「ハルキの元・故郷ね。でもせっかくの新婚旅行だもの、すぐに終わっちゃ面白くはないわ、寄り道していきましょう。それにハルキの弟子にも会いたいわ」

「そうですね、私も間違った答えを得たままというのは気持ちが悪いです。それにメルがいればまた違ったものが見えるかもしれません」

正直、自分の間違いを突き付けられるのはあまり気持ちの良いものではないが、その事実を知ったまま放っておくことの方が気持ち悪い。それにメルと一緒なら、どんな長旅でもきっと楽しいだろう。これからは二人一緒だ、焦ることはない。それならば気の向くままに流れるのも、また一興だろう。

それから二人で一晩過ごし、夜が明けると場所の確認や必要な物を準備した。最初の目的地は私の卒業生であり、現人形師見習いのエヴァがいるサンチマガストロだ。

ep. 16　メルと私と寄り道と新婚旅行

「あら、ここの料理はなかなか美味しいわね。それとも出来立てだからかしら」

「毎日食べても飽きがこないような味付けですね。私は薄味が好きなので少々辛く感じますが、肉体労働をする人にはちょうど良いのかもしれません」

向かい合って料理をつつきながら会話する。私とメルは今、不思議なゴーレムの話を聞いた酒場で夕食をとっているところだ。どうせこの街を通らずに村に行くことは不可能だったので、ついでなら件の男性にもう一度話を聞いてみようということになったのだ。勿論、彼との連絡方法などないので待ち合わせなどできないのだが、特に期待しているわけではないので会えなければそれでいいというスタンスだ。

「やはり来ませんね。どうしますか？　宿にもう帰りますか？」

ハンカチで口をぬぐいながらメルに尋ねる。ここに残っても彼が現れることの方が可能性は少ないだろう。他の情報を聞けたとしても、今は必要のないことだ。それならば今日は早めに休んで、明日の朝早くに出発するのも悪くはない案である。

「そうね……。ハル、入り口側に座っている二人組の会話を悟られずに聞くことはできる？」

「え？　まぁ、強力な結界も感じられませんし不可能ではないですが。ここに声が流れるようにすればいいですか？」

「ええ。こっちの結界はわたしが展開するから流すだけでいいわ」

「わかりました。風よ」

周囲の魔力に干渉し、魔力を流した風を作る。そしてその風を悟られないようにゆっくりと、そして薄く伸ばしていく。風を使うのは苦手だが、魔力のコントロールには自信がある。私の魔力を孕んだ風は二人組を包むように止まり、空気の震えを確かにこちらへ届けた。

「……で、どんな具合なんだ？」

「酷いものさ、街が死んでるのは初めて見たぜ。老人どもはユスティニアヌスが甦ったとか触れまわってる」

「愚かな連中だ。それで司教はなんと」

「それはどの司教のことだ？　アレッサンドロは一昨年に老衰で、チェーザレは去年に死んだ。エリオは三か月前でコンスタンチオは先月、一週間前にはフェデリコも死んだな」

「そんな……まさか……」

「こうもころころ変わっちゃあ敬う気も湧かないぜ。元々そんな気はねぇけどよ。今も覚えてるだけ言ったが、倍は死んでるんじゃねぇか？」

聞こえてくるのは物騒な言葉ばかりだ。食事はとっくに下げてあるので問題はないが、耳触りが良くなるわけではない。それにして

も何が起こっているんだ？　ユスティニアヌス、大量の死、中世、ヨーロッパ……心当たりが全くないわけではない。私の世界でも起きた出来事で、ユスティニアヌスとの関連はこの世界の本で知ったことだ。つまりあの病があるのは私は知っていた。それが今、起きたということなのか。

「メル、これはおそらく」

「えぇ、ユスティニアヌスと大量の死で想像できるのはあれくらいよ。どうやら、さっさと村に行ってすぐにでもここを離れた方がいいわね」

ヨーロッパで三千万人ほどの死者を出した悪魔、黒死病の訪れだった。

暗い闇の中、月明かりを頼りに十字架を探す。朝を待たずにして出発することに関して、お互い異論はなかった。街道に沿って転移を行い、転移先で十字架を探す、そしてまた転移。日が昇っていれば遠視ですぐに見つけることもできただろうが、電気もないこの時代にはそれは夜のカラスを見つけるようなものだった。今は一秒でも早く村に着くこと。それだけを考えて移動していた。……あった！

「メル！　あと一度の転移で着きます」

「わかったわ。念のため体の表面に障壁を張りなさい。さっきの話からすればもうここら辺に来ている可能性もあるわ」

「勿論展開済みです」

「ならいいわ、離れないように」

足元から沈んでいく。影の転移魔法だ。光の乏しい場所で正確な転移は私には難しく、メルの影を使った転移で移動していた。高等な転移魔法で、さらに他人も同伴させるなんてあり得ない技術だが今はそれを聞く場合でもなかった。

「ここがその村ね？」

影から出ると、古い石造りの家々に大きな畑や井戸、それと物見が見えた。奥には夜なので視認できないが、教会らしき建物も見える。さすがに外に出ている自律人形はいないが、間違いなくここはサンチマガストロだろう。

「えぇ、そうです。たしかアルスターの家は教会の裏手にあったはず。急ぎましょう」

「そうね。でも、その前にお客さんみたいよ？」

メルの言葉を聞き終わる前に、私もそれを視認していた。自律人形だ。まだ少し距離があるため誰かは分からないが、その可能性が一番高いだろう。

「こんな時間に誰ですか？」

「私です。覚えていますか？　二年前に金髪の少女とここを訪れたのですが」

「金髪の少女？……あぁ、エヴァちゃんのことですか？」

「えぇ、そうです。実は用事があって彼女に会いに来たのですが」
「エヴァちゃんは捨て子だったのを神父さんが育てているのよ？本当の目的は何かしら？」

相手はどんどん距離を詰めてくる。女性だ。手には月明かりを反射するナイフが握られている。まずい、いま騒動を起こすわけにはいかない。彼女からすれば私は教会のものだろう。せめて二年前のことを知っている人物であれば、と思っていたがどうやら思い通りにはいかないらしい。今は一秒でも時間が惜しい。どうする？

「貴方達を敵と認識しました。排除します」

「ちっ、こんな時間はないのに！」

突っ込んでくる彼女に向け右手を突き出す。怪我をさせることはできない、それでは教会の者となんの変わりもなくなってしまう。教会にまでいければ、私達の身は保障されるだろう。だけれどそれは敵対していなければの話だ。

「メル、目を瞑って下さい。　光よ、我らに揺り籠を」

女性が一番接近した瞬間に魔法を発動する。この魔法をこの村で使うのは二度目だ。そして目暗まし目的で使うのも。人形に目暗ましが通用することはあの夜に初めて知ったが、また同じ手を使うとは思っていなかった。夜に慣らされた視覚が急な光に対応できるわけではなく、女性は思わず蹲る。こちらに攻撃の意思はなく、女性の視力も回復するだろうから正当防衛として認めてもらいたいな。

「メル」

「あの教会までよね？」

そして再びの影の転移により教会の前へと移動する。後ろでは先程の騒動を見たのか何人かが家から飛び出していた。

「おやおや、これは一体何事ですか？」

問いかけに驚いて視線を教会に戻すと、いつぞやの神父が立っていた。手には何も持っていない。そしてさも驚いたといった顔をしている。彼が私のことを覚えていれば話は早いのだが、先の女性のことを考えれば楽観視はできないだろう。ここは一か八か、賭けに出るしかない。

「私です。エヴァを預けたハルです。アルスターさんはいますか？」

「排除しま」

「待て」

この村の秘密であり、もっとも大切な人である人形師の名前をだすという賭けに失敗したかと思い右手を構えると、人形の言葉を遮るように男の声がした。よかった、これでやっとまともな話ができる。

「ククッ、久しぶりの客人がまたお前とはな。こんな夜更けに何用だ？　しかも『刻む者』など引き連れて」

「用件は元生徒に会いに、そして彼女は私の師匠です。こんな時間

に訪問したのも訳があるのですが、今は一秒も時間が惜しい。それにできれば村人たちには聞こえない方がいい」

「何やら厄介事のようだが、まぁよいだろう。ついてこい」

「話が早くて助かります。メル、行きましょう」

「そうね。それと、今にもこちらに駆けてきそうなあれらは放っておいていいのかしら？」

「おぉ、そうであった。こいつらは我が客人だ、後は頼んだぞ」

「わかりました」

「では行くとしよう。ククッ、それにしても真祖の吸血鬼に人形師だけでなく、ルーンの大魔術師とも縁があるとはな。ハルの周りには不思議な魔力でも渦巻いているのではないか？」

『境界亡き人形師』、アルスターに着いていく。後を頼まれた神父は人々の前に立ち、事情を説明していた。中には私を覚えている者もいたのか、何人かはすぐに家へと帰った。メルはその人形達の動きを眺めていたが、彼女には一体なにが見えているのだろう？そして私がそれと同じモノを見る日はくるのだろうか？　それとアルスター、最後の一言は随分最近に聞かされた気がする。誰にとは言わないが、二人にこう言われるということは一度お祓いでもした方がいいのだろうか？　まぁ、今のところ悪かったことはないので良しとするか。

「さて、先ずは自己紹介をするとしよう。我はアルスター、人形師をしている」

「えと、私はエヴァンジェリン・マクダウェル。人形師の見習いをしてい、ます」

「私の紹介は不要だと思いますが。ハル、魔術師と魔法使いです。そして彼女が」

「わたしはメルディン・カルディアナ。魔術師で、ハルキの師匠をやっていたわ」

家に着くと、アルスターはエヴァを起こしてくると言い今は四人でテーブルに着いている。私の向かいがアルスターで隣がメル。そしてメルの向かいにエヴァという席順だ。そして戻って来た神父がお茶とお茶うけを持ってきてくれた。うぅむ、私もいつか住みかを作ったら家政婦に欲しいものだ。

「それで、エヴァに会うという用件はこれでよいかな？」

「えぇ、元気そうでなによりです。本当は少し滞在してメルに適性検査をしてもらうつもりでしたが、とりあえず会えただけで良しとしましょう」

「この人が……先生の師匠……」

エヴァはなにやらメルに熱い視線を送っているが、それは恐らく尊敬の眼差しだろう。エヴァにとって最強の魔法使いとは私であったのだし、そのさらに上がいると知ればそうなるのも無理はない。まったく、なにもこんな時に重ならなくても。

「ハルよ、時間が惜しいの意味は何だ？」

「簡潔に言います。黒死病が発生しました」

沈黙が下りる。アルスターは何かを深く考え込むように眉間に手を当てている。メルは時折紅茶を口にしながらエヴァを観察するだけで、積極的に話に参加はしないつもりらしい。エヴァは黒死病がわからないのか、突然の空気に私達の顔を見回している。

「それは真か」

「本当です。今はシチリアやジェノヴァ、フィレンツェで流行しているようですがあそこは貿易の要。すでに全土に広がっているとみていいでしょう」

「……それならば時が惜しいのも納得だ。知らせてくれて礼を言うぞ」

「いえ、私達も偶然知ったことですから。貴方の問題はこれからです」

「せん……ハル！　あの、黒死病って、何？　そんなに危ない病気なの？」

「ハルは彼と少し話を詰めておきなさい、説明は私がしておくわ。確かエヴァちゃんだったわね、私のことは師匠とでも呼んでちょうだい。それで黒死病と言うのは昔、ユスティニアヌスの頃に……」

「え、あ、うん」

やっぱり黒死病を知らなかったエヴァの相手をメルに任せる。だが、問題はこれからだ。病が何かを知っているからといってそれが完全に防げるわけでもない。私の世界では完全な治療法が確立されていたかもしれないが、専門的なことなど私が知っているはずもない。私の黒死病に対する知識と言うのは、中世で大流行したこと、ダニなどで広まる感染症であること、劣悪な衛生事情が一員であること、そして多くの人が病気以外で殺されたことくらいだ。

「ハルよ、魔法使いの間では何か防ぐ手立てや治療法はないのか？」

「黒死病の治療法として確立された物はありません。ただ、感染症であることと不衛生が原因であると看做されています。拡大を防ぐには自身と身の回りを清潔にすること、元を運ぶネズミを駆除することですね」

「そうか……この村はどうなると考える？」

「病自体は避けられるでしょう。村も綺麗ですし、村人も水浴びをする習慣があるのか清潔を保っています。そもそも自律人形はかかりませんし、彼らに駆除などさせればより安全でしょう。ですが……」

「生贄。いや、捌け口の対象とされる可能性が高い。そういうことか」

「えぇ、その通りです」

きつく手を握り締めながら言葉を吐くアルスター。私の隣では説明が終わったのか、メルが紅茶を楽しんでいる。説明を受けた側で

あるエヴァはメルの真似をするように紅茶を口にしているが、内心の動揺が腕にはめているミステルティンに良く表れている。私は目を伏せ、迫りくる最悪に想像を巡らせた。

死の病が蔓延る世界で、平和に暮らす人々はどう見られるだろうか？　時代が進み、医療技術が発達すればそれは抗体の保持者として協力を要請されるだろう。そして多くの人は抗体を持っていた人に対して感謝、あるいは尊敬するはずだ。だが、今この世界ではどうだろう？　予防接種なども存在しておらず、細菌すら発見されていない。黒死病の治療法として、「雨の日に蜂蜜を舐める」や「一度口に含んだワインを戻してから飲む」なんてことが巷で広がりを見せる時代だ。そんな世の中で死の病が流行し、一握りの人々が変わらずに暮らしていればどう思われるだろうか？　恐らく反応は二通りだろう。信心深いゆえの奇跡と捉えるか、病の原因たる悪魔と捉えるか、の。

最初のうちは前者の方が多いかもしれない。「彼らは信心深く慎ましやかに生活をしているからご加護があるんだ、だから我々も彼らのように生活をしよう。そうすればきっと神は我々を救って下さる」　そんな風潮が広がり、無事な人々は模範とされ尊敬されるだろう。だが、それにどれだけの効果があるだろうか？　通りを歩けば死とすれ違い、窓を開ければ地獄が見える。そんな街で慎ましく生きたところで何も変わらない、死の行進は止まらない。「我々は彼らのように慎ましく生きている。なのに我々だけなぜ罰を受けるのか？」この疑問が出てしまったのなら後者になるのは早い。火あぶりという言葉の代名詞、かの有名なジャンヌ・ダルクさえ処せられた魔女狩りの始まりだ。

「近くの街で黒死病が流行るのは間違いないでしょう。そうすれば発症していない人々が街から出て、街道を走り、この村を見つける

のも必然です」

「隠し通すこともできぬ、か」

「ここは英王教会にも目をつけられていますからね。それに外との交流も無いわけではありません。今更隠し通すのは無理でしょう。そのうち英王教会も貴方を捕まえようと襲撃するかもしれません。いえ、その可能性を考慮しておいた方がいいでしょう」

「街を清潔にしろなど言っても遅いか。それは鳥に空を飛ぶなと言うのと同じこと。聞く耳はもたんだろうな」

街に住む彼らにとって、汚物を窓から投げ捨てることは当たり前のことなのだ。それはもう、海沿いに住む者が海で生計を立て、森の中に住む者が森の恩恵で生きるくらいに普通なのだ。そんな彼らにそれを指摘しても、それは海にコップ一杯の真水を入れるほどに無意味なことだ。

「アルスター、決めるのは貴方です。私はただ偶然にそのことを知ったから教えただけで、積極的に救いに来たわけではありません」

「わたしとハルキは遠い東の国に行く予定よ。それが大元の目的であるし、わたし達は魔術師だもの。無意味な救済などして殺されるのはごめんだわ」

再び沈黙するアルスター。彼が何の為に、何を思っているのかは私は知らない。知る必要もない。エヴァはメルの言葉に驚き、少々憤慨しているようだが私もメルと同じ考えだ。私はできる限り生きなければならない。それは元の世界に帰るためでもあるし、今はメルと少しでも長く時間を共有したいからでもある。少なくともそこ

に人助けなんて言葉は一つもない。急いでいたのも人の目が厳しくなる前に日本へ行きたかったからだしね。もし、アリアドネーから出る前に知っていればここには来なかっただろうな。

「さて、ハルキ。エヴァちゃんのことで話があるのだけれど」

「あぁ、なんですか？　適性のことですか？」

「えぇ。ついでだから見てあげようと思って」

「それはあの話を聞く前の予定じゃないですか。一週間も滞在するのは危険です」

「二時間貰えれば十分よ」

そう言いながら袖からフラスコを取り出すメル。フラスコは空ではなく、中に一軒の家があった。さながらボトルシップならぬフラスコハウスといったところだ。もちろん彼女が亀裂を使えるわけでも、そこにフラスコを持ち歩いていた訳でもない。空間を作り出せる彼女にとって、服にそれくらいの術式を刻むのは簡単なことなのだ。もっとも、中の時間を完全に停止させたり、亀裂のように無限大な空間を作れるわけではないらしいが。ちなみに私が袖口から取り出すのも、亀裂が見えないようにとの配慮もあるが彼女の影響を受けているのは言うまでもない。

「魔法球ですか？　何時の間にそんなものを……第一、メルは必要としていないでしょう？」

「研究成果を提出しなさいとか五月蠅かったから仕方なく作ったのよ」

「そういえば私が卒業する前にも、そんなことを言ってきてましたね。あれからまたあったのですか？」

「今度はどこかのお偉いさんの息子が大人になりたくないとか何とか。それで馬鹿達が一儲けしようと思ったんでしょうね」

「うわぁ……呪いとか掛けてませんよね、それ？」

「そんなことしてないわよ、ただ時間の流れを３６５倍にして一度入ると一月は出てこれないようにしただけ」

「それで結末は？」

「息子は不法侵入と誘拐の罪で処刑、一緒に入ったバカは寿命で死んだわ。今でも息子は捜索中らしいわよ」

「まぁ自業自得ですね」

「あの、先生。魔法球ってなに？」

学術都市であるアリアドネーでは不定期的に勉強、あるいは研究の成果を求められる。これは学ぶ意志あればこそ身の安全を保証するアリアドネーにとって重要なことで、学生には考査や試験といった形で、研究者や教授達には自身の研究結果を披露または論文の発表といった形で課せられるものだ。除外されるのは店や市場の屋台などの人の生活に必要な物を提供する商人や、己の時間を持てない中央アリアドネー学院の学院長、戦乙女候補学校の学校長、魔法騎士修練院の司教くらいである。アルバイトをしていた大図書館も年に一度、新規入荷分の目録を提出しているし、魔法騎士団も半年に

一度、トーナメント形式の大会を開いている。不定期なのは、研究の分野や過去の業績を考慮して提出期間は変動するため、学生と同じように半年に二度の提出を定められている者もいれば、十年に一度の提出を求められる者もいるからだ。

エヴァは魔法球のことを知らないようだが、無理もない。魔法球というものはとても希少な物で、現在にはわずか十個しかないと言われている。しかも十個全て保存されているわけではなく、雪原に埋まっているだの、火口でドラゴンが守っているだの、海底に沈んだの言われている始末だ。時折、闇市などに出品されるが、それはむしろ騙すつもりもない良心的な詐欺と言えるだろう。確か記憶によればメガロメセンブリアに二つ、ヘラス帝国に一つ、アリアドネーに一つ、オスティアに一つ保管されているはず。もちろん公開されているわけではない。ともすれば伝説であるとさえ思いこんでいる学生もいるのではないだろうか？

「もう先生ではないのですが、まぁいいでしょう。魔法球と言うのはこのある容器の中に別の世界を組み立てた魔法具のことです。現存する数は少なく、作成にも高い技量と膨大な魔力、そして空間作成系統の適性がなければいけません。まぁ、見た方が早いでしょう」

「これに触れてみなさい。大丈夫、害はないし時間の調整もちゃんとしてあるわ」

「……わかった」

エヴァがおそるおそる魔法球に手を伸ばす。そしてその手がフラスコに触れたその瞬間、エヴァの姿は消えていた。というかそんなに警戒しなくともいいのに。騙したことなんて一度も……あまりないのだから。いや、別に騙すといっても命の危機に関わるようなこと

は断じてしていない。ただちょっと眠気覚ましの為に紅茶を熱々にしたり、寝癖を指摘しなかったくらいだ。うん、微笑ましいものだね。

「わたしも行ってくるわ。ハルキは念のためここで待っていなさい」

「わかりました、外は任せて下さい」

後を追うようにして魔法球の中へ姿を消すメル。外とは、つまり外敵だ。もともと魔法球とは周囲に影響が出る実験や、魔法の練習などに使われるものであるため内部からの強度は高い。それに比べ外部からの強度とは言うと、例えば一流の魔法使いが一点集中すれば破壊することは不可能ではない。これは魔法の限界ということもあるが、なにかしらの要因で魔法球内部に人が閉じ込められた際に救出できるようにとの意図もある。ちなみに魔法球にもランクと言うか格というものはあり、最高級品は内部と外部の時間が異なるもので、保存されていない残りの五つの中にあると言われている。ちなみにメルが持っていたものは「時間を自由に変更できる」ので理論上は存在しない一品だ。もちろんこれは魔法球ではなく、メルの力に依るものだから反則みたいなものだけどね。

「アルスター、この村に感知結界と目を置いても良いですか？　もちろん異常があれば知らせます」

「よかろう、いやむしろ頼む。我は今のうちにメンテナンスをしておこう。いつもの順番で連れてきてくれ、用件は緊急メンテナンスと伝えればよい」

「わかりました。ではハル様、よい時間を」

亀裂から砂時計を取り出して時間を計る。そしてアルスターの了承を得て、村を囲うように結界を張り上空に遠視の魔法を使う。結界で感知したものを遠視で確認するのが目的だ。夜も明けてきたので、村全体くらいなら見通すことができる。とりあえずはこれでいいだろう。紅茶を飲みながら、メンテナンスを見学する。アルスター曰く、見られたところで真似ることなど不可能なので追い出されることはなかった。訪ねてきた人形は、年配の男性から年頃の女性まで多種多様であった。ついでに眼福だったことをここに付け加えておく。

「ただいま、ハルキ。なにか変化は？」

「特に何も。強いて言うならそろそろ朝日が昇りそうです」

最後の一粒が落ち切るというときに、二人は帰って来た。エヴァは帰ってくるなり机に突っ伏しているが、はてさて検査と称して何をされたことやら。まぁ、とりあえず結果を聞いておこう。

「それで、どうだったんですか？」

「なかなか見どころのある、面白い子だったわ。光はダメダメだけど、闇と氷は天才、次いで風で残りは少し苦手ってところかしら。治癒系統は全くダメだけど、この子には必要ないでしょう。それとやっぱり空間作成の見込みがあったわ。その内に魔法球を作れるようになるんじゃないかしら？　この子には永い時間がある。きっと誰も到達していない、そしてされることのない領域へ辿り着くでしょうね」

空間作成系統に適性があるとか、やはり私はなにかフェロモンでも発しているのだろうか？　元一般人で、現真祖の吸血鬼で、さらに魔法使い全体の中でもかなり希少な空間作成系統の素質があって、しかもその才能もあるとか正直伝説レベル、映画とか漫画の主人公の主人公も真っ青な多才さだ。

「うーあー」

そんな才女は突っ伏したまま奇妙な鳴き声を上げていた。いつかは世界を救う戦いに出たりするのだろうか？　いや、むしろこの経歴なら世界を我が手にの方がしっくりくる。決戦は異空間で天地を割る熱い戦いを英雄として欲しいなぁ。

「ハルキ、思考が漏れているわよ。まったく何を考えているのかしら」

「えっ？　ああ、すいません。いや、そういう物って心躍るじゃないですか」

「なら参謀役で出てみれば？　定番じゃない、老獪で冷酷な参謀なんて」

「そういうのは当事者じゃないから面白いんですよ」

「うぅあっ！」

メルと二人でふざけている間にエヴァの充電は終わったようだ。よく物語では英雄誕生の知らせを察知した魔王が襲撃するが、運よく英雄は生き残ったみたいな話がある。けど、もし私が当事者になったら完全に焦土にするだろうな。ああいう情けを掛ける話は物語

を展開させる以上、仕方のないことだけれど、現実的ではないと思う。もし、現実にそんなことをする奴らがいたら作戦会議を是非覗いてみたいものだ。……いや、空想だと思っていたけど、魔法というものがあるこの世界では実際に起きた可能性も捨てきれない。

「先生は、いつもこんな修行してたの？」

「どのことを指しての質問か分からないので、黙秘します。というか、やはり検査だけでなく修行もしたのですね」

「少し時間が余ったからついでにね。弟子の弟子なんて滅多に見れるものじゃないもの、それに素質がある子なら伸ばしてみたいと思うじゃない」

「まぁそう言われればその通りなのですが。ちなみに何をされたのですか？」

「悪魔と一対一」

「なら普通ですね」

「ちょっと待った！」

悪魔との殺し合いなどスタンダードな修行だ。戦う、生き残る技術と言うのは戦いの中でしか新たな発見はなく、魔法はその時の用途に応じて作られるべきなのだから。これは何も魔法に限った話ではない。一般的な武術においても実戦経験というのは重要な物だし、戦闘に限らず料理や狩猟など身近なことにも実践とは必要な物だ。エヴァは両手を上げて、私を見つめているがどうしたのだろう？

「何ですか急に大声をだして。悪魔との戦いなんて普通ですよ？」

「いや、おかしいでしょ！　しかもすっごく強かったし！」

「メル、爵位級でも相手させたのですか？　エヴァには流石に早すぎると思いますが」

「いや、いいとこ上位どまりだろう」

「なら普通ですね」

「だからちょっと待った！」

流石にあまり実戦経験もなく、魔法も独学なエヴァに爵位級は厳しすぎる。正直なところ、数秒持てば充分と言ったところだろう。だがせいぜい上位どまりなら相手にできなくはないはずだ。それくらい爵位級と言うのは隔絶された実力の持ち主なのだ。ちなみにこの「実力」という点が大切なポイントである。魔力タンクでいいなら掃いて捨てるほどいるしね。

「まったく、一度ならず二度も声を張り上げるのは、レディとして褒められたものではありませんよ？」

「いや、だって上位だよ、上位！　普通はレッサーデビルとかゴーレムを相手にするものじゃないの？」

「小鳥相手に戦ってなにを得られるというのですか。そんな者と戦うなら魔力のコントロールを練習した方がよっぽど為になります」

「じゃ、じゃあ先生は上位なんて楽勝だっていうの？」

「悪魔にも個人差や相性というがありますから一概には言えませんが、伯爵級までなら相手できると思いますよ。それに目の前でメルに召喚してもらった悪魔と戦ったのでしょう？」

「え、ああうん、そうだけど」

「ならば有利なのは私達です。いいですか？　戦闘と言うものはその場全ての物に影響を受けます。氷原なら寒さで体力が奪われ、湿地帯なら足を取られることもあるでしょう。たとえ何もない草原だとしても、下には土がありそれを利用して煙幕やまたは落とし穴などが作れます。今から戦闘する場所のことを知っている、そして戦闘が始まるタイミングを知っているというのは大きなアドヴァンテージなのです。魔法だけが全てではなく、その場において最適な手段を考え選び取ることが戦闘の本質。わかりましたか？」

「うーあうあー」

再び奇妙な鳴き声を上げて突っ伏した。魔法とは本来必要があるから生み出されるもので、型から入るのは不自然なのだ。エヴァは急いで力をつけなくてはならなかったので本を読ませたけれど、もう少しはっきり伝えて置くべきだったかもしれない。まぁ今からでも十分に間に合うだろう、たぶん。

「別に今まで習得した魔法を捨てろなんて言いません。ただ、その魔法に囚われてはダメです。広範囲の魔法は集団だけでなく個人にも有用ですし、巨大な敵だからといっても魔力を注ぎ込んだ魔法の射手で貫くことは不可能ではありません。全ては使い方次第です」

「ふふっ、まるで先生みたいね」

「一応、先生でしたから。先生らしい事などしたのは初めてかもしれませんけどね。それで、わかりましたかエヴァ？」

「いつか私だけの魔法を作り上げて、見返すんだからー」

机に向かって宣言するエヴァを見て、自然と頬が緩む。弟子の成長というものはやはり嬉しいものだ。それが例え夢を語っただけだとしても、何か大事な暖かい物を手に入れた気分になる。

「さて、そろそろ出発しましょうか。今から動けば、昼前には着くでしょう」

「そうね、早く行動するに越したことはないでしょう」

この村での目的は全て果たした。強行軍になってしまうが、安全なところで休息を取った方がいいだろう。

「そうだな、あまり時間はかけられぬ。またの再会を楽しみにしてるぞ」

「もう行くの？」

アルスターは何やら作業をしながら別れの挨拶を告げるが、エヴァは顔を少しだけ上げてそんなことを聞いてきた。目に少し光るものがあるのは気のせいではないだろう。全く、卒業したのに手間のかかる生徒だ。だが、嫌な気持ちは微塵もしない。

「えぇ。急がないと厄介事に巻き込まれてしまいますからね。そういえばエヴァはどうしますか？」

「さっきも言ったけど、着いてきたいのなら構わないわ。そうよね、ハルキ？」

「それがエヴァの意思なら」

「……」

アルスターは神父と何やら話し合いをしており、干渉する気はないようだ。おそらくこれが平時なら修行の途中だと、まだ未熟者だといって許さないだろうな。けれども、いまは非常時であり、アルスターはこの村を守るつもりである。言い方は悪いが、中途半端なひよっこの世話なんてしている余裕もなくなるかもしれないのだ。それに比べて私達の旅には余裕がある。メルもいるし、日本には土着の集団もあるから賞金稼ぎの襲撃なんてないだろう。エヴァは魔法の修行でふらふらになるかもしれないが、少なくとも身の安全は保証できる。エヴァには今二つの選択肢があり、決めるのは彼女自身だ。

「……いや、私は行かないよ」

エヴァの答えは否だった。メルは予想通りと言った顔をしているが、おそらく魔法球の中でも同じようなやり取りがあったに違いない。さて、外もすっかり朝だ。そろそろ出発するべきだろう。

「では、こんどこそ行くとしましょう。アルスター、次に会った時はなにか有意義な話し合いでもしましょう。エヴァはしっかり修行に励みなさい」

「私が言ったことは欠かさずやるのよ？　そうすれば世界が変わる

わ。それじゃあ縁があったらまた会いましょうね」

手を振るエヴァと、じっとこちらを見るアルスターのを視界に収めながら影へと沈んでいく。これからヨーロッパは未曽有の事態に巻き込まれていくだろう。その混乱の中に何が生まれ、消えていくか私は知らない。知るつもりもない。私は私の思うように生きるだけだ。さて、日本に着いたらまず何をしようか？　やはり京都観光だろうか？　お寿司ができるのは江戸時代だった気がするし、天ぷらもまだか。いや、この世界なら既に存在しているのかもしれない。まぁ、なにはともあれせっかくの新婚旅行である。思いっきり楽しもうね、メル。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3879q/

お家に帰ろう

2011年4月2日08時54分発行